

旭・小島古墳群

— 林地区 I —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書IV

2006

本庄市教育委員会

序

本庄市はかつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また国学者塙保己一誕生の地として広く知られているところです。そうした豊かな歴史的背景をもつ本庄市は、また多くの貴重な埋蔵文化財にも恵まれ、旧石器時代から近代に至るまでの実にさまざまな遺跡が分布しています。

本書に報告の旭・小島古墳群は、埼玉県教育委員会の選定を受けた重要遺跡のひとつで、昭和63年度の小島西土地区画整理事業の開始以来、数多くの発掘調査が実施されてきました。その結果、旭・小島古墳群には、すでに消滅している古墳が多数存在すること、古墳群の形成期間は4世紀から7世紀にかけて400年近くの長きに及ぶこと、古墳群の範囲が1km四方以上の広大なものであることなどの事実が判明し、県内でも最大規模の古墳群であることが解明されてまいりました。また、古墳群の構成も、古墳時代前期における方墳群の築造を契機とし、古墳時代中・後期には前方後円墳や大型円墳が造営され、さらに古墳時代終末期には多数の小形円墳が築かれるというように、きわめて複雑な様相を示し、学術的にも貴重な遺跡であることが認知されつつあります。本書には、今日の調査成果の中から、万年寺八幡山古墳の箱式石棺と鉄剣、万年寺つつじ山古墳の石製模造品など、全国的に見てもきわめて貴重な資料の報告を取ることができました。

今後は、本書が学術研究の発展に資するとともに、一般にも広く活用されることによって、郷土史への関心を高め、埋蔵文化財への理解が一層深められることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた関係諸機関、直接調査の労にあたられた皆様に心よりの御礼を申し上げます。

平成18年3月

本庄市教育委員会

教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市小島2丁目、3丁目、小島、下野堂ほかに所在する旭・小島古墳群発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄市小島西土地区画整理事業にともない、事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査地点ごとの調査期間、調査面積、調査原因および調査担当者は、それぞれ各節の冒頭に記したとおりである。
4. 整理調査期間は以下のとおりである。
自 平成17年4月1日
至 平成18年1月31日
5. 整理調査および本書の編集担当者は以下のとおりである。
本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之
6. 本書の執筆担当者および執筆分担は以下のとおりである。
本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之 I、II、III-1・(2)a, c, 3~10
同 松本 完 III-1・(1), (2)b, d, 2・(1), (2)b, 11~13
同 的野善行 III-2・(2)a、V
㈱パレオ・ラボ 黒沢一男・中村賢太郎 IV
7. 本書に掲載した発掘現場写真の撮影は各発掘調査担当者が行なった。
8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
9. 万年寺八幡山古墳の石棺石材については埼玉県立本庄高等学校教諭中村正芳先生に鑑定いただいた。
10. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。

ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

秋元陽光 新井 端 石塚三夫 石橋 充 稲村 繁 犬木 努 井上裕一
入澤雪絵 内山敏行 江原昌俊 大谷 徹 賀来孝代 加藤一郎 風間栄一
加部二生 車崎正彦 小林 修 坂本和俊 島田孝雄 志村 哲 杉山晋作
清喜裕二 滝沢 誠 鳥羽政之 長井正欣 中里正憲 日高 慎 深澤敦仁
山崎 武 横澤真一 外尾常人 金子彰男 田村 誠 長瀬歳康 丸山 修

11. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行に係る本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 坂本 敬 信 (平成元・2年度)

塩原 暁 (平成3～10年度)

福島 巖 (平成11～17年度・平成18年2月17日まで)

茂木 孝彦 (平成17年度・平成18年2月18日から)

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 荒井 茂 (平成元年度)

金井 善一 (平成2～5年度)

荒井 正夫 (平成6～8年度)

中村 勝 (平成9年度)

渡辺 正彦 (平成10・11年度)

倉林 進 (平成12・13年度)

揖斐 龍一 (平成14～17年度)

参 事 宮本 清 (平成2年度)

社会教育課長 荒井 正夫 (平成元年度)

坂上 英夫 (平成2～5年度)

中島 正和 (平成6～9年度)

恩田 高治 (平成10年度)

阿部 均 (平成11・12年度)

田中 靖夫 (平成13・14年度)

吉田 敬一 (平成15～17年度)

同課長補佐 中島 正和 (平成元年度)[兼務]

吉田 敬一 (平成2～6年度)

小暮 浩一 (平成7・8年度)

中村 文男 (平成9～11年度)

福島 保雄 (平成12～14年度)

桜場 幸男 (平成15～17年度)

上野 良一 (平成16・17年度)

文化財保護係

係 長 中島 正和 (平成元年度)[兼務]

長谷川 勇 (平成2～6年度)

増田 一裕 (平成7～14年度)

吉田 稔 (平成15～17年度)

文化財保護係 長谷川 勇 (平成元年度)

増田 一裕 (平成元～6年度)

太田 博之 (平成元～17年度)

赤尾 直行 (平成元～3年度)

佐藤 好司 (平成3～9年度)

遠藤 優子 (平成4～6年度)

塩原 浩 (平成7・8年度)

関根 君江 (平成9・10年度)

我妻 浩子 (平成11～15年度)

斉藤 みゆき (平成16・17年度)

松本 完 (平成12～17年度)

町田 奈緒子 (平成13～15年度)

逆井 洋美 (平成16年度)

的野 善行 (平成17年度)

文化財保護課長 前川 由雄 (平成17年度)

同課長補佐 増田 一裕 (平成17年度)

鈴木 徳雄 (平成17年度)[兼務]

埋蔵文化財係長 鈴木 徳雄 (平成17年度)[兼務]

埋蔵文化財係 太田 博之 (平成17年度)

恋河内 昭彦 (平成17年度)

松澤 浩一 (平成17年度)

松本 完 (平成17年度)

的野 善行 (平成17年度)

調査担当者 長谷川 勇 (平成元～3年度)

佐藤 好司 (平成3～9年度)

増田 一裕 (平成10～14年度)

太田 博之 (平成12～17年度)

松本 完 (平成12～17年度)

町田 奈緒子 (平成13～15年度)

的野 善行 (平成17年度)

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は日本測地系に基づく。
2. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。

[遺構図]

遺構平面図…1/160・1/300
土層・遺構断面図…1/20・1/40・1/80

[遺物実測図・拓影図]

埴輪…1/4
須恵器…1/4
土師器…1/4・1/5
鉄器…1/4
耳環…1/1

その他のものについては、個別にスケールを示した。

3. 各遺構における方位針は座標北を示す。
4. 古墳の埴丘規模は周堀底からの立上がり部分で計測した数値を示した。
5. 本書の本文中および観察表で用いた円筒埴輪の各部名称は、突帯を下から上に向かって順に第1突帯、第2突帯、第3突帯とし、各段を基部の側から口縁部に向かって順に第1段、第2段、第3段……とした。
6. 円筒埴輪観察表の「底部・圧痕」の「棒状」、「木目状」等の記載はあくまでも視覚的な分類によるものである。
7. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
8. 遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を、網は地山の旧表土層を示す。
9. 観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版「標準土色帖」2000年版によった。
10. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行数値地図1/50,000「高崎」に加筆したものを用了。
11. 本書で使用した位置図は、本市発行「本市都市計画図（デジタル版・1/2,500対応）」に加筆したものを用了。
12. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 旭・小島古墳群の概要	6
III 調査の成果	
1 万年寺八幡山古墳	10
2 万年寺つつじ山古墳	34
3 林1号墳	52
4 林2号墳	55
5 林3号墳	61
6 林4号墳	66
7 林5号墳	73
8 林6号墳	76
9 林7号墳	83
10 林8号墳	88
11 林1号土器棺	94
12 林2号土器棺	102
13 林3号土器棺	104
IV 万年寺八幡山古墳のテフラ分析	106
V 結 語	110

引用・参考文献

写真

挿図目次

図1 周辺の遺跡	3	図41 林3号墳出土土器実測図	65
図2 旭・小島古墳分布図	8	図42 林4号墳土層断面図(1)	66
図3 調査区位置図	9	図43 林4号墳	67・68
図4 万年寺八幡山古墳	11・12	図44 林4号墳土層断面図(2)	69
図5 万年寺八幡山古墳B地点土層断面図	16	図45 林4号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図	69
図6 万年寺八幡山古墳H1地点土層断面図(1)	17	図46 林4号墳出土形象埴輪実測図	70
図7 万年寺八幡山古墳H1地点土層断面図(2)	18	図47 林4号墳出土土器実測図	70
図8 万年寺八幡山古墳H2・3地点土層断面図	20	図48 林5号墳	71・72
図9 万年寺八幡山古墳H4地点土層断面図	21	図49 林5号墳土層断面図	73
図10 万年寺八幡山古墳H5地点土層断面図	22	図50 林5号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図	74
図11 万年寺八幡山古墳G1地点平面図および土層断面図(1)	24	図51 林5号墳出土形象埴輪実測図	75
図12 万年寺八幡山古墳G1地点土層断面図(2)	25	図52 林6号墳	77・78
図13 万年寺八幡山古墳G1地点サブトレ土層断面図	27	図53 林6号墳土層断面図	79
図14 万年寺八幡山古墳石棺平面・立面図および土層断面図	28	図54 林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(1)	80
図15 万年寺八幡山古墳石棺平面・断面図	29	図55 林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(2)	81
図16 万年寺八幡山古墳出土鉄器実測図	32	図56 林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(3)	82
図17 万年寺八幡山古墳出土土器実測図	32	図57 林6号墳出土形象埴輪実測図	82
図18 万年寺八幡山古墳出土円筒埴輪実測図	33	図58 林6号墳出土土器実測図	83
図19 万年寺八幡山古墳出土耳環実測図	33	図59 林7号墳土層断面図	84
図20 万年寺つつじ山古墳	35・36	図60 林7号墳	85・86
図21 万年寺つつじ山古墳A・B地点土層断面図	39	図61 林7号墳出土円筒埴輪実測図	87
図22 万年寺つつじ山古墳C～E地点土層断面図	40	図62 林7号墳出土形象埴輪実測図	88
図23 万年寺つつじ山古墳F地点土層断面図(1)	44	図63 林8号墳	89・90
図24 万年寺つつじ山古墳F地点平面図および土層断面図(2)	45	図64 林8号墳土層断面図(1)	91
図25 万年寺つつじ山古墳F地点石製模造品分布図	46	図65 林8号墳土層断面図(2)	92
図26 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品実測図(1)	47	図66 林8号墳出土土器実測図	93
図27 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品実測図(2)	48	図67 林1～3号土器棺	95
図28 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品実測図(3)	49	図68 林1号土器棺平面図および土層断面図	97
図29 万年寺つつじ山古墳出土土器実測図	51	図69 林1号土器棺掘り方平面図	98
図30 林1号墳・林2号墳	53・54	図70 林1号土器棺出土状況図	99
図31 林1号墳土層断面図	55	図71 林1号土器棺実測図(1)	100
図32 林2号墳土層断面図	56	図72 林1号土器棺実測図(2)	101
図33 林2号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図	57	図73 林2号土器棺平面図および土層断面図	103
図34 林2号墳出土形象埴輪実測図	58	図74 林2号土器棺実測図	104
図35 林2号墳出土土器実測図	58	図75 林3号土器棺平面図および土層断面図	105
図36 林3号墳	59・60	図76 林3号土器棺実測図	105
図37 林3号墳土層断面図	61	図77 万年寺八幡山古墳における堆積物中の鉱物組成	107
図38 林3号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(1)	62	図78 火山ガラスの屈折率測定結果	108
図39 林3号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(2)	63	図79 石製刀子属性模式図	111
図40 林3号墳出土形象埴輪実測図	64		

写真目次

- 写真1 万年寺八幡山古墳 墳丘断面 [昭和52年撮影・南西から]
万年寺八幡山古墳 南東端墳丘断面 [昭和52年撮影・南西から]
万年寺八幡山古墳 石棺断面 [昭和52年撮影・南西から]
- 写真2 万年寺八幡山古墳B地点 墳丘・周堀検出状況 [北から]
万年寺八幡山古墳E地点 周堀検出状況 [西から]
万年寺八幡山古墳E地点 周堀検出状況 [西から]
- 写真3 万年寺八幡山古墳G1地点 墳丘調査区全景 [西から]
万年寺八幡山古墳G1地点 東丘調査区・遺構確認状況① [南から]
万年寺八幡山古墳G1地点 東丘調査区・遺構確認状況② [南から]
- 写真4 万年寺八幡山古墳 石棺検出状況 [南西から]
万年寺八幡山古墳 石棺・鉄器検出状況 [南東から]
- 写真5 万年寺八幡山古墳H1地点 調査区全景 [南東から]
万年寺八幡山古墳H1地点 墳丘・周堀検出状況 [北西から]
万年寺八幡山古墳H1地点 周堀検出状況 [東から]
- 写真6 万年寺つつじ山古墳A地点 調査区全景 [南東から]
万年寺つつじ山古墳A地点 墳丘断面 [西から]
万年寺つつじ山古墳A地点 墳丘断面 [南東から]
- 写真7 万年寺つつじ山古墳F地点 調査区全景 [北から]
万年寺つつじ山古墳F地点 石製模造品検出状況1 [北東から]
万年寺つつじ山古墳F地点 石製模造品検出状況2 [北西から]
万年寺つつじ山古墳F地点 石製模造品検出状況3 [南東から]
- 写真8 林1号墳A地点・2号墳C地点 調査区全景 [北東から]
林1号墳A地点 周堀検出状況 [南から]
林1号墳A地点 周堀検出状況 [北東から]
- 写真9 林2号墳A地点 調査区全景 [南西から]
林2号墳A地点 調査区全景 [北西から]
林2号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]
- 写真10 林2号墳C地点 周堀検出状況 [北東から]
林2号墳C地点 周堀検出状況 [南東から]
林2号墳D地点 調査区全景 [南東から]
- 写真11 林3号墳A地点 周堀検出状況 [南東から]
林3号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]
林4号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]
- 写真12 林4号墳A地点 周堀検出状況 [北東から]
林4号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]
林5号墳A地点・6号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]
- 写真13 林6号墳B地点 周堀検出状況 [北西から]
林6号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]
林6号墳C地点・7号墳C地点周堀内遺物検出状況 [南西から]
- 写真14 林6号墳C地点 調査区全景 [西から]
林7号墳A地点 周堀内遺物検出状況 [南西から]
林7号墳B地点 調査区全景 [南東から]
- 写真15 林8号墳B地点 調査区全景 [西から]
林8号墳B地点 周堀検出状況 [北東から]
林8号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]
- 写真16 林8号墳C地点 調査区全景 [北東から]
林8号墳C地点 周堀内遺物検出状況 [北から]
林8号墳C地点 周堀内遺物検出状況
- 写真17 林1号土器棺検出状況(1)
林1号土器棺検出状況・土層断面 [南西から]
林1号土器棺検出状況(2)
林1号土器棺検出状況(3)
林1号土器棺・完掘状況 [南西から]
- 写真18 林2号土器棺検出状況 [南西から]
林2号土器棺完掘状況 [南西から]
林3号土器棺土層断面 [西から]
- 写真19 万年寺八幡山古墳石棺出土鉄器
万年寺八幡山古墳出土土器
万年寺八幡山古墳出土土円筒埴輪
万年寺八幡山古墳出土土耳環
万年寺つつじ山古墳出土土器
- 写真20 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品(1)
- 写真21 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品(2)
- 写真22 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品(3)
- 写真23 林2号墳出土土器
林2号墳出土土形象埴輪
林3号墳出土土器
- 写真24 林3号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(1)
- 写真25 林3号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(2)
林3号墳出土土形象埴輪
- 写真26 林4号墳出土土器
林4号墳出土土円筒・朝顔形埴輪
林4号墳出土土形象埴輪
林5号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(1)
林5号墳出土土形象埴輪
- 写真27 林5号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(2)
林5号墳出土土形象埴輪
林6号墳出土土器
林6号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(1)
林6号墳出土土形象埴輪
- 写真28 林6号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(2)
- 写真29 林6号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(3)
林6号墳出土土形象埴輪
林7号墳出土土円筒埴輪
林7号墳出土土形象埴輪
林8号墳出土土器
- 写真30 林1号土器棺
林2号土器棺
林3号土器棺
- 写真31 万年寺八幡山古墳周堀覆土採取試物顕微鏡写真

I 調査に至る経過

昭和63年織茂良平本庄市長から、市内小島地区において「小島西土地区画整理事業」の計画があり、これに関係する埋蔵文化財の所在及び取扱いについての協議が本庄市教育委員会に提出された。本庄市長から協議のあった「小島西土地区画整理事業計画」は、本庄市大字小島、下野堂、万年寺地区におよぶ大規模なものであり、道路、下水道の整備計画域も広範であることから、当該事業地に埋蔵文化財が所在する場合、相当程度の影響を被ることが予測されたため、埼玉県教育委員会発行の【本庄市遺跡分布地図】をもとに、当該開発計画予定地における埋蔵文化財包蔵地の所在を確認したところ、同地には埼玉県選定重要遺跡である旭・小島古墳群（53-171）の所在することが判明した。

このような状況を踏まえ、本庄市教育委員会では、ただちに旭・小島古墳群の保存について本庄市と協議を開始した。その結果、本庄市教育委員会教育長と本庄市長との間で、旭・小島古墳群の保存に関する「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、

1) 事業施行区域は埼玉県選定重要遺跡の範囲内であることから、現在墳丘を有する古墳のみならず事業区全域協議対象とすること、2) 本庄市指定文化財131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)、136号古墳(蛭影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の4古墳は保留地として公有地化を図るとともに、周堀についても可能な限り現状保存を図ること、3) 前項に掲げた古墳以外については、古墳跡その他すべての遺構を発掘調査の対象とし、確実な記録保存の措置を講ずること、4) 調査の結果重要な遺構が発見された場合は、保存措置について協議すること等が謳われた。

この協定書の締結を経て、本庄市教育委員会は、昭和63年8月25日付け本教社発第229号で、埼玉県教育委員会あてに当該開発計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。埼玉県教育委員会からは昭和63年12月28日付け教文第847号で「埋蔵文化財の取り扱いについて」の回答があり、

1) 当該埋蔵文化財の取り扱いについては本庄市教育委員会教育長と本庄市長の間に締結された「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」とおり実施すること、2) ただし、市指定文化財135号古墳(前の山古墳)の石室については調査終了後、136号古墳(蛭影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の存在する公有地に復元保存し、活用を図ること、3) 調査中に重要な遺構等が確認された場合には、別途協議を行うことの指導があった。

現地での発掘調査は平成元年4月から開始し、平成17年度現在も、なお断続的に実施している。調査原因は、道路・下水道建設、調整池整備、個人住宅その他建造物の建設、曳家、宅地、駐車場その他の造成工事等開発行為に伴うものが主であるが、本庄市指定文化財である131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)等公有地化の図られた区域は、公園としての土地利用が計画されており、これらについては保存整備を目的とした範囲確認調査も実施している。整理調査は発掘調査と平行しつつ、平成元年度から継続して実施している。

なお、各地点の発掘調査ならびに整理調査期間、調査担当者、調査原因・目的、調査面積等の情報は各節の冒頭に記したとおりである。

II 遺跡の環境

1 地理的環境

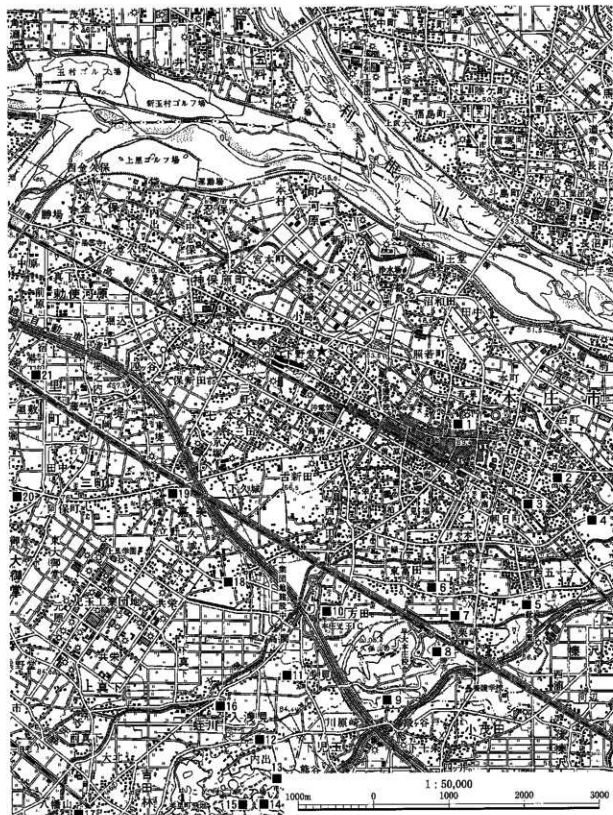
本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地とに区分される。低地部には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。いっぽう、台地部は身馴川扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、身馴川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県藤岡市浄法寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市大字鶯森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。本書に報告する旭・小島古墳群は、本庄市大字小島から上里町大字神保原にかけての本庄台地扇端部に立地している。台地縁部は東流する小山川の浸食により比高差6～10mの段丘崖が発達する。また、周辺の台地上には南南西から北北東の方向に幾筋かの埋没谷があり、狭長な微低地の形成が見られる。

2 歴史的環境

児玉地域は地理的にも上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域である。また、古墳時代においては美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、本庄市ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など当該期における流通・生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期における竈の導入に見るような先進性や本庄市公卿塚古墳の格子タタキ技法による円筒埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。本節ではこれらの成果をふまえて、児玉地域の古墳の変遷を概観し、旭・小島古墳群をめぐる歴史的環境の理解としたい。

本庄市鷲山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である。女堀川中流域の小丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形状を呈する前方部、出土土器などから、築造は4世紀中葉以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部にのみ穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より機器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階のものとする評価も可能であろう。鷲山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長坂聖天塚古墳(径50m)は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計6基の埋葬施設から菱雲文縁変形方格規矩鏡、獸形鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む石製の刀子の形態などから、前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期



- ★旭・小島古墳群 1. 北原古墳群 2. 御炊坂古墳群 3. 塚合古墳群 4. 轟森古墳群 5. 西五十子古墳群
 6. 公御塚古墳群 7. 宍勝寺裏遺跡 8. 前山1・2号墳 9. 塚木山古墳群 10. 四方田古墳群
 11. 鷺山古墳 12. 金鏡神社古墳 13. 生野山古墳群 14. 生野山9号墳 15. 生野山將軍塚古墳 16. 蛭川堀輪竈跡
 17. 八幡山堀輪竈跡 18. 今井古墳群 19. 本郷古墳群 20. 大御堂古墳群 21. 番刀古墳群

図1 周辺の遺跡

の築造とされる。

大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが本庄市教育委員会による2・3次調査の結果、44×38mの方墳となることが確認された。埋葬施設に粘土椀を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器塔が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本庄市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30～40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60～70m程度の前方後円墳となる可能性も考えられている。

中期前葉から中葉にかけては生野山丘陵に本庄市生野山將軍塚古墳(径60m)、同金鑽神社古墳(径68m)、女堀川流域に本庄市公卿塚古墳(径60m)などの大型の円墳が相次いで築造される。児玉地方で古墳がもっとも大型化するはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葺石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと共伴し、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べやや規模の小さい志戸川流域の美里町志渡川古墳(径40m)、小山川上流域の本庄市長沖157号墳(径32m)ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志渡川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町灌漑山古墳(径40m)、同勝丸稻荷古墳(径30m)もこの頃の築造と推定される。

中期後葉には前段階のような直径60mクラス的大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の本庄市長沖14号墳(径34m)、同生野山9号墳(径42m)など30～40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同旭・小島古墳群の三笠山2号墳(径22m)、上前原5号墳(径26m)、杉の根7号墳(規模未詳)などいずれも10～20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、深谷市白山古墳群などはやや遅れて、Ⅴ式の円筒埴輪とTK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。さらに、MT15段階に造営が開始される神川町青柳古墳群では、いち早く横穴式石室を導入することが知られている。

後期後葉段階に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にもなってこの時期新たに出現してくる群集墳である。美里町の広木大町古墳群、塚本山古墳群や本庄市の旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋

葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

また、後期段階には首長墓として前方後円墳が採用されるようになる。小山川上流域では本庄市の長沖25号墳(40m)、同31号墳(51m)、秋山諏訪山古墳(60m)、生野山鏡子塚古墳(58m)、生野山16号墳(58m)、小山川中流では深谷市の四十塚古墳群寅稻荷古墳(52m)、本庄市の塚合古墳群大林二子山古墳(規模未詳)、神流川流域では神川町青柳古墳群の白岩鏡子塚古墳(46m)、中新里諏訪山古墳(42m)などが知られる。

終末期には深谷市前原愛宕山古墳(辺37m)のような方墳と旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳(径38m)のような円墳とが前方後円墳に代わる首長墓として採用されている。また各地の群集墳も後期後葉段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、児玉地域で5箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。この地域では、鴻巣市生田塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。

美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵の端部に位置し、南北を二つの小谷によって挟まれ、東方へ延びる舌状丘陵の北側裾部に占地している。埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、いずれも焼土層の落ち込みとして確認されたもので、窯体の規模や構造が判明するものはない。分布調査において確認できた窯跡は12基で、掘削による丘陵断面はさらに東西方向に延長していたが、他には窯跡を認めなかったことから、報告者はこの丘陵斜面に構築された窯の総数は、調査時に確認した12基を上回らないと予測している。

本庄市八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した。その後、1961年に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している。

本庄市経川埴輪窯跡は、市立共和小学校の校庭を整地した際に、多量の埴輪と焼土が出土したとき、埴輪窯が存在した可能性が考えられている。遺跡は、女堀川中流の右岸に発達した自然堤防上に占地する。すでに一帯の土地改良が終了しているため、地形の原状は著しく変化し、出土地点の詳細を確認することは難しく、現在では正確な出土地点も特定できなくなっている。その後、同小学校敷地内の近接地点でも発掘調査を実施しているが、埴輪や焼土の出土を確認していない。

本庄市有勝寺裏埴輪窯跡は近年の確認調査で、5基以上の窯跡が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。大型の散形埴輪4点をはじめ、鬚、馬、人物など多様な形象埴輪を出土している。円筒埴輪に外面二次調整を欠き、基部調整を施すものを含むこと、各種器財埴輪が出揃っていることから、操業は6世紀後半段階以降に降ることが確実である。

本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際する整地作業中に、焼土とともに馬形埴輪が出土し、また、その後、工場内に機械を設置するため掘削をおこなったところ、ふたたび焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている。

なお、実態は全く不明ながら、美里町から深谷市にかけての山崎山周辺にも埴輪生産遺跡の存在を指摘する意見がある。

3 旭・小島古墳群の概要

旭・小島古墳群は本庄台地北縁部に立地し、本庄市大字小島、同万年寺から児玉郡上里町大字神保原にかけて分布する。群中央に南南西から北北東方向へ伸びる埋没谷が存在し、現在でも微低地を形成しており、古墳群はこの微低地を隔てて大きく東西二群に分れる。前方後円墳、軌立貝式古墳、円墳、方墳の混成による古墳群で、前期から終末期まで、断続的な造営を認める。以下、時期を追って古墳群の形成過程を概述する。

旭・小島古墳群の形成は西群北半に群在する方形墳の築造をもって開始されると考えられる。現在まで20基余りが検出されている。

万年寺つつじ山古墳（辺25m）は、高さ1.7mの墳丘が残存し、確認調査時に、表土直下で、刀子、斧、直刃鎌、短冊形斧などの石製製造品が出土している。出土地点は墳丘中心から北西方向に大きく外れる位置にあり、埋葬施設その他の遺構に伴う状況とは認定できない。前方後円墳集成編年4期後半に該当すると考えられる。

下野堂10号墓（辺24m）では、周堀の立ち上り部から石劔が出土している。碧玉製とされ、埋葬施設に伴う状況では確認されていないが、型的には通有の古墳副葬品のうちに見られるものと同形である。また、林地区に所在する方墳の中には1辺30mを超える規模のものがあって、群集墳を主体的に構成するような小型円墳をはるかに凌ぐ規模を有する。さらに、林11号墳では木棺直葬の埋葬施設の一部が検出されている。

これらの旭・小島古墳群の方墳は、これまで「方形周溝墓」として一括される場合が多かった。しかし、円墳とされてきた本庄市北瀬前山2号墳が、最近の調査の結果、一辺25m方墳である事実が確認されたことや、万年寺つつじ山古墳、下野堂10号墓などに見るように副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに前期の小型方墳群が列島各地に確認できることなどを考慮すれば、旭・小島古墳群においても「方形周溝墓」とする従来の理解をあらためる必要があろう。

万年寺八幡山古墳（径43m）は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが（本庄市1986）近年の確認調査で石棺内から鉄剣2本が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくはずれる位置にあることから、同墳には未確認の中心主体部が存在すると考えらる。埴輪を伴わず、数次の周堀調査によっても遺物を検出できていないため築造時期の詳細は不明であるが、前期に遡る可能性も考えられる。南東側に隣接する万年寺つつじ山古墳とは双方の周堀が重複する関係にあるが、覆土の切り合いは確認できていない。

中期中葉に属する古墳は明らかではない。当該期の児玉地域では、首長墓に本庄市公卿塚古墳（径65m）、同金嶺神社古墳（径68m）、同生野山將軍塚古墳（径60m）、同長沖157号墳（径32m）美里町志渡川古墳（径40m）などの大型円墳の存在が目立つが、現状において旭・小島古墳群には中期の有力古墳が認められない。また、上記の諸古墳にはすでに埴輪の樹立も認められるが、旭・小島古墳群では埴輪の導入も他に遅れるようである。

中期後葉には群集墳の築造が開始され、埴輪も導入される。三奈山2号墳（径22m）では、二次調整B種ヨコハケの円筒埴輪に和泉後半期の土師器内斜口縁環が共存する。また、上原5号墳（径26m）でも二次調整B種ヨコハケの円筒埴輪を備えることが判明しており、同時期には東群においても確実に古墳の造営が開始されている。円筒埴輪は2条突帯3段構成の小型品で、半円形の透孔をもつ。

家、人物、馬などの形象埴輪は確認できない。北浦3号墳は埴輪をもたないが、出土した直立口縁をもつ土師器杯は、典型的な坏蓋模倣坏出現以前の型式で、和泉期後半段階に該当し、築造時期は中期後葉に遡る。さらに、出土遺物がなく所属年代を確定できない小型円墳の中にも、当該期の築造と推測される事例が存在する。

後期初頭においても群集墳の造営は継続し、三奈山8号墳（規模不詳）では円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに家、女子人物、男子武装人物、盾持人物、馬、鳥など豊富な形象埴輪が加わっている。武装人物は埼玉稲荷山古墳出土例に酷似した肩庇付冑の表現があり注目される。この後期初頭から前半にかけては三奈山7号墳（29m）、三奈山9号墳などの帆立貝式古墳を中核とし、三奈山1・3～6号墳号墳、杉ノ根7号墳など低平な墳丘と竪穴系埋葬施設を有する小規模な円墳が多数築造され、前段階からの連続的な群集墳造営を認める。

後期後半には東群に大型円墳が集中するようになる。小島御手長山古墳（径42m）はその中で最大の規模を有し、角閃石安山岩の加工丸石を用いた横穴式石室が検出されている。副葬品に挂甲、直刀、鉄鍔、馬具、などがあり、埴輪は円筒、朝顔、家、人物、大型の馬などが出土している。隣接する坊主山古墳（径36m）、山の神古墳、蜚影山古墳、前の山古墳、堂場13号墳も、埋葬施設に横穴式石室を備え埴輪を樹立する古墳で、築造時期は後期のうちでもとくに末期段階に集中すると考えられる。坊主山古墳では直刀、刀装具、鉄鍔、玉類、前の山古墳では耳環、ガラス玉が出土し、また、山の神古墳、蜚影山古墳、前の山古墳では段築、葦石の存在が確認されている。いっぽう、西群の上里町側にも神保原浅間山古墳（径30m）があり、埴輪を備え、横穴式石室からは直刀、鉄鍔、耳環、玉類のほか銅鉤が出土している。

下野堂二子山古墳は旭・小島古墳群中唯一の前方後円墳である。墳丘はすでに削平を受け段築、葦石、埋葬施設などの状況は不明であるが、航空写真、地籍図の分析から全長60m前後の規模と推定される。試掘調査では年代を示す資料が得られていないが、埴輪が確認されないことを根拠に埴輪生産停止後の築造とすれば後期末葉の時期が考えられる。

終末期古墳には、下野堂開拓1号墳（径22m）、下野堂御手長山古墳（径20m）、堂場地区に集中する堂場1～9号墳など、不整形の周堀をめぐらす直径10～20m前半の円墳が知られる。下野堂開拓1号墳（径22m）では石室攪乱層からは鉄製の鉋具、刀子、釘が出土し、石室前庭部から大量の土師器・須恵器片のほか青銅製の巡方3点、丸駒2点が検出されている。堂場1～9号墳では7世紀前半から後半代までの土器が共存しており長期間の追葬が想定される。終末期の有力な古墳には方墳を採用する地域もあるが、群内での所在は今のところ確認できない。

なお、三奈山古墳は直径64m、高さ3.2m、周堀幅26mを測る群内最大の大型円墳であったが、全面的な発掘調査にもかかわらず埋葬施設の所在を確認できていない。調査前の墳丘高は3m強で、墳丘径と比較してきわめて低平であったことを考えると、本来の墳丘が、後代に埋葬施設とともに削平を受けたことも想定される。しかし、墳丘、周堀からの出土遺物は皆無であり、埋葬行為自体が施行されなかった可能性も否定できない。調査では、墳丘構築土中に火山噴出物と思われる灰層の堆積を検出している。

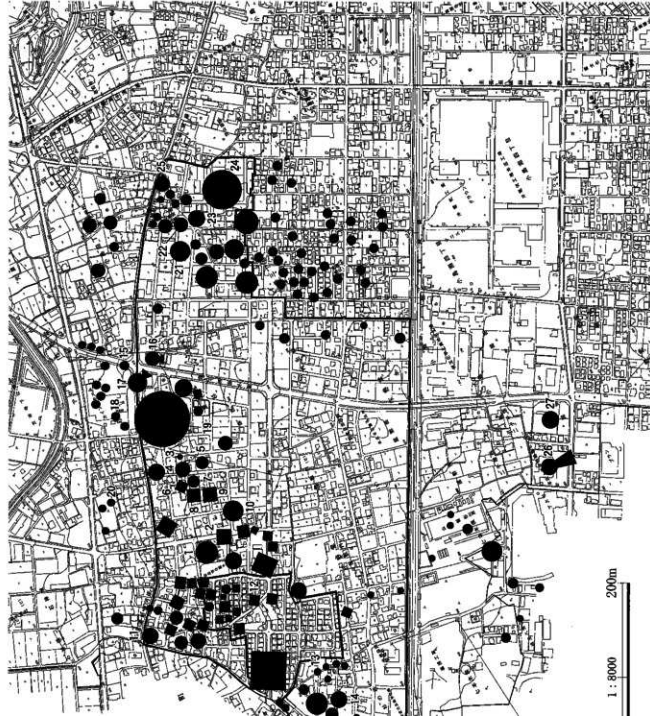


図2 旭・小島古墳分布図

- | | |
|----|----|
| 1 | 万年 |
| 2 | 万年 |
| 3 | 林 |
| 4 | 林2 |
| 5 | 林3 |
| 6 | 林4 |
| 7 | 林5 |
| 8 | 林6 |
| 9 | 林7 |
| 10 | 林8 |
| 11 | 御嶽 |
| 12 | 下野 |
| 13 | 杉の |
| 14 | 下野 |
| 15 | 三奈 |
| 16 | 三奈 |
| 17 | 三奈 |
| 18 | 三奈 |
| 19 | 三奈 |
| 20 | 北浦 |
| 21 | 前の |
| 22 | 蛋影 |
| 23 | 山の |
| 24 | 小島 |
| 25 | 上野 |
| 26 | 下野 |
| 27 | 開拓 |



図3 調査区位置図

III 調査の成果

1 万年寺八幡山古墳

[A地点]

調査期間 昭和55年11月7日～同年11月28日

調査面積 260㎡

調査原因 集会所の建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川 勇・岸 隆雄

備考 本報告書では省略

[B地点]

調査期間 平成5年8月10日～同年11月8日

調査面積 495㎡

調査原因 土地区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[C地点]

調査期間 平成9年11月26日～同年12月19日

調査面積 7㎡

調査原因 防災無線用鉄塔の建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[D地点]

調査期間 平成9年11月26日～同年12月19日

調査面積 15㎡

調査原因 土地区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備考 同一調査区内で万年寺つつじ山古墳の周堀を検出（万年寺つつじ山古墳B地点）

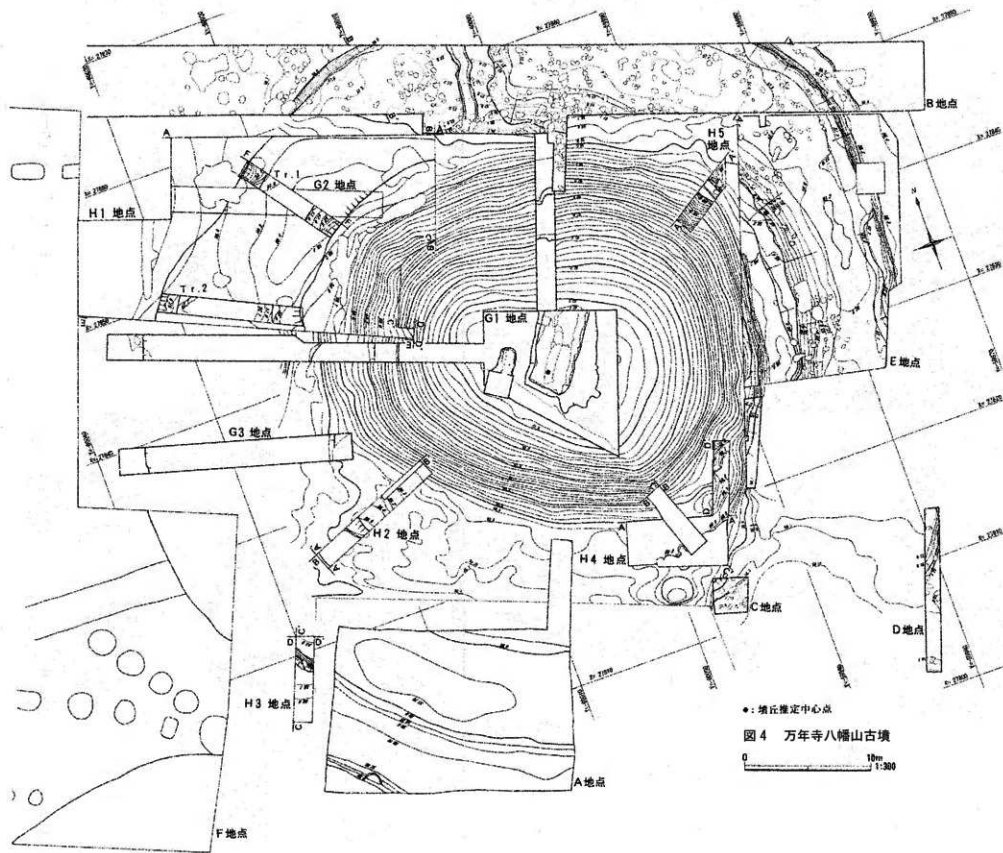
[E地点]

調査期間 平成10年3月5日～同年3月23日

調査面積 312㎡

調査原因 土地区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司



[F地点]

調査期間 平成11年2月16日～同年3月2日
調査面積 2,100㎡
調査原因 遺跡の保存整備
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕
備考 確認調査

[G地点]

調査期間 平成13年2月14日～同年3月22日
調査面積 1,147㎡
調査原因 遺跡の保存整備
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕・太田博之・松本 完
備考 確認調査

[H地点]

調査期間 平成16年2月25日～同年3月25日
調査面積 1,147㎡
調査原因 遺跡の保存整備
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 太田博之・松本 完
備考 確認調査

(1) 遺 構

万年寺八幡山古墳は、本庄市大字小島字林95-2 他にあり、墳丘の中心を $X=27,835$ 、 $Y=-60,004$ 付近におく。南東側で隣接する万年寺つつじ山古墳とともに、旭・小島古墳群内でわずかに残る墳丘が遺存する古墳のひとつである。周囲には、つつじ山古墳をはじめとし、かつて本古墳に匹敵する墳丘があったともされる万年寺高山古墳や大小の方墳、円墳が周廻のみ遺存する状態で群在し、旭・小島古墳群の西半の古墳密集域を構成することが判明している。

本古墳の正式の発掘調査は、昭和55年万年寺集会所の建設にかかるA地点の調査が最初であるが、昭和52年に土取りにより、後述G1地点で検出した石棺が露出する事態を招いており、その際半壊に近く壊された南西側の墳丘断面の写真撮影および土取り部分の大幅な修復が行なわれている。石棺については、その墳丘断面の写真に明瞭な横断面がとらえられている(写真1)。

なお、昭和31年刊行の埼玉県教育委員会による古墳分布調査の報告書(埼玉県教育委員会1956)には、上記G1地点とした墳頂平坦面南西寄りで検出した石棺が、半ば埋もれた状態の写真が掲載されている。少なくともこの時点まである程度の期間にわたって石棺が開口し露出していたようであり、また実際芋類などの貯蔵に石棺を用いていたとの証言も得られている。

昭和55年に行なったA地点の調査に際し、墳丘の南側、南西側の周堀部分2箇所にトレンチを入れ、確認調査を行なっているが、A地点とともに詳細な情報を欠くため、2つのトレンチ(「第2・4トレ

ンチ)に関しては、本報告では省略した。

発掘調査と確認調査、面的な調査とトレンチ調査の範囲がやや錯綜していることもあり、記載を行なう前に簡単に地点名の呼称について説明しておきたい。まず、A～E地点は、平成10年度までに発掘調査を行なった地点であり、F～H地点としたのは、平成10年度以降確認調査を行なった地点である。確認調査の場合、古墳全域を調査対象として、主にトレンチ調査を行なったため、地点名がそぐわない場合もあるが、一応地点名の呼称を踏襲して、各年度に実施した調査範囲の総称として調査年度順にアルファベットの地点名を与えた。またトレンチを含むそれぞれの調査範囲に番号を付し小分けした地点名とした。したがって、H1地点とG2地点のように、年度を異にして、面的な確認調査とトレンチ調査を行なった地点では、地点の範囲が重複する場合も生じている。

また、結果的にトレンチ調査と面的な調査が結合した形となったG1地点の場合、墳頂部の調査範囲全体を墳頂部調査区、その確認調査用の試掘坑を(墳頂部中央)テスト・ピットとし、トレンチ部分に関しては、墳丘西トレンチ、墳丘北トレンチと呼び分けた。なお、H1地点のサブトレンチは、トレンチ1・2と呼称し、テフラの分析・同定を行なった(IV章)。

a. 墳丘

現状の墳丘の平面形は、西側がやや小さく、東側が膨らんだ卵形に近く見えるが、より細かく見ると、東側、南東側、南西側、西側に微妙な面をもつ歪な多角形である。全体的な墳形の印象は、主に大きく削平された南西側の墳丘を修復した箇所の輪郭が直線的であることに起因し、微妙な面をもつ部分も、かつて旧道のあった西側部分、東側の宅地に接する部分のように、何らかの形で本来の墳丘が損なわれている部分に相当するようである。実際に墳丘形態を確認し得たのは、墳丘北半の2/3前後、墳丘全体としては1/3前後の範囲である。周堀内縁から推定される平面形は、多少凹凸があるが、円形と見るのが妥当であろう。よって円墳と推定する。

周堀内縁の推定直径は39.5m、面的に確認できた範囲では、周堀内縁と墳丘間に幅1.1～3.4mのテラスと思われる平坦面が見られる。この平坦面は、断面では旧表土の黒褐色土とその直下の暗褐色土あるいはソフトロームを掘り下げて造り出されている。

墳丘の現存高は2.6～3.0mである。現地表面が北に向かって緩やかに傾斜しているため、南北麓で現存高にかなり差がある。旧表土の黒褐色土より上の実際の盛土の残存高は2.7～2.9m、テラスからの墳丘の残存高は3.1～3.5mである。墳頂部は、現在ほぼ平坦な平場をなしているが、この平坦面は昭和52年墳丘修復時の断面写真(写真1)でも確認することができる。墳丘斜面はかなり急で、上部でやや緩やかになり墳頂部平坦面へと連なる。

G1地点墳丘北・西トレンチやH1地点では、墳丘斜面の中腹で、1、2段の段部を確認しており、段部間あるいは段部付近が比較的平坦になることを確認しているが、そもそも墳丘表面にかなり凹凸があるため、明確な平場がめぐるとまでは言い切れない。

墳丘の断面観察を行なったのは、D・G1・H1・H4地点の4地点である。いずれもごく狭い範囲で、しかも多く盛土の表層にとどまるものであった。

先記した土取りによる墳丘の損壊に際し撮影された写真(写真1)が、墳丘の土層を最もよく観察できる断面写真である。現在残された資料は、今回掲載した写真ほか数葉の単色写真と『本市史』

(本庄市1986) 所載の断面図に限られる。

なお、断面写真が撮影された墳丘切断面の位置は、G1地点の南西側を区切る攪乱線の位置に一致し、その両側ではかなり内側に折れるらしいが、その境目の位置全体を正確に把握し得てはいない。墳丘全体としては、おおよそ墳丘の中心点よりかなり南西に寄った位置を、北西―南東に抜ける線が境目になる。つまりその境目の南西側は墳丘がすでに失われた範囲である。この範囲に入るH2地点、およびH4地点の一部では、墳丘がほぼ旧表土の黒褐色土まで削平されていた。

土層の記載を欠くため細かな復元はできないが、断面写真からは、墳丘断面を大きく分かつ幾筋もの土層の界線が斜めに走る様子を観察することができる。それらの界線によって大きく分かれた土層の大きなまとまりは、断面写真の墳丘中央付近では、三角形に近い形に見え、一見すると天地の異なる大きな三角形が組み合わさって墳丘が造られているかに見える。片側あるいは双方の外縁寄りに盛土の山を築き、その間に土を満たして墳丘の中央部を造作し、さらにその外側に土を盛り上げ高を増し、墳丘を築成しているように観察できる。

各土層の大きなまとまり同士は、ロームや黒褐色土などの濃淡の異なる土の多寡によりかなり明瞭に分けられるとともに、大きなまとまりのそれぞれは、やはり濃淡の異なる土の多寡によりさらに細かい土層に分けられるようである。

G1地点墳丘中央での盛土の土層断面(図11・12)では、墳丘の盛土はロームを主とする土と暗褐色土や黒褐色土を主とする土からなる49層(図11・12:29~77層)に分けられ、それらが所々不規則な互層をなすことが観察できた。盛土の多くは水平堆積することなく、分層線の多くは斜めに入ること、盛土にはほぼロームのみからなる部分がかなりの範囲で見られること(図11:C-C')など際立った特徴が認められる。

H1地点では、1箇所ごく小部分ではあるが、墳丘を切断し断面観察を行なった(図6:D-D'および図7:E-E'の左端)。この部分の墳丘は、ほとんどロームのみからなり、ローム粒、ロームブロックを主とする層が不規則に入り組んで盛土がなされているようであった。

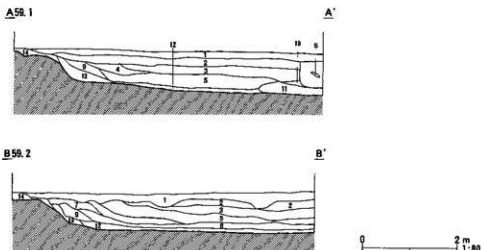
以上わずかな手掛かりではあるが、本古墳の墳丘に関しては、一定の厚さの土を突き固めて逐次積み重ね高さを増してゆく工法とはかなり異なった築成方法がとられた可能性があること、盛土は部分的にほぼロームのみからなることなどの特徴が指摘できる。また、そうした築成方法に関連するのかわ、総じて盛土の表面が軟弱で、実際墳丘面を確定しにくい場合があったことを付け加えておきたい。

b. 周堀

横断面形など周堀の形状が判る調査を行なったのは、A・B・H1地点である。

周堀外縁は、全体としておむね円形に近い形態を呈するようであるが、かなり歪である。とくにH1、G3地点、G1地点墳丘西トレンチで確認した墳丘西側では、周堀外縁が大きく張り出し、正円に復元することはかなりむづかしい。また、D地点でも周堀外縁がやや広がるようである。周堀外縁での全長は、東西方向で62.8m、北西―南東方向で63.2mである。周堀内縁もかなり曲折するが、確認できた範囲では円形に近く復元することができる。

周堀の断面形は、H1地点では内外壁ともにほぼ同じように立ち上がる船底形である。E地点では、内壁がゆるやかに傾斜してそのまま最深部となり、底面がゆるやかな曲線を描き、やや急な外壁へと



万年寺八幡山古墳B地点土層説明【A-A'・B-B'】

- 1 暗灰褐色土 As-Aを多く含みざらつく。ローム粒子、若干含む。2層より明るい。
- 2 暗灰褐色土 As-Aを含みざらつく。ローム粒子含む。1層より暗い。3層より明るい。
- 3 黒灰褐色土 As-A? (As-B?)を含みざらつく。5層よりやや暗い。
- 4 黒灰褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。5層よりやや明るい。2層より暗い。
- 5 黒灰褐色土 ローム粒子を若干含む。3層より明るい。やや粘質あり。12層より暗い。
- 6 黒灰褐色土 ローム粒子を若干含む。5層よりやや明るい。7層よりやや暗い。
- 7 黒灰褐色土 ローム粒子霜降り状に含む。6層よりやや明るい。

- 8 暗褐色土 ローム粒子霜降り状に含む。小型ロームブロック含む。12層より暗い。6層より明るい。
- 9 黒灰褐色土 ローム粒子霜降り状に含む。ロームブロック若干含む。4層より明るい。2層より暗い。
- 10 暗褐色土 暗褐色土ブロック含む。黒色土ブロック混じり。3層より明るい。11層より暗い。
- 11 暗褐色土 ローム粒子若干含む。10層より明るい。12層より暗い。
- 12 暗褐色土 ローム粒子。小～中型ロームブロック多く含む。粘性強い。13層より明るい。
- 13 暗褐色土 ローム粒子多量に含む。中～大型ロームブロック含む。14層より暗い。
- 14 暗褐色土 ローム粒子霜降り状に含む。小～中型ロームブロック霜降り状に含む。13層よりやや明るい。

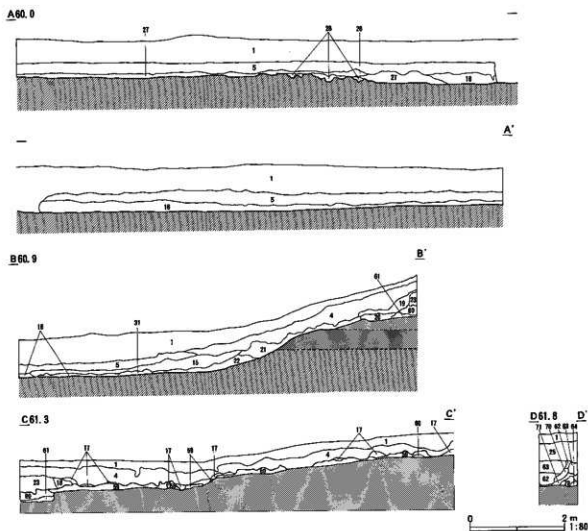
図5 万年寺八幡山古墳B地点土層断面図

連なる。内壁より外壁の傾斜の方が急である。周堀幅は、E地点で9.3～11.0m、H1地点で8.9～11.7m、深さは、B地点で70～76cm、E地点で79cm、H1地点の2本のサブトレンチでは、北から82cm、91cmである。

周堀覆土は、黒褐色土、暗褐色土、ロームからなり、H1地点のサブトレンチでの所見を例とすれば、流入土や壁などの崩落土のロームが不規則に混じった下層土が堆積した後、主に外壁側からAs-Bが流入し、最終的に暗褐色土や黒褐色土などやや黒みの強い土で周堀全体が埋まっている。

H1地点では、周堀に入れた2本のトレンチの両方で浅間B軽石(As-B)を確認している(図7: E-E'、F-F'、テフラの自然科学的分析・同定に関しては、第IV章参照)。As-Bは、周堀覆土中であり分散、上下して確認できたが、覆土のほぼ中位では、団塊状をなし途切れ途切れの斜めの層をなし濃集していた。このAs-Bの濃集層では、部分的にアッシュと思われる淡い赤みを帯びた白っぽい薄層が軽石の団塊に随伴していることが観察できた。この周堀内のAs-Bの団塊が降下後かなりの期間をはさんで二次的に周堀に吹き集められた層ではないことを物語る。

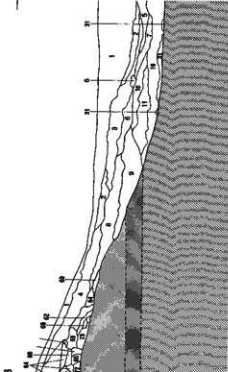
なお、本古墳とつつじ山古墳の両者の周堀を調査したD地点では、同一の土層断面で近接する周堀の内、本古墳の周堀覆土にのみAs-Bが含まれることを確認している(図21: C-C')。



万年寺八幡山古墳H1地点土層説明【A-A'・B-B'・C-C'・D-D'・E-E'・F-F'】

- | | | | |
|--------|---|---------|--|
| 1 表土 | 5層に近いものからガラ層まで雑多。墳丘表土は、笹竹の根の葉落した土。 | 8 褐色土 | 6層に近いが、部分的に黒褐色土が塊状に混じる。 |
| 2 暗褐色土 | 暗褐色土を主に、ローム粒・ローム小ブロック（径10mm土）を含む。 | 9 褐色土 | ローム・暗褐色土・黒褐色土が不規則なミナをなす。黒褐色土は雲状、ロームブロック（径10mm土）散在あり。 |
| 3 暗褐色土 | 暗褐色土・黒褐色土とローム粒・ロームブロック（径5～20mm、径50mm次のブロックも少々あり）の混合土。マウンドを壊し投棄した土。 | 10 暗褐色土 | 6層に近いが、暗褐色土が多い。 |
| 4 黄褐色土 | 暗褐色土とロームの同量程度の混合土。ローム小ブロック（径5mm土）を含む。 | 11 暗褐色土 | 9層に近いが、暗褐色土が多く、ザラつく。 |
| 5 暗褐色土 | As-A相当の灰白色軽石粒が最も集中する暗褐色土。ローム粒も含む。全体にザラつき、硬くしまっている。以下、16層まで葉の多寡はあれ、軽石粒を含む。 | 12 暗褐色土 | ローム粒を含む。黒褐色土の薄層が何枚か挟む。上部には、部分的に炭化物の薄層が見られる。 |
| 6 暗褐色土 | 暗褐色土とロームの混合土。暗褐色土とロームは、部分的に極々細かなラミナをなす。粒子粗く、小礫（径2～3mm）も含む。 | 13 黒褐色土 | 黒褐色土のブロック。 |
| 7 暗褐色土 | 暗褐色土とロームの混合土。軽石粒を含むも、5層に比し、はるかに少ない。 | 14 暗褐色土 | 12層に近いが、黒褐色土の薄層が多い。ロームブロック（径50mm土）も極少量含む。 |
| | | 15 暗褐色土 | 5層に近いが、灰白色軽石粒が少ない。全体に粒々粗くガリガリしている。 |
| | | 16 暗褐色土 | 5層に近いが、粒子はるかに細かく、黒みが強い。ローム粒を少量含む。軽石粒（径1～3mm）を含むも、より上位の層に比し、急減する。 |

図6 万年寺八幡山古墳H1地点土層断面図(1)



- 17 黄褐色土 ロームと黒褐色土の混合土。しまりが全くない。填圧礫層土の崩落、流出土。
- 18 褐色土 やや厚みのあるローム質の土。
- 19 黄褐色土 ローム層を主に、ロームブロック (径20~30mm) を含む。
- 20 褐色土 10層に近いが、粗かな黒褐色土粒を含む。
- 21 暗褐色~黒褐色土 黒褐色土を主に、少量土を散状に含む。旧赤土の黒褐色土の崩落、流出土。
- 22 褐色土 暗褐色土と黄褐色土の混合土を主に、黒褐色土を散状に含む。
- 23 黄褐色土 ローム粒を主に、薄いロームブロック (径10~20mm) を含む。礫層礫層土の可能性もある。
- 24 黄褐色土 2層に近いが、ロームブロック (径10~40mm) が大きい。

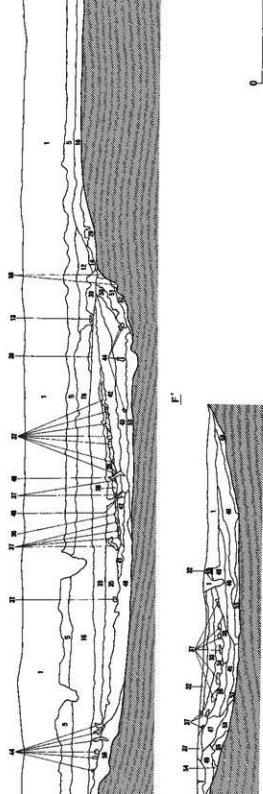
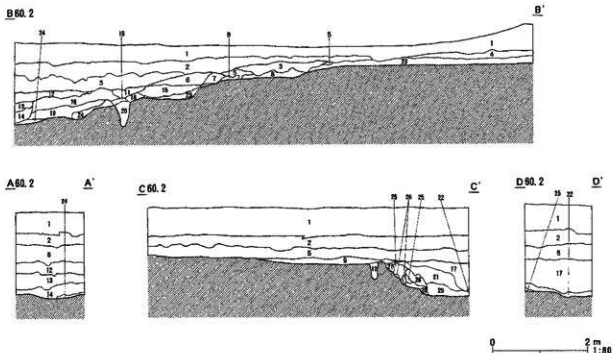


図7 万年寺八幡山古墳H1地点土層断面図(2)

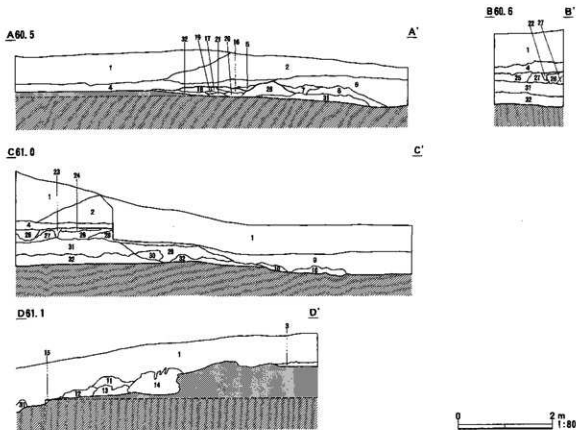
- 25 黄褐色土 3層に近いが、ロームブロック(径10~60mm)が多い。
- 26 暗褐色土 16層土とロームが斑状に混合する。
- 27 暗褐色土 16層に近いが、黒褐色土を斑状に含み、黒みが強い。黒褐色土は、所々大ブロックをなす。
- 28 黄褐色土 暗褐色土とロームが斑状に混合する。
- 29 黄褐色土 ロームと暗褐色土・黒褐色土の不均質な混合土。
- 30 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 31 褐色土 16層土とローム粒が斑状に混じる混合土。
- 32 暗褐色土 As-Bを全体に含む。37層に比し黒み強く、しまりなくサラサラしている。
- 33 黒褐色土 32層に近いが、黒みが強く、しまっている。32層よりさらにAs-B多く、ブロックがはつきりしている。ローム粒を含む。ザラザラ。
- 34 暗褐色土 33層に近いが、As-B多い。As-Bを全体に多量に含み砂層のような感地。下部に炭化物(径5~10mm)が点在する。
- 35 黒褐色土 黒褐色土あるいは黒色土。33層に近いが、テフラが多く、黒味がさらに強い。
- 36 黒褐色土 As-Bを多く含む。一見すると砂層に見紛う。
- 37 黒褐色土 黒褐色土と灰褐色のテフラが混合するブロック。部分的にテフラのみに近いブロックで、ブロック上部にやや赤味のある灰褐色(バージュ)のアッシュの層が薄く残存する。
- 38 黒褐色土 細かく鉄屑されたような長さ1~5cm前後の炭化物が密集する層。黒褐色土は、炭化物よりやや多い程度。全体にAs-Bを含むも、34層より少ない。
- 39 黒褐色土 10層と同じ炭化物を所々含む。As-Bを含むも、8層より少ない。
- 40 黒褐色土 11層に近いが、点在する炭化物はより少ない。
- 41 黒褐色土 36層に近いが、テフラがやや減る。粘性、しまりが出てくる。53層の白みがかったロームが混じる。
- 42 黒褐色土 41層に近いが、シルト混入せず、テフラブロックが多い。テフラは、全体に36層より量的に少ないが、ブロックはより目立つ。
- 43 黒褐色土 42層に土質に近いが、テフラ・ブロック見られない。テフラは、42層と本層間で急減し、42~43層間に不整合がある。42層に比し粘性が強い。48層土を少量含む。
- 44 暗褐色土 黒褐色土とロームが斑状に混じるブロック。
- 45 黒褐色土 ローム粒を少量含む。As-Bの量は、40~45層下面に大きな不整合があると見られるが、粒子の細眼では、38・39層と45層間に不整合が見られる。
- 46 黒褐色土 ローム粒を少量含む、小角礫を点々と含む。40層よりサラサラしており、As-B急減する。40層より色調若干明るい。黒褐色土の域では、本層下面に不整合がある。
- 47 暗褐色土 ローム粒を含み、ロームブロック(径5~10mm)を粒わずかに含む。6~13層より明瞭に色調明るく、茶色がかかる。
- 48 暗褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒を適量なく含む。小角礫を点々と含む。As-Bは識別できない。
- 49 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(径5~20mm)をかなり多く含む。炭化物を点々と含む。
- 50 黒褐色土 43層に近いが、ローム粒が多い。
- 51 黒褐色土 43層に近いが、ローム粒多く、顆降り状。黒褐色土のブロックを含む。
- 52 褐色土 53層に近いが、やや黒みが強い。
- 53 褐色~黄褐色土 白みがかったロームと黒褐色土の斑状の混合土。上半は黒褐色土が多い。ロームは、所々径20~30mm大のブロック。黒褐色土が主となるか否かの点では、43~53層間に不整合が見られる。
- 54 暗褐色土 49層に近いが、炭化物を含まず、ロームブロックも少ない。
- 55 黄褐色土 ハードロームの大ブロック。
- 56 黄褐色土 ソフトロームに似たロームと黒褐色土が斑状に混じる。黒褐色土のブロックを所々斑状に含む。
- 57 黄褐色土 黒褐色土を含む。上部に黄褐色のロームブロック集中。下半は、全体にロームが黒味がかかる。
- 58 黄褐色土 黄褐色土と黒褐色土の混合土。
- 59 黄褐色土 径10~50mm大を主にさらに大きなものを含むロームブロックとローム粒の不規則な混合土。所々硬い。
- 60 褐色土 黒褐色土とローム粒が同量程度混合する。60・61層は明白な塊状礫層土。
- 61 褐色土 黒褐色土とロームの混合土。ロームブロック(径5~30mm)を含む。
- 62 黄褐色土 ロームブロック間の空隙。ローム粒少々。
- 63 黄褐色土 25層に近いが、ロームブロックが多く、密接している。
- 64 褐色~黄褐色土 黒褐色土とローム粒・ロームブロック(径20~50mm)の混合土。
- 65 黄褐色土 ロームブロック。
- 66 黄褐色土 63層に近いが、ロームブロックが大きく、径100mm位のものもある。
- 67 黄褐色土 66層に近いが、さらに大きいロームブロックあり。ブロックもより密接している。
- 68 黒褐色土 ローム粒を斑状に含む。
- 69 暗褐色土 64層に近いが、黒褐色土が多い。
- 70 黄褐色土 大小ロームブロックを主に、隙間にローム粒が詰まる。
- 71 黄褐色土 大小ロームブロックを主に、隙間に黒褐色土少々。
- 72 黄褐色土 14層に近いが、ロームブロックの輪郭が不明瞭。
- 73 黄褐色土 10層に近いが、ロームブロックが小さい。



万年寺八幡山古墳H2・3地点土層説明【A-A'・B-B'・C-C'・D-D'】

- | | |
|---------|---|
| 1 表土 | 14 極暗褐色～黒褐色土 |
| 2 褐色土 | As-Aを多量に含む。ローム小ブロック(径5mm±)を含む。硬くしまっている。 |
| 3 褐色土 | As-Aが密集する。As-Aと褐色土はほぼ同量で、細かなラミナをなす。 |
| 4 暗褐色土 | 暗褐色土と黒褐色土粒・黒褐色土ブロック(径5～40mm)を主に、ローム粒、ロームブロック(径5～20mm)を含む。As-Aと思われる灰白色パミス点状を。硬くしまっている。 |
| 5 暗褐色土 | 2層に近いが、黒褐色土を斑状に含む。黒味がやや強い。黒褐色土は、周囲中央へ行くほど多くなる。ローム粒を少量含む。 |
| 6 暗褐色土 | 黒褐色土・暗褐色土・褐色土を主に、ローム粒を含む。 |
| 7 褐色土 | ローム粒を多く、ロームブロック(径5～10mm)を少量含む。 |
| 8 褐色土 | ロームを主に、暗褐色土を含む。ロームと暗褐色土が分離して斑状に混じる。 |
| 9 暗褐色土 | 褐色土と暗褐色土の混合土を主に、ローム粒、ロームブロック(径5～10mm)を含む。 |
| 10 暗褐色土 | 多量のロームブロックを斑状に含む。ピット覆土。 |
| 11 暗褐色土 | 6層に近いが、褐色土が少ない。 |
| 12 暗褐色土 | 5層に近いが、黒褐色土が多く、かなり黒味が増す。 |
| 13 暗褐色土 | 暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、ローム粒をかなり含む。ロームブロック(径5～40mm)が水玉状に点在する。12層より黒褐色土はるかに少ない。 |
| | 旧表土の黒褐色土を主に、ローム粒を含み、ロームブロック(径5～20mm)が少量点在する。 |
| | 11層に近いが、黒褐色土はるかに多い。下部にロームブロックを少量含む。 |
| | 15層に近いが、褐色土、ロームが少ない。褐色土ブロック(径30～50mm)を含む。 |
| | 旧表土の黒褐色土の流入土。ローム粒を含む。北壁では、黒味がかなり強くなる(黒色)。 |
| | 褐色土とロームの混合土。 |
| | 黒褐色土と褐色土の混合土を主に、斑状にロームブロックを含む。 |
| | 19層土を主に、ロームを斑状に含む。 |
| | 暗褐色土を均一に含む。ロームブロック(径10mm±)がわずかに点在する。 |
| | 13層に近いが、ローム粒・ロームブロック多い。ロームは斑状をなす。 |
| | 24層に近いが、暗褐色土とロームが分離しており、斑状。 |
| | ロームを主に、暗褐色土を均質に含む。下部はロームが斑状。 |
| | ローム粒を主に、暗褐色土を含む。 |
| | ハードロームの大ブロック。 |
| | ローム粒・ロームブロック(径5～40mm)を主に、褐色土を少量均一に含む。 |
| | ロームを主に(99%以上)、少量の暗褐色土を含む。築りかたで地山とは異なる。 |
| | 黒褐色土あるいは極暗褐色土。旧表土の黒褐色土。ローム粒を含む。 |

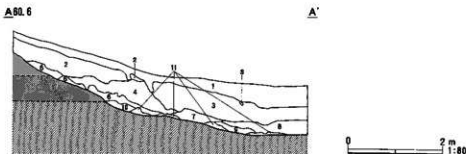
図8 万年寺八幡山古墳H2・3地点土層断面図



万年寺八幡山古墳H4地点土層説明【A-A'・B-B'・C-C'・D-D'】

- | | | | |
|---------|---|---------|---|
| 1 褐色土 | しまりのないサラサラ褐色土の表土および瓦や礫を多量に含む墳丘の修復土。以下15層までは、堆積時期という点では、基本的に表土に含まれる。 | 17 黒褐色土 | ロームを斑状に含む。 |
| 2 褐色土 | 黄褐色土、褐色土、黒褐色土がラミナをなす。墳丘構築土を削平、移動した土。 | 18 黒褐色土 | 黒褐色土とロームが同量程度斑状に混合。 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒を含む。 | 19 黄褐色土 | ロームの大ブロック。 |
| 4 褐色土 | 粒子の粗いガサガサした褐色土を主に、黒褐色土、ローム粒・ローム小ブロック(径10mm±)を同量程度含む。2層に近いが、黒褐色土がやや多い。 | 20 暗褐色土 | 黒褐色土を斑状に含む。全体に粒子細かくサラサラしている。 |
| 5 暗褐色土 | 褐色土を斑状に含む。 | 21 黄褐色土 | 黒褐色土、暗褐色土、ロームが斑状に混じる。ロームブロック(径30~40mm)を含む。 |
| 6 褐色土 | 1層に近いが、ローム小ブロックが若干多い。ドニール混入。つまり、1~4層は、表土あるいは盛土。 | 22 黒褐色土 | ローム粒、ロームブロック(径2~30mm)を斑状に含む。 |
| 7 暗褐色土 | 11層に近いが、ロームブロックが多い。 | 23 黄褐色土 | 4層の黒褐色土・ローム比が逆転した層。 |
| 8 暗褐色土 | 11層に近いが、黒褐色土がより多く、大ブロックが見えない。 | 24 黒褐色土 | 4層に近いが、ロームブロックが大きい。 |
| 9 褐色土 | 粒子の粗いガサガサした褐色土を主に、ローム粒・ロームブロック(径20~30mm)を含む。 | 25 黄褐色土 | ロームブロック(径5~50mm)を主に、黒褐色土・黒褐色土ブロックを含む。 |
| 10 黄褐色土 | 11層土とロームブロック(径10~100mm)が混合。 | 26 黄褐色土 | ロームの大ブロック。 |
| 11 暗褐色土 | 黒褐色土と1層の褐色土との混合土。ローム粒・ロームブロックを含む。 | 27 黒褐色土 | 上部などに部分的に暗褐色土を含む。旧表土の黒褐色土とその下位の暗褐色土の一部がそのまま残りは反転した状態で、修復土として用いられている。 |
| 12 暗褐色土 | 3層に近いが、褐色土多く、しまっている。 | 28 暗褐色土 | 20層に近いが、黒褐色土が局所的に大ブロックとして入る。ロームブロック(径20mm±)を少量含む。 |
| 13 暗褐色土 | 黒褐色土とローム粒・ロームブロックが斑状に混じる。 | 29 暗褐色土 | 旧表土の黒褐色土(31層土)に近いが、黒味弱く、しまりが無い。墳丘が削られ、旧表土の黒褐色土がある期間露にさらされたまま置かれた部分の土が本層か。 |
| 14 黒褐色土 | 2層に近いが、黒褐色土が多くしまっている。 | 30 暗褐色土 | 29層に近いが、ロームが多い。 |
| 15 黒褐色土 | 旧表土の黒褐色土に近いが、ローム粒が多い。 | 31 黒褐色土 | 旧表土の黒褐色土の純層。 |
| | | 32 褐色土 | 地山のローム層(黄褐色土層)上の褐色土。 |

図9 万年寺八幡山古墳H4地点土層断面図



万年寺八幡山古墳H5地点土層説明【A-A'】

- | | |
|--|---|
| 1 褐色土 表土層。 | 6 黒褐色土 1層表土の黒褐色土の崩落土。上部には、斑状に3層土を含み、所々黒褐色土が純層をなす。 |
| 2 褐色土 粒子の細かいサラサラした褐色土。下部で若干黒褐色土を含む。2層よりしまりがない。 | 7 褐色土 2層土に近いが、ロームブロック（径10～50mm）が中央にやや見られる。下方では、より小さいロームブロック点存在。 |
| 3 暗褐色土 粒子の細かいサラサラした褐色土を主に、暗褐色土を崩壊なく含む。ロームブロック（径20～50mm）が散在する。斜面下方にゆくほど、黒味が強くなっていく。 | 8 暗褐色土 やや黒味強く、ロームブロック（径60mm土）を少数含む。 |
| 4 暗褐色土 3層土を主に、黒褐色土ブロック（径10～50mm）を全体に雲状に含む。3層よりしまっている。 | 9 暗褐色土 6層に近いが、ローム粒・ロームブロックが不均質に混入。 |
| 5 褐色土 3層に近いが、しまりが強く、黒褐色土、ロームを斑状に含む。 | 10 暗褐色土 4層に近いが、黒褐色土のブロックが小さく、輪郭も不明瞭で、量も少ない。 |
| | 11 黄褐色土 ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。 |

図10 万年寺八幡山古墳H5地点土層断面図

c. 埋葬施設

墳頂部で検出した埋葬施設は、以下に記す石棺であるが、石棺が墳頂部中央からやや離れた位置にあるため、石棺の調査と併行して、墳頂部中央における埋葬施設の有無を確かめるべく確認作業を実施した。以下、G1地点の調査の内、墳頂部中央における確認調査および石棺について記載する。

墳頂部中央の調査は、現状保存を旨とした予備的な確認調査である。また、先記したように石棺自体は、少なくとも昭和31年前後する時期までは半ば露出していたことが判明しており、調査はそれを再び掘り起こし、今後の保存整備のために遺存状態を確認し、記録することを目的として行なった。石棺の現状保存を念頭に、石棺を毀損する可能性のある調査法は、最少限にとどめる必要があった。

なお、以下報告する石棺は、いわゆる箱式石棺と同様に、石材を組み合わせた築かれた箱形の空間をなす固定した施設である。それは、可動性を全く持たず「椁」と呼ぶべき遺構ではあるが、慣用的な用法もあり、「石棺」という呼称を用いる。

墳頂部中央

G1地点、墳頂部中央における確認調査は、墳丘や周堀から推定される墳丘中心点（図4：●）を中心に4.5m×7mの長方形のテスト・ピットを設定し、表土を除き、盛土を少しずつ掘り下げる形で行なった。

表土を20～40cm前後除去したところ、ほぼ墳丘の中心点を中心に、大きな不定形の落ち込みが見られることが判った。当初盗掘坑とも考えたが、墳頂部がある時期くぼんでいたとの証言もあり、判定できないまま、土層観察用ベルトを残し、テスト・ピットを少しずつ掘り下げていった。テスト・ピッ

トの縁辺では、墳丘の盛土と思われる層が現われたが、中央では表土に類する土が続き、ほぼ調査区内全域で墳丘に関連する土が露出した段階から面的な確認作業に入った。実際には、明瞭な表土以下を掘り下げる過程では、重複する落ち込みの土と墳丘の盛土に由来する土が入り交じり、識別できない土層も多く、土層断面で、墳丘の盛土とそれ以外の土、新しく墳丘の落ち込みに堆積した土などを識別しつつ、試行錯誤を重ねながら徐々に調査区を掘り下げてゆく他なかった。

調査後の土層断面図などの検討を踏まえた所見は、以下のとおりである。

まず、テスト・ピット内の堆積土は、大きく4つに分けることができる(図11・12)。

- a：1層。層厚30cm前後で墳頂部全体を覆う、篠竹の根の繁茂する純表土。石棺の確認面も、この層のほぼ下面である。
- b：2～12層。墳頂部の新しい掘り込み覆土。土質から見て、表土の一部であり、近・現代の攪乱層と考えてもよい。
- c：13～28層。まず、bとした攪乱層とは明らかに土質が異なり、一線を面すことができる。29層以下の墳丘盛土層は、ロームを主とする土と黒褐色土を主とする土、暗褐色土が不規則な互層をなすのに対し、13～28層は、褐色土や暗褐色土からなり、断面ではかなり明瞭に区別できる。後述するテスト・ピットの下面で面的に確認した細長い落ち込みの可能性のある土は、断面では、17層に相当し、本群に含まれる。
- d：29～77層。墳丘盛土層。堅く突き固められてはいないが、やはりかなりしまっており、ロームを主とする土と黒褐色土を主とする土が特徴的に入り混じる。土層の多くは、主に斜めに積み上げられた盛土の小単位を示すようである。

以上の土層の大きな区分からは、墳丘中心点を中心に、周囲の墳丘盛土とは異なった一群の土層cが観察できること、その一群の土層は、少なくともテスト・ピット内では、確実に墳丘盛土と認定できる土層dより層位的に後出することまでは確認できる。また、実際に盛土が途切れ、落ち込みをなす範囲とcとした土層のまとまりが堆積する範囲から、土坑状の掘り込みがあったことが推定できる(図11)。

土坑状の掘り込みは、隅丸長方形に近い平面形である。ただし、北東辺に関しては、充分な観察をなし得ていない。最も残りのよい南東側の側辺長7.1m、中央での横幅3.37m、長軸方位は、N-36°-Eである。上部の大半は、攪乱により壊されており、覆土の上部をわずかに確認したにとどまる。

テスト・ピットでは、掘り込みなどの面的な確認も逐次行なった。テスト・ピットの下面では、水平面での特徴的な土層切断面を観察することができた。図11の土坑状の掘り込み内の線の内、輪郭線のすぐ内側の線は、テスト・ピット下面での掘り込みの下端線、その内側の線が、テスト・ピット下面で確認した土層の区分線である。掘り込みのほぼ中央で、周囲の土とは明瞭に異なる細長くのびた島状の範囲が識別できた。

この部分は、周囲の土がやや黒みの強い暗褐色土を主に大小のロームブロックが集中するのに対し、より淡い色調の暗褐色土を主にロームブロックはわずかに縁際に見られるのみであるなど、周囲の土との違いはかなり鮮明である。ただし、北東半では、やや輪郭が不明瞭になり、ロームブロックが多くなる。筋が付いて北東にのびるように見える線は、その部分を表している。この特徴的な土の分布範囲は、全体の長さが4.7m前後、幅は64～74cm、仮に長軸をとるなら、方位はN-35°-Eを指す。な

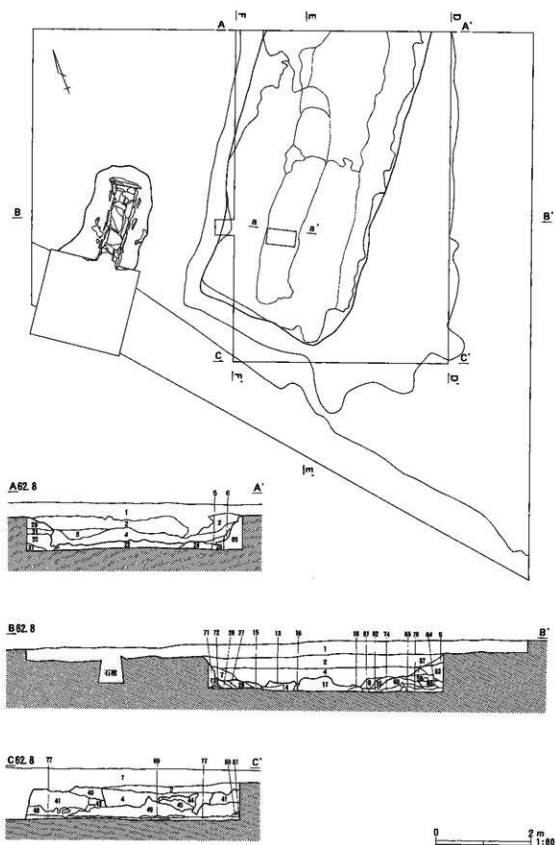
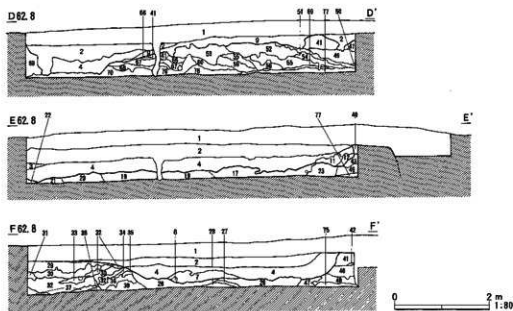


図11 万年寺八幡山古墳G1地点平面図および土層断面図(1)



万年寺八幡山古墳G1地点土層説明【A-A'・B-B'・C-C'・D-D'・E-E'・F-F'】

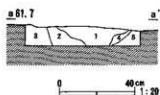
- | | | | |
|-----------|---|---------|---|
| 1 暗褐色～褐色土 | 葎竹などの根が繁茂する現状土。 | 16 暗褐色土 | 暗褐色土を主に、黒褐色土を多く含む。主に径5～30mm大のロームブロック（径10cm大のブロックもある）が局所的に密集する。上位の層に比し、よりしまっている。 |
| 2 褐色土 | 粒子が極細かく、粘性・しまりは全くないが、色調がロームによく似た褐色土を主に、黒褐色土、ローム粒・ローム小ブロックを含む。近・現代の擾乱内堆積土。以下、12層まで同様の擾乱内堆積土。 | 17 暗褐色土 | 16層に接近いが、ロームブロックが分散している。主体部の可能性のある落ち込み中央で確認した細長い落ち込み層土。 |
| 3 暗褐色土 | 2層に近いが、径10cm大のロームブロックを含む。 | 18 暗褐色土 | 16層に近いが、黒みが強く、ロームブロックが少ない。 |
| 4 暗褐色土 | 2層に近いが、黒褐色土がやや多く、しまっている。 | 19 暗褐色土 | 暗褐色土を主に、径10mm大のロームブロックが水玉様に点在する。直上の4層に比し、ロームブロック激減する。 |
| 5 暗褐色土 | 4層に近いが、ローム粒が多い。 | 20 暗褐色土 | 19層に近いが、ロームブロックがわずかに少ない。 |
| 6 褐色土 | 崩落ローム。 | 21 暗褐色土 | 19層に近いが、径10cm大を超えるロームブロックが含まれる。 |
| 7 暗褐色土 | 4層に近いが、黒褐色土が多く、ロームブロックが少ない。 | 22 暗褐色土 | 21層に近いが、若干黒褐色土が多い。 |
| 8 暗褐色土 | 7層に近いが、ややローム粒多い。 | 23 暗褐色土 | 16層に近いが、ロームブロックが大きく、径50～80mm大のブロックが主。 |
| 9 褐色土 | 4層に近いが、さらに褐色土多く、粘性・しまりが少ない。 | 24 暗褐色土 | 22層に近いが、20、30mm大のロームブロックが多い。 |
| 10 暗褐色土 | 9層に近いが、黒褐色土を多く含む。 | 25 暗褐色土 | 22層に近いが、ローム粒が多く、ロームブロックが少ない。 |
| 11 褐色土 | 4層に近いが、黒みや強く、ローム大ブロックが多い。 | 26 暗褐色土 | 22層に近いが、ロームブロックが少ない。 |
| 12 暗褐色土 | 4層に近いが、ローム粒・ローム大ブロックが少なく、さらに黒みが強い。 | 27 暗褐色土 | 26層に近いが、黒褐色土が多く、ロームブロックが少ない。 |
| 13 褐色土 | 褐色土を主に、黒褐色土を若干含む。微妙に赤みがかかる。以下、28層まで主体部の可能性のある落ち込み層土。この層あたりを境に、基調をなすが、粒子の細かい褐色土からややしまった暗褐色土に代わる。 | 28 暗褐色土 | 26層に近いが、ローム粒が多い。 |
| 14 褐色土 | 13層に近いが、黒褐色土がやや少ない。 | 29 褐色土 | ローム粒・ロームブロックを主に、暗褐色土を断続的含む。本層以下、填土堆積土。 |
| 15 褐色土 | ロームを主に、黒褐色土を多く含む。4層より明瞭にしまっている。 | 30 黒褐色土 | 黒褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを含む。 |

図12 万年寺八幡山古墳G1地点土層断面図(2)

- 31 暗褐色土 暗褐色土を主に、黒褐色土を含む。
- 32 褐色土 ローム粒・ロームブロックを主に、褐色土を極微量含む。
- 33 黒褐色土 30層に近いが、ローム大ブロックを含む。
- 34 黒褐色土 黒褐色土とロームの混合土。黒褐色土の方がやや多い。
- 35 褐色土 黒褐色土とロームの混合土。ロームの方がやや多い。
- 36 黒褐色土 30層に近いが、ロームブロックが少ない。黒褐色土とロームはほぼ同量。
- 37 黒褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを極微量含む。
- 38 黒褐色土 37層に近いが、ローム粒が多い。
- 39 暗褐色土 暗褐色土を主に、黒褐色土、ロームブロックを含む。
- 40 暗褐色土 暗褐色土とロームの混合土。
- 41 褐色土 ローム粒を主に、所々大小のロームブロックを含む。
- 42 黒褐色土 黒褐色土を主に、ロームブロックを含む。
- 43 褐色土 ローム粒・ロームブロックを主に、暗褐色土を含む。ロームブロックの輪郭ははっきりしない。
- 44 褐色土 暗褐色土とローム粒・ロームブロックが不均質な混合土。
- 45 黒褐色土 黒褐色土とロームの混合土を主に、径5～30mm大のロームブロックを含む。
- 46 黒褐色土 45層に近いが、ロームブロックが少ない。
- 47 黒褐色土 45層に近いが、ロームブロックが不均質に混じる。
- 48 黒褐色土 45層に近いが、径30、40mm大のロームブロックが点在。水玉様。
- 49 褐色土 43層に近いが、径10cm以上のローム大ブロックが密集する。
- 50 黒褐色土 黒褐色土を主に、ロームを斑状に含む。
- 51 暗褐色土 暗褐色土(黒褐色土とロームの混合土)を主に、径5～40mm大のロームブロックが斑状に混じる。
- 52 暗褐色土 51層に近いが、ブロックの大小の比率が異なる。
- 53 暗褐色土 52層に近いが、ロームブロックが少ない。
- 54 褐色土 52層に近いが、黒褐色土が少なく、ローム小ブロックが多い。
- 55 褐色土 ローム粒及び、径10mm大以上、径15cm大を含むロームブロック間に、暗褐色土が詰まっている。
- 56 褐色土 55層に近いが、ロームブロックが少なく、全体に大きなブロックが目立つ。
- 57 褐色土 ローム粒、ロームブロックを主に、黒褐色土、暗褐色土を含む。
- 58 褐色土 57層に近いが、黒褐色土が多い。
- 59 褐色土 ローム小ブロックを主に、暗褐色土を含む。
- 60 褐色土 径10cm大のロームブロックを含むロームを主に、黒褐色土を微量含む。
- 61 黒褐色土 黒褐色土とローム粒の混合土。
- 62 暗褐色土 暗褐色土を主に、ロームブロックを含む。ロームブロックは、径30mm大が主で、輪郭がはっきりしている。
- 63 ぶい貴褐色土 黒褐色土とロームの混合したぶい貴褐色土を主に、5～20mm大のロームブロックが点在する。
- 64 暗褐色土 ロームと黒褐色土が均質に混合する。ロームブロックは少ない。
- 65 暗褐色土 暗褐色土を主に、極わずかにロームブロックを含む。
- 66 褐色土 ロームを主に、暗褐色土・黒褐色土が均質に混合する。
- 67 黒褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックが斑状に混じる。
- 68 黒褐色土 黒褐色土とローム粒・ロームブロックが斑状に混合。
- 69 黒褐色土 68層に近いが、ロームブロックがやや多い。
- 70 褐色土 純層に近いローム。大小のロームブロック間に、ローム粒が詰まっている。
- 71 褐色土 70層に近いが、ブロック間に所々極微量の黒褐色土が混入する。
- 72 黒褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックが斑状に混じる。67層よりロームが多い。
- 73 褐色土 71層に近いが、やや黒褐色土が多い。
- 74 褐色土 63層に近いが、ロームブロックがやや大きい。
- 75 黒褐色土 46層に近いが、ロームが多い。
- 76 黒褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを含む。ロームブロックは、径50mm大のもの少く、他は小さく局在する。
- 77 褐色土 ローム粒・ロームブロックの純層。若干黒みがある。

お、1箇所サブトレンチをいれたが(図13：a-a')、この部分の堆積土の一部を断面観察したのみに終わった。断面図の1～5層は、テスト・ピット全体の土層断面図の17層をより細かく分けた土層になる。

以上、G1地点墳頂部中央のテスト・ピットについて概略を記した。墳頂部中央に土坑状の掘り込みが見られ、その土坑状の掘り込みのほぼ中央、推定される墳丘中心点をとる細長い痕跡を、テスト・ピット下面で土の違いとして確認することができた。その痕跡を、本古墳の中心埋葬施設の痕跡



万年寺八幡山古墳G1地点サブトレ土層説明 [a-a']

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主に、ほぼ等量のロームが斑状に混入する。5mm大のロームブロックをごく部分的に含む。しまりなし。
- 2 褐色土 1層に近いが、ローム粒、3cm大のロームブロックを斑状に含む。
- 3 暗褐色土 1層に近いが、黒褐色土より多く、1、2cm大のロームブロックを少量含む。
- 4 褐色土 1層に近いが、ローム粒がかなり多い。
- 5 暗褐色土 3層に近いが、ロームブロックが少ない。

図13 万年寺八幡山古墳G1地点サブトレ土層断面図

と推定したくなるころではあるが、得られた証拠が間接的であることもあり、早急な結論は控えざるを得ない。本古墳の墳頂部中央では、攪乱による損壊を受けながらも、現地地表下70~80cm以下の深さでは生きている土を確認することができたことから、これ以下の深さに中心埋葬施設が造られたとすれば、それは土中に遺存しているはずであることが確かめられたと考える。

石棺

石棺は、現状の墳頂部平坦面中央より西に寄った位置で検出した。この位置は、周堀内縁から推定される墳丘中心点から見て西に2、3mずれている。

露出していた際の石棺の状態については、報告書（埼玉県教育委員会1956）に掲載された一葉の写真が残されている。この写真は、南東側斜め上から撮影されたものと思われ、天井石を失った石棺は、側石の頭がいくらか出る高さまで土に埋もれ、枯れ草のようなものが散らかった状態であったようである。また、石棺の南西小口側は、土が掘り返されているかに見え、確認調査で検出した南西側末端の側石より先には側石は見られない。あるいは、この写真の撮影時点で、すでに南西小口側は、確認したような状態と同様に側石などが失われていたのかもしれない。

石棺の調査は、まず表土を除去し、以前露出していた旧状にまで石棺を復し、しかる後石棺に伴う掘り込みが面的に確認できるまで全体を掘り下げ、続いて石棺内に埋積した土を除き、精査する形で進めた。南西側小口については、土取りにより失われた範囲の内、石棺を横切る部分を方形に掘り下げ、石棺断面の観察を行なった。したがって、観察・図化した石棺断面（図14：A-A'）は、昭和52年に撮影された断面写真（写真1：下段）とほぼ同じ位置である。ただし、土取り部分の修復に用いられた土を除くと、石棺を横切る断面はかなりえぐれているらしく、断面全体を切り直すことができなかった。

石棺は、石棺よりかなり大きい土坑中に設置されている。覆土の面的な広がりからの判断になるが、石棺に伴う土坑の平面形は、かなり不整な楕円形を呈し、現存長軸長は2.1m、中央での横幅1.34mを測る。南西端の断面では、上端幅1.65m、下端幅1.39m、深さ40cm前後の左右壁の傾斜が異なる箱形に掘り込まれていることが判る。

断面観察によれば、あらかじめ石棺より大きな土坑が掘り込まれ、坑底のほぼ中央に縦長の板石を側石として立て並べ、石棺を組み立てた模様である。土坑覆土は、11層に分けられ、6層は側石裏込めの褐色色粘土、4・5層も同種の褐色色粘土を多く含む層である。粘土は、覆土中にも散っており、

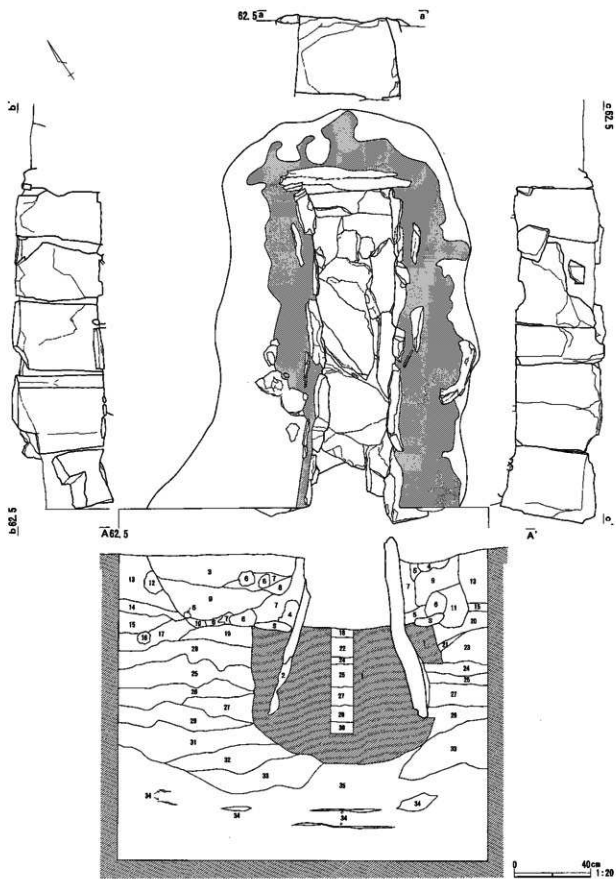


图14 万年寺八幡山古墳石棺平面・立面図および土層断面図

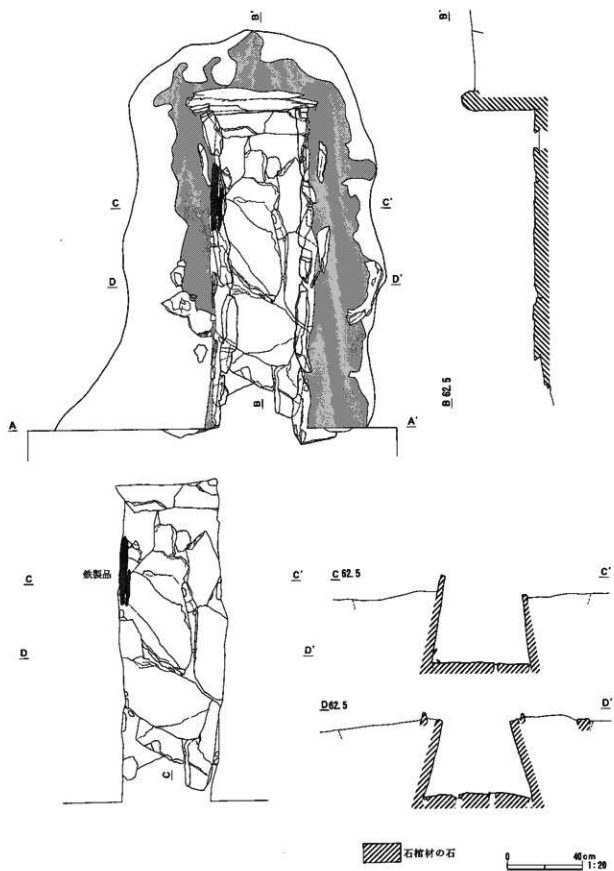


图15 万年寺八幡山古墳石棺平面・断面図

万年寺八幡山古墳石棺断面土層説明【A-A】

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色土 暗褐色土を主に、径2、3cm大のロームブロック、小砂利を含む。しまりが全くない。昭和52年の横丘部平時にえぐられた後、貼り付けられた土。攪乱埋土の一部。石棺が崩落する可能性があったため本層は除去できなかった。</p> <p>2 暗褐色土 基本的に1層と同じであるが、さらにしまりが少ない。1層を露出させた時点で削がれ落ちた部分の土。石棺材の脱落痕を埋めた土。</p> <p>3 褐色土 しまりが少ない。本層上部まで、部分的に笹の根などの攪乱が及んでいる。</p> <p>4 褐灰色土 褐灰色の粘土と褐色土の混合土。</p> <p>5 褐色土 4層に近いが、粘土が少なくない。</p> <p>6 褐灰色粘土 裏込めの褐灰色粘土塊。</p> <p>7 褐色土 褐色土を主に、褐灰色粘土を含む。5層よりさらに粘土が少なくない。</p> <p>8 褐色土 3層に近いが、上部に微量の粘土を含む。</p> <p>9 褐色土 3層に近いが、径5～20mm大のロームブロックを含む。</p> <p>10 褐色土 9層に近いが、ややロームが多い。</p> <p>11 褐色土 褐色土と黒褐色土の均質に混じる混合土。</p> <p>12 褐色土 ハードロームのブロック。</p> <p>13 暗褐色土 11層に近いが、径10mm大のロームブロックを少量含む。</p> <p>14 褐色土 13層に近いが、ロームが多い。径40mm大のロームブロックを含む。</p> <p>15 暗褐色土 13層に近いが、黒褐色土が多い。</p> <p>16 暗褐色土 暗褐色土の大ブロック。</p> <p>17 褐色土 ロームを主に、黒褐色土を含む。白みがかったロームブロックを斑状に含む。</p> <p>18 褐色土 ロームを主に、黒褐色土少量含む。しまりが少ない。局所的に小粒を含む。</p> | <p>19 暗褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒、径5～20mm大のロームブロックを斑状に含む。ロームは、白みがかっており、シルト化している。</p> <p>20 黒褐色土 19層に近いが、ロームが少なく、黒みが強い。</p> <p>21 黒褐色土 黒褐色土を主に、ロームを極微量含む。</p> <p>22 褐色土 ローム粒を主に、やや白みの強い硬いロームブロックを含む。</p> <p>23 褐色土 ロームを主に、黒褐色土を若干含む。</p> <p>24 黒褐色土 黒褐色土を主に、ロームを斑状に含む。</p> <p>25 褐色土 ローム粒、径10～15cm大のロームブロックを主に、黒褐色土を微量含む。</p> <p>26 褐色土 25層に近いが、黒み強く、粒子が細かい。黒褐色土をかなり均質に含む。</p> <p>27 黒褐色土 黒褐色土とローム粒・ローム小ブロックがほぼ同量斑状に混合する。</p> <p>28 褐色土 いわゆるソフトロームに似たロームを主に、黒褐色土を含む。</p> <p>29 褐色土 ローム粒、大小のロームブロックを主に、黒褐色土を若干微量含む。</p> <p>30 黒褐色土 黒褐色土とロームの薄層がラミナをなす。</p> <p>31 黒褐色土 黒褐色土を主に、径50mm大のロームブロック少量、径5mm大のローム小ブロックを微量含む。</p> <p>32 褐色土 ローム粒、大小様々なロームブロックを主とし、ブロックの輪郭が明瞭に見える。</p> <p>33 黒褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒を含む。局所的に大小のロームブロックを含む。</p> <p>34 黒褐色土 35層のローム中に所々見られる黒褐色土の薄層あるいは大ブロック。</p> <p>35 褐色土 ローム粒、大小のロームブロックからなる層。ロームブロックの一部は、径20cm以上。</p> |
|--|---|

土坑覆土の上面でも密な分布範囲をとらえることができた。板石基部の外側の坑底には、16～20cm大の偏平な円礫が添えられ、補強がなされている。

石棺は、長大な板石を縦に用い倒石とし、小口を板石で塞ぎ、底面に板石を敷き並べて箱形の空間を造り出した埋葬施設である。南西側の小口は、棺床面の舗石もろともに失われている。内法は、倒石のみ残存する部分を含めた現存全長1.86m、棺床面の現存長1.65m、横幅は、小口近くの上端で46cm、棺床面で55cm、中央では上端で42cm、棺床面で52cm、南西側の棺床面では47cmである。北側を頭位方向と見れば、主軸方位は、N-35°Eである。

倒石は全体に大きく内傾しており、真上から棺床面の側面が見えない状態である。石棺の内壁をなす幅広の板石を立て並べ、横幅のより小さい板石を幅広の板石の接続部に外側からあて補強したようである。補強の板石の多くが幅広の板石から離れているのは、幅広の板石が内傾したためであろう。本来は、大小の板石が交互に組まれていたものと考えられる。幅広の板石は、幅48～92cm、厚さ3～5cmである。板石の上端は、現存の深さが40～50cmの高さで切りそろえられている。補強の板石は、幅13～23cm、厚さ1.5～3cm、横幅や厚さがかなり区々である。倒石のほとんどが緑泥片岩である。

断面図を作成した南西端では(図14：A-A'、図の斜線部分は、えぐれているため、修復時の埋め土を除くことができなかつた範囲)、板石の根が削き出しになっていた。板石が脱落する恐れがあったため、中央に柱状の土層観察面を設け、土層を観察したが、板石を挟み明らかにつながる土層があり、土坑底から板石の根のみ盛土中に埋め込まれているものと考えられた。断面では、右側の板石が11°前後、左が16°前後内傾している。右側の板石は、長さ97cm、幅37cm前後で、下半51cm、つまり全体の半分以上が坑底から盛土の中に埋め込まれている。左側の板石も同様である。板石と盛土間は、一部隙間がある他ほぼ密着しており、板石の厚さと大差のない細い溝が掘られ、板石が挿入されたのか、掘り方は見られない。

板石の現在の配列状態に加え、断面右側の板石の添え石が板石から離れ、その空隙に沿って、縦に分層線が走ることで、断面左側の側石上半外側の土層が乱れ、右側同様に7層とした褐色土が嵌入することなどから見て、側石は、本来垂直に近く立てられ、それが内傾したと見てよいであろう。側石が傾いたのは、石棺が開口して以降と見るのが自然である。

北東側の小口は、長さ70cm、厚さ12cm前後と側石より厚みのある緑泥片岩の板石を横たえ、側石に外側から当て、小口を塞いでいる。板石の上縁は、側石の板石が切断面そのままであるのに対し、著しく磨耗している。

棺床面は、板石を敷き並べ、ほぼ平坦に仕上げられている。板石は、部分的に重なり合い、隙間には小礫や片岩片が詰められているが、板石間の隙間はわずかであり、とくに側石と板石はかなり密接している。最も大きな板石を含む中央から南西端にかけて用いられた板石は、緑泥片岩、北東側小口周辺から南東側側石に沿う板石は、絹雲母片岩である。同じ岩石種の板石はそれぞれよく似ており、2種類の板石を適宜割りながら、棺床面の形に合わせ、割れ石を組合せ敷き詰めたのかも知れない。

側石以外に、北西側側石の下寄りの位置に大小の絹雲母片岩片が、それと対になるように南東側側石からやや離れた位置にU字形の大きな絹雲母片岩片が出土している。U字形の片岩片は、U字の内側が石皿のように強く研磨されているように見え、どちらの片岩片も被熱している可能性がある。

石棺内の覆土は、すべて近・現代と思われる土であり、ある時点まで棺床面まで露出していたことを物語る。覆土には、かなりの量の石棺材の片岩片や大小の礫が含まれる。

なお、北東側の小口に寄った位置で、北西側側石により添うようにして2点の鉄製品(図16：1・2、1は鉄剣、2は鉄剣あるいは鉄槍先)が出土している。2点とも切っ先を北東側の小口に向け、刃がやや斜めになった状態で出土している。また、北東側小口付近には、大小の礫がまとまって出土している。石棺内の覆土や出土状況から判断して、鉄製品も礫も棺床面が露出していた際に取りまとめられたものと思われ、鉄製品が埋納時の位置を保っている可能性は低いと考えられる。

(2) 遺物

周堀内出土遺物は極めて乏しく、図化できた資料は、E地点の周堀から出土した岩が1点(図17：1)、土師器片、須恵器片各1点(図17：2・3)のみである。植輪片は(図18)、周堀やG1地点の墳丘修復土から出土した資料で、本古墳に伴うものではない。他には、上記した石棺内から出土した2点の鉄製品(図16：1・2)がある。また、墳頂部の表土中から銅製の耳環(図19：1)が1点出土している。この耳環も墳丘修復土にかかわる可能性がある。

a. 鉄器

鉄剣 [1・2] (図16、写真19)

1は身部には錆がなく、鋒に向かって緩やかに先細りし、ふくらをもって鋒に至る。身部断面形は薄いレンズ状を呈する。関は鋭角にかえっている。茎は緩やかに湾曲しながら茎尻に向かって幅を減じている。茎尻は直で、茎断面は矩形を呈する。目釘穴の有無・位置は不明である。鞘材・柄材の遺存は認められない。全長35.0cm、刃部長27.0cm、関部幅3.0cmを測る。

2も身部には錆がなく、鋒に向かって緩やかに先細りし、中位でやや角度を変え、明瞭なふくらをもたず鋒へ移行している。身部断面形は薄いレンズ状を呈する。関はやや不明瞭ながら直角関と観察される。茎は茎尻に向かって幅を減じている。茎尻は欠損があり形状は明瞭ではない。茎断面は矩形を呈する。目釘穴の有無・位置は不明である。鞘材・柄材の遺存は認められない。全長20.5cm、刃部長16.2cm、関部幅2.1cmを測る。

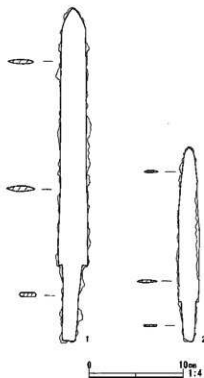


図16 万年寺八幡山古墳出土鉄器実測図

万年寺八幡山古墳出土鉄器観察表

No.	種類	名称	法	茎 (cm・g)
1	鉄器	鉄剣	全長:35.0 身部長:27.0 関部幅:3.0 茎長:8.0 重さ:158.5	
2	鉄器	鉄剣	全長:20.5 身部長:16.2 関部幅:2.1 茎長:4.3 重さ:29.5	

b. 土器

土師器 [1・2] (図17、写真19)

須恵器 [3] (図17、写真19)

1は、B地点の周堀覆土から出土した埴である。口縁部の内外面には、ヨコナデ後、暗文様のミガキが加えられている。外面端部直下及び口縁部中位には、強いヨコナデによるものか沈線状の調整痕がめぐる。底部のケズリは浅く、部分的にナデ、ミガキに近い。胎土は精良であるが、やや軟質である。

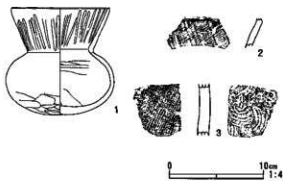


図17 万年寺八幡山古墳出土土器実測図

万年寺八幡山古墳出土土器観察表

No.	器種	量量(cm)	形態・成形手法の特徴	製法手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 10.2 底径 — 器高 11.3	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き、頸部はわずかに内彎する。底部は丸底で小さな凹みを持つ。	外面—口縁部ヨコナデ後、縦文ミガキ。体部上位ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ後、縦文ミガキ。体部—底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色	2/3。
2	土師器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	上位が内傾もしくは有段となる口縁部。	外面—口縁部木口状工具ナデ。内面—口縁部木口状工具ナデ・ヘラナデ。	微砂粒・赤褐色粒 内外一明黄褐色	口縁部下位片。
3	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	丸みを持つ胴部片。	外面—平行タタキ。内面—同心円状当具痕。	石英・黒色粒 内外一灰色	胴部片。

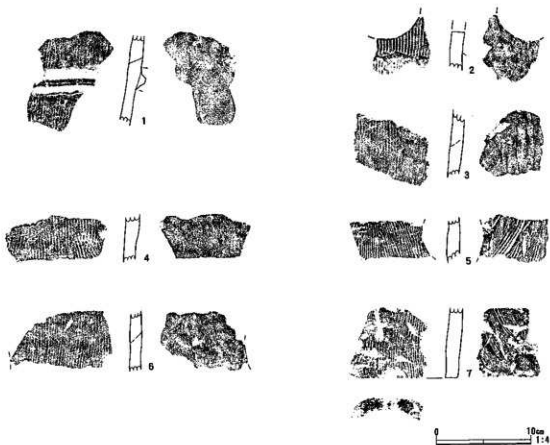


図18 万年寺八幡山古墳出土円筒埴輪実測図

c. 埴輪

円筒埴輪 [1~7] (図18、写真19)

すべて破片資料で、全体の段構成、各段の幅も不明である。

外面調整は一次調整に伴う縦位のハケのみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位、および斜位のハケもしくはナデによる。1は突帯部分の破片で、突帯断面形は明瞭な台形を呈する。2・5・6には透孔が認められる。このうち2はやや大形の円形透孔である。線刻の存在する個体は確認できない。なお、7は基部の破片であるが、丁寧な成形で、内外面ともに底部調整は施されていない。朝顔形埴輪の可能性が考えられる。

胎土には片岩・チャートを含む。海綿骨針の混入する個体は認められない。焼成は総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。色調はにぶい橙色、橙色ないし明赤褐色を呈する。

d. 耳環 [1] (図19、写真19)

1は、銅芯金張りの耳環である。外径1.8×1.7cm、内径1.0×0.9cm、厚さ0.6cmを測り、重さは5.1gである。



図19 万年寺八幡山古墳出土耳環実測図

(3) 小 結

時期限定できる資料に乏しいが、B地点周堀覆土出土の埴 (図17: 1) は、5世紀後半代の所産と見てよく、よって本墳の構築時期は、それ以前と考えられる。

2 万年寺つつじ山古墳

[A地点]

調査期間 平成6年4月25日～同年6月8日
調査面積 300㎡
調査原因 土地区画整理に伴う市道建設
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司
備考 墳丘にて斧形石製模造品表採

[B地点]

調査期間 平成9年11月26日～同年12月19日
調査面積 15㎡
調査原因 土地区画整理に伴う市道建設
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司
備考 同一調査区内で万年寺八幡山古墳の墳丘・周堀を検出（万年寺八幡山古墳D地点）

[C地点]

調査期間 平成9年11月26日～同年12月19日
調査面積 20㎡
調査原因 土地区画整理に伴う市道建設
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[D地点]

調査期間 平成9年11月26日～同年12月19日
調査面積 35㎡
調査原因 集会所付属施設の建設
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[E地点]

調査期間 平成11年9月17日～同年10月15日
調査面積 318㎡
調査原因 土地区画整理に伴う宅地造成
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

[F地点]

調査期間 平成13年1月11日～同年2月8日
調査面積 194㎡
調査原因 遺跡の保存整備

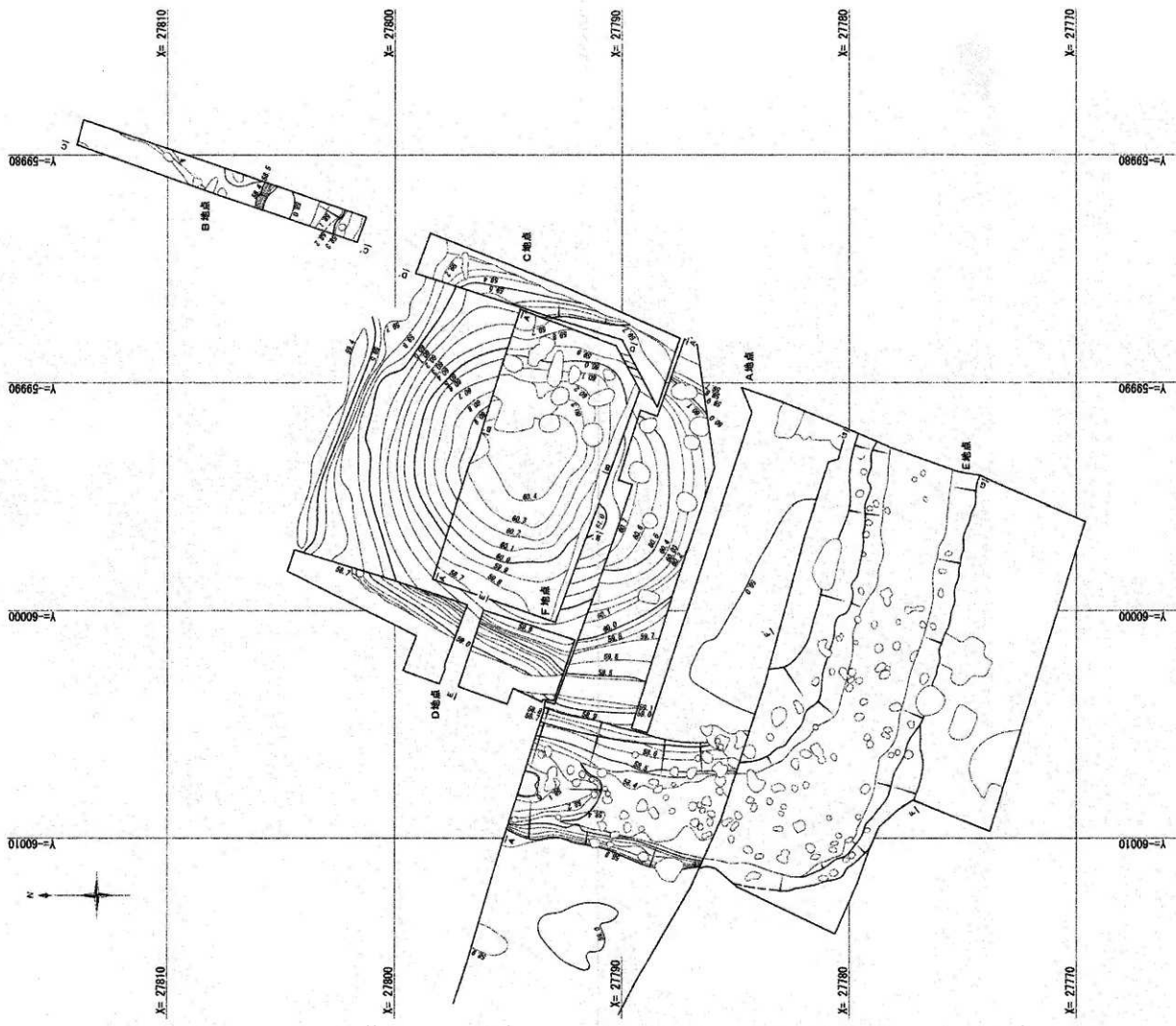


図20 万年寺つじ山古墳
0 4m 1:160

調査担当 本市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕・太田博之・松本 完
備考 確認調査

(1) 遺構

万年寺つつじ山古墳は、本市大字小島字林98-1他にあり、墳丘の中心をX=27,792、Y=-59,992付近におく。旭・小島古墳群内でわずかに残る墳丘の残存する古墳のひとつである。周囲には、やはり墳丘の残る万年寺八幡山古墳をはじめとして、南東側に近接する万年寺高山古墳やその他大小の古墳、円墳が周堀のみ遺存する状態で群在し、旭・小島古墳群の西群を構成することが確認されている。

A地点調査以前には、ゆるやかな傾斜をなす墳丘がかなりの範囲で確認できる状態であったようであるが、F地点確認調査の段階には、2辺を擁壁で囲まれた角地に低平な高まりとして残された状態であり、すでに古墳の跡をほとんど留めないあり様であった。北側は畑地であるが、残存する墳丘よりかなり低くなっており、墳丘は、本来墳頂であった部分から西、北側にかけてのわずかな部分を残し、四周がすでに大きく失われている。

なお、残存する墳丘は、近世以降墓所として利用されており、墳丘の東側、南側斜面を中心に多数の土坑墓が検出されている。

a. 墳丘

現在墳丘の高まりが認められる範囲に限れば、おおよそ160㎡前後、道路面から現在の墳頂までの高さは150cm前後である。旧表土の黒褐色土より上の墳丘の実際の残存高は128cmである。部分的ではあるが3辺で検出した周堀の内縁から推定するなら、テラスを含む墳丘部分は、一辺25m前後のほぼ正方形に近い形態に復元できる。同様にして推定される墳丘中心点は、F地点の中央からやや南、東に寄った位置になるようである。

本来墳裾から周堀上端にかけて、テラスがあった可能性があるが(図20、及び図21:A-A')、周堀上部まで削平されている場合もあり、テラスの範囲が不明な地点もある。

F地点では、サブトレンチを入れた以外、直截墳丘の断面観察を行っていないが、F地点の範囲内は、隣のA地点以上に深くまで墳丘が壊されている可能性があるようであった。

墳丘に関しては、A～Eの各地点で墳丘土層断面の観察を行なった。墳丘を大きく切断したA地点での観察を中心に所見を記すことにしたい。

図21:A-A'は、A地点の調査区北壁である。現存する墳丘のほぼ南縁、推定中心点にかなり近いところを、東西方向に横切る位置にあたる。

全体に墳丘盛土は、ロームや暗褐色土の多寡により、以下の6つくらいのまとまりに分けることができる。

- a : 21～27層。他の盛土に比べ、雑多な土からなることが特徴になる。前の段階をもって一旦形成された平坦面に、暗灰褐色土(土色線の「暗褐色」に含まれる色調か)の27層を平らに敷きつめ、さらにロームを多く含む23層を盛り上げたとも見えるが、土層の乱れがやや目立つ。21・22層に関しては、土坑のような掘り込みの覆土に見えなくもないが、後述するように一応盛土の一部と考えた。

- b : 28~31層。ロームを主とするまともり。ブロックの大小などにより、より細かく分層できるのかもしれないが、一貫してロームが卓越した土で盛土がなされていることは間違いない。
- c : 32~53層。ロームなどやや明るい色調の土と旧表土の黒灰褐色土（土色根の「黒褐色」）の混合土からなる暗褐色土を主とするまともり。各層は、水平堆積というより、この場合東側から西側に向かって順次斜めに重なり合うように積み上げられ盛土され、最後にこのまともりにあっては異質なロームを主とする35層が盛られ、上面がほぼ平坦になるように仕上げられている。ただし、B-B'断面では、この平坦面は確認できず、周堀側が盛り上がるようになっている。
- d : 54~58層。cに比べ、ローム粒・ロームブロックが少なく、黒褐色土が多い。輪郭のはっきりしたローム小ブロックが点在する点でfとも異なる。
- e : 59~67層。dと同じ暗褐色土を主とする単位であるが、cとの境は、ローム粒・ロームブロックが所々薄層をなし、一線を描く。cよりローム、とくにロームブロックが少なく、dよりそれが多い。各層は、おおむね水平に積み上げられているようである。
- f : 68~71層。旧表土の黒灰褐色土（同上）を主とする盛土。ローム粒、ロームブロックを含むが、全体にc~eに比べて、その量は少ない。断面では、旧表土の黒褐色土にロームを少々混ぜて盛り上げたように見える。

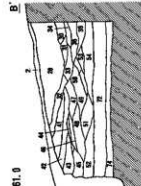
以上、大きく分けた6つの土層のまともりは、単に基材となる土の特徴によって括ることのできる土層のまともりというだけでなく、墳丘構築に際して、類似した特徴をもつ土が、一定のまともりごとに、順番に盛られていった、そうした作業のひとつまともり、一工程を表すと見てよいであろう。したがって、それぞれの土層のまともりは、主に旧表土の黒褐色土とロームの配合に特徴があり、周堀の掘削や整地作業などにより得られたロームや黒褐色土が準備され、それらが適度に配合され、それぞれの工程ごとに案分されたと見ることができる。ロームの含有量は、不均一なbを除き、おおむねf→e→d→c→aの順に多くなり、盛土の工程順と略一致しており、ロームと黒褐色土がある程度、計画的に配合されたことを物語っている。

墳丘構築の工程は、まず旧表土の黒褐色土層の上面を均し、平らに整地した後に、f→aの順に土盛りした一連の節目をもった工程として復元できる。c・d・e・fの上面はほぼ平坦な面を形造っており、さらに上部の盛土工程に先立つ休止点を示し、テラスなどと関連するものとも考えられるが、対応する明確なテラスは確認できていない。また、上述したように、直交するB-B'断面では、この平坦面は不明瞭である。

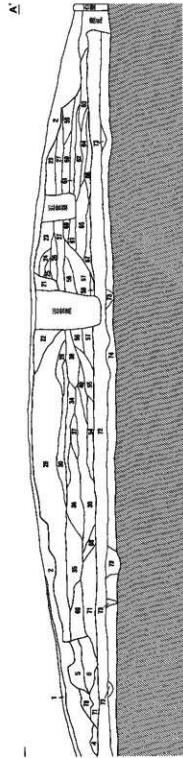
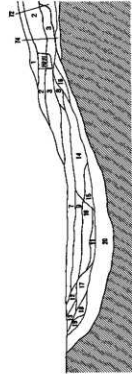
本墳の墳丘構築法の著しい特徴は、墳丘の横断面形に応じた水平に盛った土を、順次重ねて墳丘を立ち上げてゆく方法とは著しく異なることである。本墳の場合、まず片側に盛土fがなされ、つづいてその反対側に築かれた盛土eから横方向へと盛土を重ねながら墳丘が形造られたのか、あるいはe・fがほぼ同時に盛られたとすれば、墳丘外形に則して環状に盛土をし、その内を外側から盛土で満たしてゆくような工法がとられた可能性が考えられる。1段目c~fができ上がると、そこで上面がおおよそ平坦に均され、引きつづきa・bの工程によって高さを増していった模様である。

また、盛土が全体的に強く突き固められておらず、しまりが弱いことも特徴のひとつである。

なお、図21：A-A'では、近世墓以外2箇所、墳丘表面から掘り込まれた落ち込みのように見える部分が認められる。ひとつは、墳丘の西端近くの断面形がフラスコ状の落ち込みである。覆土は5・



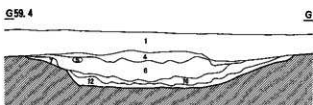
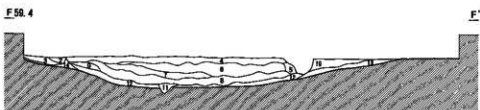
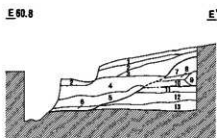
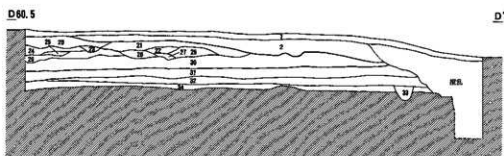
A61.0



C59.7



図21 万年寺つつじ山古墳A・B地点土層断面図



万年寺つづじ山古墳A地点土層説明【A-A'・B-B'】

- 1 暗灰褐色土 現在の表土。As-Aを含みザラつく。
- 2 暗褐色土～灰褐色土 ローム粒を多く含むよかよかしてしまりのない表土層。
- 3 灰褐色土 As-Aを含みザラつく。表土層の一種。
- 4 黒灰褐色土 黒色土を主に、ローム粒を含む。
- 5 黄褐色土 ロームを主に、黒色土の小ブロックを含む。
- 6 黄褐色土 ロームを主に、黒色土のやや大きめの小ブロックを若干含む。5層より明るい。
- 7 黒灰褐色土 As-B?を多く含むザラつく。
- 8 暗灰褐色土 ローム粒を若干含む。7層より明るく、1層より暗い。黒色土ブロックを含む。
- 9 黒褐色土 暗褐色土ブロックを斑状に含む。
- 10 黒褐色土 暗褐色土ブロックを斑状に含む。ローム粒子を含む。9層より明るい。7層より暗い。

- 11 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを斑状に含む。10層より明るく、9層より暗い。黒色土ベース。
- 12 暗灰褐色土 ローム粒を含む。10層より明るい。
- 13 暗灰褐色土 ローム粒を斑状に含む。ローム小ブロックを含む。12層より明るい。
- 14 暗褐色土 ローム粒を含み、暗褐色土ブロックを斑状に含む。
- 15 暗灰褐色土 黒色土ベースに暗褐色土ブロックを斑状に含む。10層より明るく、14層より暗い。
- 16 暗灰褐色土 ローム粒を含む。8層より明るい。
- 17 暗灰褐色土 ローム粒を斑状に含む。10層より明るく、12層より暗い。
- 18 暗灰褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを多く含む。
- 19 暗灰褐色土 ローム粒を多く含む。13層より明るい。

図22 万年寺つづじ山古墳C～E地点土層断面図

- 20 暗黄褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを露降り状に含む。11・19層より明るい。
- 21 暗褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを露降り状に含む。
- 22 暗黄褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。他層程はしまらない。21層より暗い。
- 23 黄褐色土 ロームを主とし、28層に類似する。23層より明るい。
- 24 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含み、黒色土ブロックを含む。
- 25 黄褐色土 ロームを主に、黒色土ブロックを含む。24層より明るく、23層よりやや暗い。
- 26 暗褐色土 黒色土を主に、ローム粒・ローム小ブロックを含む。22層より暗い。
- 27 暗灰褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。他層程はしまらない。22層にやや似るが、黒色土が多い。
- 28 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを主に、黒褐色土を微量に含む。
- 29 暗褐色土 黒色土を主に、ローム粒・大小のロームブロックを多く含む。
- 30 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを主に、黒褐色土を微量に含む。29層より明るい。
- 31 暗黄褐色土 ロームを主とし、大小の黒色土ブロックを含む。30層より暗い。
- 32 暗褐色土 ローム粒を多く含み、大小のロームブロックを含む。31層より暗い。
- 33 黄褐色土 ロームを主とし、やや臭味がかかる。31層より明るく、28層より暗い。
- 34 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。
- 35 黄褐色土 ロームブロックを主に、黒色土を含む。28層よりやや暗い。28層との間に黒色土の関層がわずかに認められる。
- 36 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含み、ローム大ブロックを含む。34層より明るい。
- 37 暗褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを露降り状に含む。34層より暗い。
- 38 暗褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを露降り状に含む。29層より暗い。
- 39 暗褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを露降り状に含む。36層より明るく、33層より暗い。
- 40 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。38層より暗い。
- 41 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。
- 42 暗褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを露降り状に含む。32層より暗い。
- 43 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。40層より明るく、43層より暗い。
- 44 暗灰褐色土 ローム粒を若干含む。
- 45 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。43層より明るく、42層より暗い。
- 46 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。ローム小ブロックを含む。41層より暗い。
- 47 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。41層より暗い。
- 48 暗褐色土 ローム粒を含み、ローム小ブロックを若干含む。45・46層より暗い。
- 49 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。47層より暗い。
- 50 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。48層より明るく、36層より暗い。
- 51 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。48層より明るく、47層より暗い。
- 52 暗灰褐色土 ベースの土はいわゆる旧表土の72層に類似するが、色調は明るい。ローム粒を若干含む。44層より暗い。
- 53 暗褐色土 ローム粒を多く含む。37・49層より暗い。
- 54 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。51層より明るく、48・50・52層より暗い。
- 55 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含む。38・40層より暗い。
- 56 暗褐色土 ローム粒を露降り状に、ローム小ブロックを若干含む。
- 57 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。55層より明るく、38層より暗い。
- 58 暗灰褐色土 黒色土を主に、ロームブロックを含む。
- 59 暗褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを露降り状に含む。
- 60 暗褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを露降り状に含む。59層より明るく、23層より暗い。
- 61 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。59・60層より暗い。
- 62 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。61層よりやや明るい。
- 63 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含み、ローム小ブロックを若干含む。
- 64 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含み、ローム小ブロックを含む。62層より暗い。
- 65 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含み、ローム小ブロックを含む。57層より明るく、61・64層より暗い。
- 66 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを露降り状に含む。63・64層より明るく、62層より暗い。
- 67 暗褐色土 ローム粒を露降り状に含み、黒色土ブロックを若干含む。58・65層より明るく、66層より暗い。
- 68 暗灰褐色土 ローム粒を露降り状に含み、ローム小ブロックを含む。39層より暗い。
- 69 黒灰褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを含む。68層より暗い。
- 70 黒灰褐色土 黒色土を主に、ローム中ブロックを露降り状に含む。4層より明るい。
- 71 黒灰褐色土 ローム粒を若干含む。68～70層より暗い。

- 72 黒灰褐色土 いわゆる旧表土。白色粒を含む。粒子粗くザラザラしている。下部は74層に近く、黄色みを帯びる。51・53層とは截然と分けられる。43・58・63・71層より暗い。
- 73 暗褐色土 黒色土を主に、ローム粒を含む。72層と74層の中間的な色調。74層面からの落ち込みの覆土。
- 74 暗黄褐色土 ハードロームと72層の薄移層。

万年寺つづじ山古墳B地点[C-C']・C地点[D-D']土層説明

- 1 灰褐色土 As-Aを含む。現表土。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。As-Aを含み、ザラつく。1層より明るい。
- 3 灰褐色土 As-Aを多く含むザラつく。1層より明るい。
- 4 暗灰褐色土 灰褐色土を主に、黒色土ブロックを含む。3層より暗い。
- 5 暗灰褐色土 As-Bを少量に含むザラつく。3層より暗い。
- 6 黒灰褐色土 ローム粒を含む。他層より、やや粘性を帯びる。(ただし粘土層という程ではない)。5層より暗い。
- 7 暗灰色土 ローム粒を含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを多く含む。11層より暗い。
- 9 灰褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを錯降り状に含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む。8層より明るい。
- 11 黄褐色土 ローム層(摺り過ぎ)。
- 12 暗灰色土 黒色土を主に、暗褐色土混じる。
- 13 暗褐色土 ローム粒を錯降り状に含み、ローム小ブロックを含む。12層より明るい。
- 14 暗灰褐色土 ローム粒を若干含む。12層より明るい。
- 15 黒灰褐色土 ローム粒を錯降り状に含む。12層より暗い。
- 16 暗褐色土 ローム粒を錯降り状に含み、ローム小ブロックを含む。15層より明るく、7層より暗い。
- 17 暗黄褐色土 ローム粒・大小のロームブロックを錯降り状に含む。16層より明るい。
- 18 暗黄褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを多く含む。17層より明るい。
- 19 暗褐色土 ローム粒を錯降り状に含み、ロームブロックを含む。14層より明るく、18層より暗い。
- 20 暗褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロック、黒色土小型ブロックを錯降り状に含む。底土。2層より明るい。
- 21 暗灰色土 ローム土を主に、大小のローム小ブロックを錯降り状に含む。2層より明るい。
- 22 暗灰色土 ローム土を主に、大小のローム小ブロックを錯降り状に含む。
- 23 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。20層より明るい。

- 24 暗灰褐色土 ローム粒・大黒色土ブロックを錯降り状に含む。
- 25 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを錯降り状に含む。24層より明るく、20層より暗い。
- 26 暗灰色土 ローム土を主に、大小のローム小ブロックを錯降り状に含む。全体に色味がかかる。22層より暗い。
- 27 暗褐色土 ローム土を主に、黒色土ブロックを含む。21層より明るい。
- 28 暗褐色土 ローム土を主に、小型ロームブロックを錯降り状に含む。21・22層より暗い。
- 29 暗褐色土 黒色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを錯降り状に含む。24層より明るく、28層より暗い。
- 30 黒灰褐色土 黒色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを含む。24・26層より暗い。
- 31 黒灰褐色土 ローム粒を若干含む。旧表土層。30層より明るい。
- 32 暗灰褐色土 ローム粒を多く含む。31層より明るい。
- 33 暗黄褐色土 ローム土を主に、黒色土を含む。
- 34 暗黄褐色土 32層とハードローム層との薄移層。32・33層より明るく、ハードロームより暗い。
- 35 暗褐色土 ロームを主に、黒色土ブロックを含む。4層より明るい。風化ローム層。

万年寺つづじ山古墳D地点土層説明[E-E']

- 1 暗灰褐色土 As-Aを含む現表土層。
- 2 暗褐色土 As-Aを含み、ローム粒・ローム小ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 As-Aを含み、ローム粒・ローム小ブロック、黒色土小ブロックを錯降り状に含む。2層より明るい。
- 4 暗褐色土 As-Aを少量に含む、ザラつく。ローム粒を含む。2層より明るく、3層より暗い。
- 5 灰褐色土 ローム粒を含み、緩密で、均一な土質。4層より暗い。
- 6 暗褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを錯降り状に含む。5層より明るい。
- 7 暗褐色土 底土層。ローム粒・ローム小ブロックを錯降り状に含む。やや硬くしめる。
- 8 暗褐色土 底土層。ローム粒・大小のローム小ブロックを錯降り状に含む。7層より暗い。
- 9 暗褐色土 横っこによる硬層。
- 10 黒灰褐色土 ローム粒を含み、硬くしめる。8層より暗い。
- 11 黒褐色土 ローム粒を含む。10層より暗い。
- 12 暗灰褐色土 ローム粒を含む。11層より明るく、5層より暗い。
- 13 暗黄褐色土 ローム粒・大小のローム小ブロックを錯降り状に含む。12層より明るい。

万年寺つつじ山古墳E地点土層説明【F・F'・G・G'】

1 灰色砂礫	遊路下に敷かれた砂利層。		
2 暗褐色土	ローム粒・ロームブロックを含む。		ロックを1つ含み、ローム小ブロックを少数含む。
3 暗褐色土	2層に近いが、ローム粒の多い部分と暗褐色土が不規則に混じり合う。	9 暗褐色土	ロームと黒褐色土上の比較的均一な混合土。
4 暗褐色土	暗褐色土と黒褐色土の混合土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを含む。A地点「7層」に類似するか。	10 暗褐色土	暗褐色土あるいは黒褐色土を主に、ロームが斑状に面する。下部にローム目立つ。
5 暗褐色土	4層に近いが、ロームが多い。	11 暗褐色土	8層に近いが、ロームが多い。12層上面から掘り込まれたピットにも見えるが、8層が乱れているだけかもしれない。
6 黒褐色土	ローム粒を含む。ほとんど黒色に近い黒褐色土からなり、ローム粒以外ほぼ純一な旧表土の流入土からなる層に見える。A地点「9層」「10層」に類似するか。	12 暗褐色土	ロームと黒褐色土の斑状の混合土。
7 暗褐色土	4層に近いが、黒褐色土が多い。	13 褐色土	ロームを主に、暗褐色土あるいは黒褐色土を斑状に含む。ロームの多くは、ブロックをなす。
8 黒褐色土	6層に近いが、ローム粒が多い。ローム大ブ	14 褐色土	ロームを主に、暗褐色土あるいは黒褐色土を斑状に含む。

6層とした黄褐色土である。6層が28層の墳丘盛土に類似しており、墳丘盛土がそのまま落ち込んだかにも見えるが、5層は2層の表土に近く、新しく墳丘に掘り込まれた土坑などの可能性が高いものと考えられる。

今ひとつは、墳丘中央東寄りの落ち込みとも見える部分である。この部分で21・22層が土坑状に落ち込むかに見えるが、深い方の近世墓に大きく切られており、土坑か否かの判定は困難である。また、さらに奥の近世墓の壁面でも、この部分で土層が大きく乱れていることは判るものの、必ずしも土坑とは言い切れない堆積状態が見られたようである。墳丘中心点に近い位置であり、問題が残るが、土坑などの掘り込みとする確証は得られていないとせざるを得ない。

b. 周堀

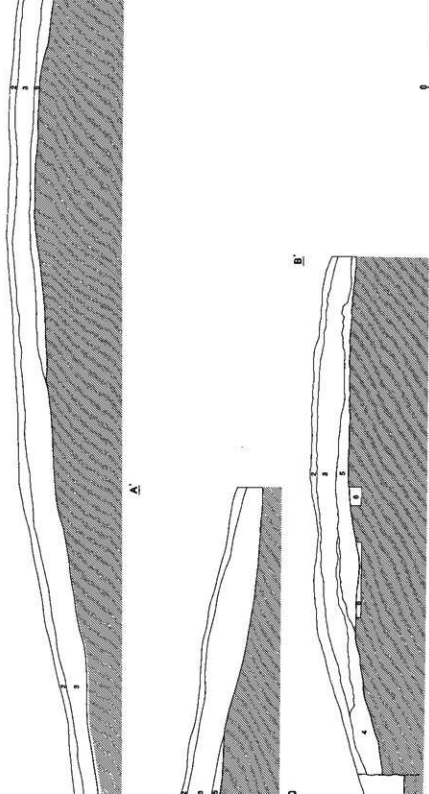
周堀が検出できたのは、A・B・E地点である。周堀の断面形は、A・E地点では外壁がやや急に立ち上がるU字形、ないしは船底形に近く、B地点では、外壁がより急峻である。周堀幅は、A地点で6.3m、B地点で4.2m、E地点で5.6mである。周堀最深部の深さは、A地点で100cm、B地点で56cm、E地点で64cm、79cmである。周堀幅の広狭、深浅がかなり目立つが、主に遺存状態の違いによると見てよい。周堀外縁の両端がほぼ判る南北方向での一辺の長さは、33.5mである。つまり、周堀を含む一辺の全長が33.5m前後の方墳ということになる。

周堀覆土は、基本的に堀壁、周堀底に沿って黒褐色土混じりのロームが堆積し、以降中央が主に黒褐色土からなる覆土によって満たされる、かなり画一的な堆積状態を示しており、周堀毎の違いはいたって少ない。因みに、E地点の土層注記は、土層断面の実測図・写真をもとに、隣接するD地点との対比にもとづき、起こしたものである。

なお、近接する万年寺八幡山古墳の周堀とともに、本古墳の周堀を調査したB地点では、八幡山古墳の周堀覆土中にもみA_s-Bが層をなし堆積しており、本古墳の周堀覆土にはそれが見られないとの所見を得ている。

(2) 遺物

周堀内出土遺物は極めて乏しいが、E地点の東側壁寄りの周堀底付近で埴の破片(図29:1)を1点検出した。



つづじ山古墳F地点土層説明【A-A'・B-B'】

埋設層に伴う土層。

褐色土、灰質褐色土、雑草の根が繁殖する腐植土、純赤土層。

包土 赤土の一種、墓子の細いサカサカしたローム（しまりがほとんどなく、山砂層、少なくとも地山のロームがそのままだけ埋積したものではない）を主に

径1～5cm次の小ロームプロックを含む。黒褐色土を露出含む。ロームプロックは、所々不規則なまとまりをなす。粘性・しまりほとんどない。

4 褐色土 3層に近いが、ロームプロックが小さい。ロームプロックは、径2～5cmが主。

5 褐色土 4層に近いが、ロームプロックが少なく、しまりが弱く、しまりが弱く、しまりが弱く。石灰質土の包層。

6 褐色土 灰褐色土、ローム包、径1～5cm次の大小のロームプロックを主に、層土を露出含む。4・5層に対し、ロームプロックが多く、しまっている。

図23 万年寺つづじ山古墳F地点土層断面図(1)

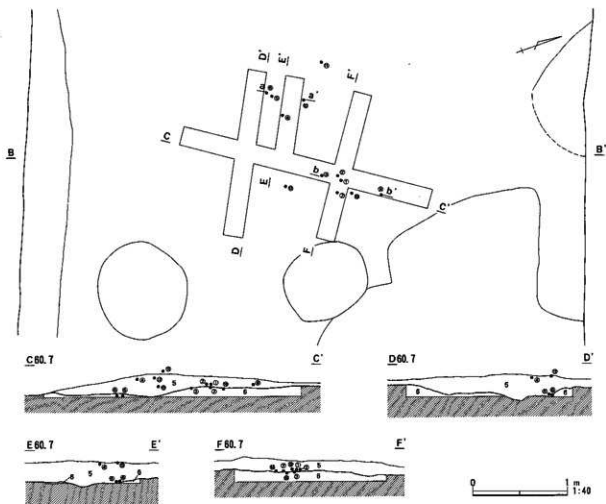


図24 万年寺つつじ山古墳F地点平面図および土層断面図(2)

F地点の調査では、刀子形や短冊形斧形、有肩斧形などの石製模造品11点、管玉1点が出土している。また表土層下の土を悉皆採取し行なった篩かけによって玉1点を検出した。また、A地点の調査時に現存する墳頂部のほぼ中央で、袋状の着柄部をもつ有肩斧形の石製模造品1点(図28:8)を表面採集している。

F地点の石製模造品は、純表土層下に堆積していたロームブロックをやや含むロームを主とする黄褐色土層(図23:5層)から出土した。石製模造品の集中する範囲に関しては、面的な確認作業を繰り返し行なうとともに、サブトレンチを入れ、断面観察を行なったが、結局土坑などの掘り込みを確認することはできなかった。

石製模造品を包含した黄褐色土層はしまりがほとんどないため、墳丘盛土の一部とは見なしがたいが、5層とその直下の6層(5層よりロームブロックはるかに多く、しまりのある明らかな墳丘盛土層)が同じロームを主とする土であることから、5層が墳丘盛土に由来する土であることは間違いない。またF地点では、墳丘を深く掘り下げ断面観察する作業を行っていないが、隣接するA地点では、混入土の少ないロームがかなりの厚さで墳丘盛土として用いられており、石製模造品を包含する5層は、それらのロームを主とした盛土が、腐蝕、風化などの作用により軟化した部分であると考えられることができる。

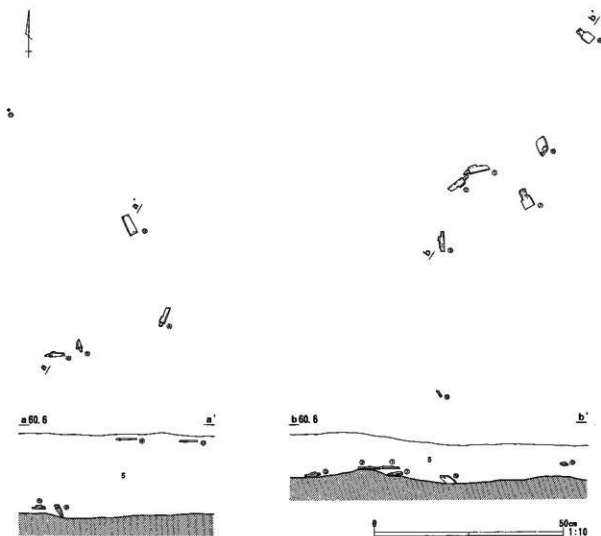


図25 万年寺つつじ山古墳F地点石製模造品分布図

石製模造品は、墳丘の推定中心点からわずかに北西寄りの位置で、やや分散して出土した。その分布は北東—南西に細長く、同方向での両端にあたる有肩斧形（図28：9、以下番号のみ示す。図25の分布図と図26～28の実測図の遺物番号は一致する）、刀子形（6）では、約168cm離れている。

全体にかなり分散しているが、大きく別けて2群のまとまりをもつかに見える。ひとつは、北東側の一群（1～3、7・9・10・13）、今ひとつは南西側の一群（4～6・11・12）である。北東側の一群は、他とやや離れているため仮に加えた管玉（13）を除けば、比較的良好にまとまっており、とくに刀子形（1～3）、有肩斧形（7）、短冊形斧形（10）の5点はまとまっているとともに、高低差も少ないように見受けられる（図25）。南西側の一群は、取り上げてしまい測点記録しかできなかった短冊形斧形（11）以外は、よくまとまるかに見えるが、刀子形（4）、直刃鎌形（12）は、墳丘面近くで出土した刀子形（5・6）より20cm前後高く、表土に近い位置で出土している。

全体として、よくまとまって出土しているものは、墳丘面に近い高さで出土する傾向があるように見える。また、刀子形がややまとまり、有肩斧形（7・9）は北東側の一群に、直刃鎌形（12）は南西側の一群にのみ含まれるなど、ある種の傾向があるのかもしれないが、数が少ないこともあり推定

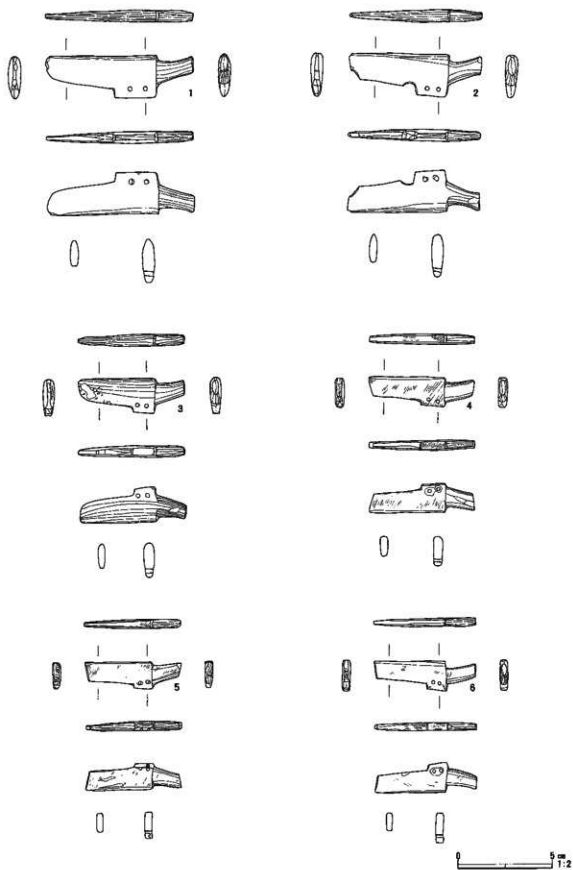


図26 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品実測図(1)

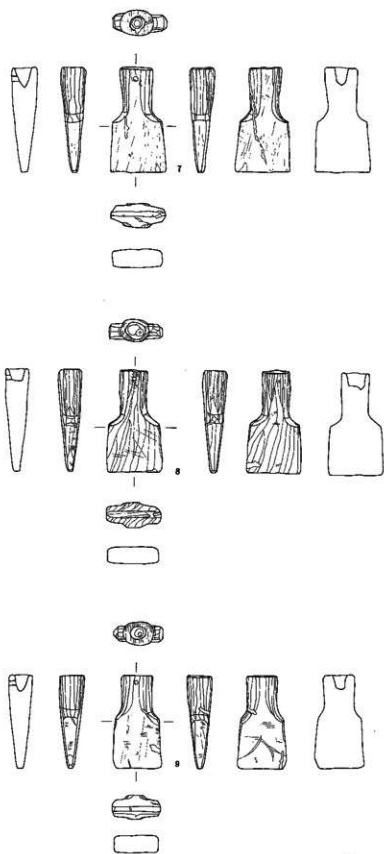


図27 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品実測図(2)

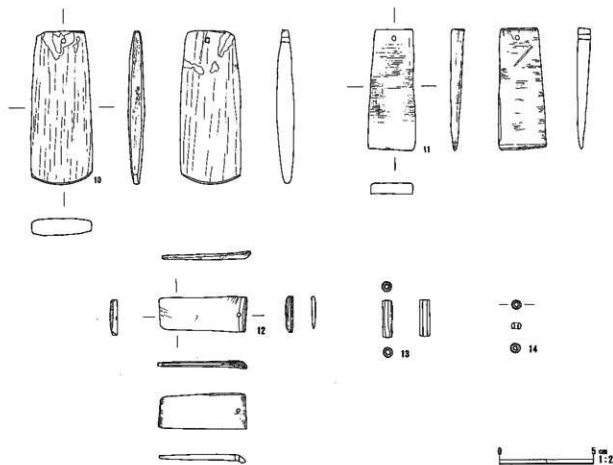


図28 万年寺つつじ山古墳出土石製模造品実測図(3)

の域を出ない。

原位置を問題にすることが困難な出土状況であったとは言え、石製模造品が全体として北東—南西に細長い分布を示したことは、本古墳の墳丘中軸線の一方がほぼ北東—南西向きであることや周辺古墳で確認できた埋葬施設の主軸がいずれも北東—南西であることなどと全く無関係であるとは思えない。

以上より、F地点の調査で検出した石製模造品は、墳丘盛土を被覆する、しかも盛土に由来する層中から出土したこと、したがって本墳に伴う遺物であることまでは結論づけられたと考える。この場合、石製模造品が盛土の中に埋め込まれていたというような想定は一応棄却できるとすれば、墳丘に掘り込まれた土坑などの底面付近にあった遺物が、削平や腐食、風化などにより土坑上部のほとんどがその覆土とともに失われた後に、風化し軟化した土中に散乱したような、そうした過程を想定するのが最も無理が少ないように思われる。

a. 石製模造品 (図26～28、写真20～22)

石製模造品として刀子6点、有肩斧3点、短冊形斧2点、鎌1点、他に管玉1点、白玉1点の計14点が出土した。石製模造品の古墳への大量副葬が行われる前の時期としては一般的な器種構成であると言える。それぞれは丁寧な作りであり、粗雑な印象を受ける個体は無い。

万年寺つつじ山古墳出土石製模造品観察表

No	種類	器種	法	量 (cm・g)	備考
1	石製模造品	刀子	全長：7.8 把長：1.95、幅：0.8、厚：0.6 鞘幅：2.2、厚：0.6 鞘方形突出部タテ：0.5、ヨコ：2.2、厚：0.3 孔径：0.25×0.2 重さ：13.87 色調：緑黒色 石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。鞘方形突出部に2孔。	
2	石製模造品	刀子	全長：7.0 把長：1.7、幅：0.9、厚：0.6 鞘幅：2.3、厚：0.6 鞘方形突出部タテ：0.6、ヨコ：1.5、厚：0.2 孔径：0.2×0.2 重さ：12.14 色調：緑黒色石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。鞘方形突出部に挟り。2孔。	
3	石製模造品	刀子	全長：5.6 把長：1.6、幅：0.8、厚：0.5 鞘幅：1.9、厚：0.6 鞘方形突出部タテ：0.4、ヨコ：1.1、厚：0.4 孔径：0.2×0.2 重さ：7.98 色調：暗青灰色 石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。鞘方形突出部に2孔。	
4	石製模造品	刀子	全長：5.6 把長：1.6、幅：0.9、厚：0.5 鞘幅：1.55、厚：0.6 鞘方形突出部タテ：0.3、ヨコ：1.2、厚：0.4 孔径：0.2×0.2 重さ：6.32 色調：暗緑灰色 石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。鞘方形突出部に2孔。	
5	石製模造品	刀子	全長：5.4 把長：1.6、幅：0.7、厚：0.4 鞘幅：1.6、厚：0.4 鞘方形突出部タテ：0.4、ヨコ：1.0、厚：0.4 孔径：0.2×0.2 重さ：4.67 色調：暗青灰色 石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。鞘方形突出部に2孔。	
6	石製模造品	刀子	全長：5.1 把長：1.55、幅：0.7、厚：0.4 鞘幅：1.4、厚：0.4 鞘方形突出部タテ：0.2、ヨコ：1.0、厚：0.25 孔径：0.2×0.2 重さ：4.81 色調：暗青灰色 石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。鞘方形突出部に2孔。	
7	石製模造品	有肩斧	全長：5.6 刃部幅：2.9 肩部幅：2.55 最大厚：1.0 袋部長：2.3 袋部上面外径：1.3×1.7、内径：0.7×0.75、内面深さ：1.0 孔径：0.3×0.25 重さ：22.42 色調：緑灰色 石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。表面面丁寧な仕上げ。	
8	石製模造品	有肩斧	全長：5.4 刃部幅：2.8 肩部幅：2.6 最大厚：0.9 袋部長：2.3 袋部上面外径：1.15×1.45、内径：0.9×1.0、内面深さ：0.8 孔径：0.2×0.25 重さ：21.09 色調：緑黒色 石材：蛇紋岩	前面にノミ状工具痕。	
9	石製模造品	有肩斧	全長：4.9 刃部幅：2.3 肩部幅：2.3 最大厚：0.9 袋部長：1.8 袋部上面外径：1.3×1.55、内径：0.7×0.8、内面深さ：0.75 孔径：0.2×0.25 重さ：19.91 色調：緑灰色 石材：蛇紋岩	ノミ状工具痕。刃部は丁寧な仕上げ。	
10	石製模造品	短冊形斧	長さ：8.1 最大幅：3.2 刃部幅：3.1 基部幅：2.5 最大厚：0.9 孔径：0.25×0.25 重さ：40.74 色調：暗青灰色 石材：蛇紋岩	丁寧な仕上げ。	
11	石製模造品	短冊形斧	長さ：6.4 最大幅：2.5 刃部幅：2.4 基部幅：1.9 最大厚：0.7 孔径：0.25×0.2 重さ：19.67 色調：オリーブ灰色 石材：蛇紋岩	丁寧な仕上げ。	
12	石製模造品	直刃鎌	長さ：4.7 幅：1.9 厚さ：0.3 孔径：0.2×0.2 重さ：5.64 色調：オリーブ灰色 石材：蛇紋岩	左側に着柄部。明瞭な刃部。	
13	石製品	管玉	長さ：1.95 幅：0.5 孔径：0.2×0.2 重さ：0.79 色調：暗緑灰色 石材：蛇紋岩		
14	石製品	白玉	径：0.5×0.45 高さ：0.3 孔径：0.25×0.2 重さ：0.09 色調：灰白色 石材：蛇紋岩		

1～6は鞘表現を伴った刀子形の石製模造品である。全長は5.1cm～7.8cmであり、刀子としては特に大きいものも小さいものもない。鞘部分と柄部分の比率や、鞘の幅、穿孔部分なども大きな差はなく、一見して6点ともほとんど同じ規格で作られていると言える。方形突出部の下端は面をなしているが、1、2に関しては側面へ連なる辺が面取りされ、丸みを帯びている。

7～9は有肩斧形石製模造品である。刃部は刃先までくさび形で、肩はなで肩、そのほか袋部の構造、紐通し孔など基本的な要素としてはいずれも同じ表現構成である。9には袋部の折り返しを表現したかの様な「人」字状の浅い線刻があるが、その位置があまりにも刃部に近すぎており実態からすれば明らかにおかしい表現である。

10、11は短冊形斧形石製模造品である。刀子・有肩斧と違ってお互いが別規格で作られていることが明らかである。10は中央部分付近に最大厚を持ち、丸みを持つ印象であるのに対し、11は全て直線と平面で構成されておりシャープな印象を受ける。10は側面も平面ではなく、中央が弱く突出する曲

面であり、平坦な机上に立てることも困難な程である。

12は直刃の鎌形石製模造品である。平面形は、背側が先端に至るまでほとんど刃側に平行で、長方形に近い形状である。刃部は刀子や斧の様には面取りされておらず実際の刃の様に作り出されているが、特に後からその部分だけを調整した様子は無く、全体を作り出す中で巧妙に刃部の厚さをコントロールしているようである。折り返しの方向は、刃を手前、刃先を左に見た状態を正面（オモテ）とした場合、裏側へ向かって曲がる方向である。折り返し部分の裏側は、実測図では表現できないが、端から3mm幅に弱い段を持ち極僅かに厚みを増している。表側はほぼ2段の面取りがなされて、側面へと連なる。穿孔は折り返し部分のほぼ中央に、裏側から施されている。

13は管玉である。外面は僅かに縦方向の工具痕が見られるが凹凸という程ではなく、丁寧な調整がなされている。穿孔は両側から行われたと考えられるが、内壁を走査してもほとんど引っかかりは検出できない。端面はともに丁寧な仕上げで、調整痕は確認できない。

14は白玉である。石材は1～13と同じ蛇紋岩であるが、緑色味がほとんど無く、考古学の世界で蛇紋岩と対比して「滑石」と呼称されることのある石材である。穿孔は13と同じ工具・技法により穿孔されたものと考えられる。側面は曲面、端面は平面であり、端面は明らかに側面よりなめらかである。

b. 土器 (図29、写真19)

1は、E地点周堀底より出土したとされる埴である。

頸部の屈曲部から胴部上半にかけて1/2前後、口縁部の一部のみ遺存する。口縁部はわずかに彎曲しつつ開き、胴部上位に稜を有する形態である。口縁部外面には、ヨコナデ後、幅2mm前後の工具で、縦・斜めのミガキが加えられている。ミガキは、破片右半では密に、所々重なり合い、破片左半ではやや間隔を開け施されている。ミガキ痕には極細かな擦痕が見える。屈曲部を画す断面V字形の整形痕が部分的に認められる。外面屈曲部直下は、斜めのナデ、以下ヨコのケズリが加えられている。ケズリは器表の粘土をそぎ取るようにして加えられており、ケズリ痕はそれぞれ面をなし、砂粒移動の痕跡も明瞭である。一部にハケ様の擦痕が見られる。口縁部内面には、ナナメのナデ調整後、ナナメのミガキが加えられている。外面と同種の工具によると思われるが、ミガキ痕は幅4mm前後と太く、間隔を開け加えられている。焼成良好で、比較的堅い焼きの土器である。



図29 万年寺つつじ山古墳出土土器実測図

万年寺つつじ山古墳出土土器観察表

No.	型 類	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口徑 — 底径 — 頸高 —	膨らみを持つ体部。口縁部は内脣気味に開く。	外面—口縁部ナデ後に縦位ミガキ、体部ヘラケズリ後に上端部ナデ。内面—口縁部ナデ後に斜位ミガキ、体部ナデ。	石英・白色粒・チャート 内外—ぶい赤褐色	口縁下位—体部上位。

(3) 小 結

周堀底面から出土した埴 (図29: 1) は、古墳時代前期末～中期初頭の所産と見られ、石製模造品もほぼその段階におさまるものと見て無理はない。よって本墳の構築時期も同様の時期と考えられる。

3 林1号墳

[A地点]

調査期間 平成7年9月20日～平成7年10月3日

調査面積 580㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備考 同一調査区内で林2号墳の周堀を検出 [林2号墳C地点]

(1) 遺構

本庄市大字小島地内において、中心をX=27,785、Y=-59,797付近におく。周囲には東側に三空山古墳、西側に林2号墳が存在する。調査着手の時点で、周辺は平坦な畑地となっており、確認調査によってはじめて古墳の所在が判明した。古墳全体の範囲を検出しているが、調査区全体に攪乱が著しく、とくに古墳中央部および周堀北側から東側にかけては、後世の溝・土坑等により大きく破壊を被っている。平面形は南北に長く、やや歪んだ円形を呈する。南北9.5m、東西8.7mを測る。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態であった。埋葬施設の痕跡も認められない。

周堀は南西側に一部途切れる箇所があり、通路状の遺構が存在した可能性がある。周堀幅は西側が広く、北西側では一段と広がっている。反対に北側と南側では大きく幅を減じている。周堀底面は西側で段差を生じ、南側へ向かって一段と深くなっている箇所がある。南側でも複数か所の段差を認める。確認面からの深さは、西側から北西側にかけては深く70～85cm、北側および南側では浅く30cm前後を測る。

周堀覆土は3層に大別され中央上層に灰褐色土、中央下層にロームブロックを少量含む褐色土、内外の立ち上がり部分にロームブロックを含む暗褐色土や褐色土もしくはロームを主体とする暗黄褐色土が堆積する。A-A'では周堀底中央にロームブロックを少量含む黒灰褐色土が見られる。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

(2) 遺物

表土、周堀覆土を問わず、出土遺物は皆無であった。また、遺構確認面および攪乱中に少量の円礫が認められたが、径が小さく墳丘の葺石に用いられた礫とは認定しがたい。

(3) 小 結

林1号墳の規模は直径10m未満にとどまる。旭・小島古墳群中最も小型の円墳である。周堀覆土が他の古墳と共通すること、周辺には古墳以外に古代以前の遺構が存在しないことから、古墳として認定することに問題はないが、構築時期は、出土遺物がなく、特定が難しい。平面形がやや歪んだ円形を呈するものの、墳丘、周堀ともに明瞭な規格をもつことから7世紀代には降下しないと推測される。現状では、5世紀末葉から6世紀代までの期間が考えられる。

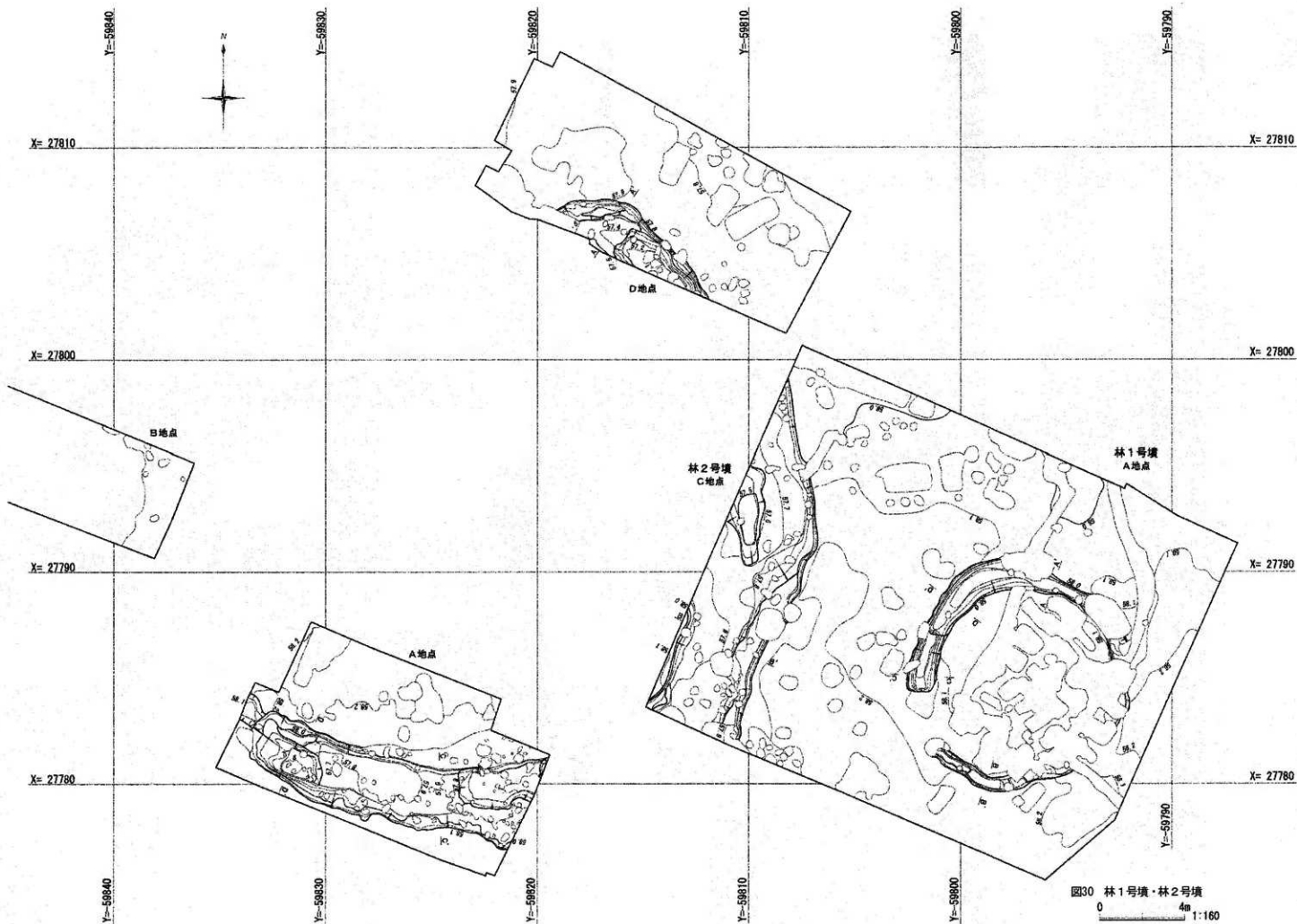
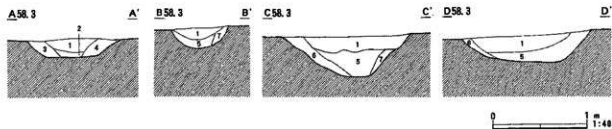


図30 林1号墳・林2号墳

0 4m 1:160



林1号墳A地点土層説明 [A-A'・B-B'・C-C'・D-D']

1 灰褐色土

2 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。

3 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

5 褐色土 ロームブロックを少量含む。

6 褐色土 ロームブロックを断片状に含む。

7 暗黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土ブロック含む。

図31 林1号墳土層断面図

4 林2号墳

[A地点]

調査期間 平成4年9月17日～平成4年9月22日

調査面積 117㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[B地点]

調査期間 平成5年11月26日～平成5年12月20日

調査面積 160㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備考 同一調査区内で林4号墳の周堀を検出 [林4号墳B地点]

[C地点]

調査期間 平成7年9月20日～平成7年10月3日

調査面積 580㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備考 同一調査区内で林1号墳の周堀を検出 [林1号墳A地点]

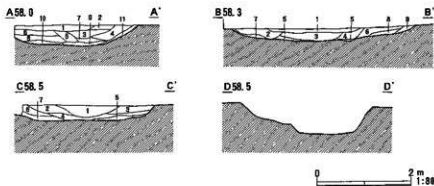
[D地点]

調査期間 平成8年9月4日～平成8年9月25日

調査面積 115㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司



林2号墳D地点土層説明【A-A'】

- | | | |
|---------|---------|------------------|
| 1 黒褐色土 | 4 暗灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 2 暗灰褐色土 | 5 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 3 暗灰褐色土 | 6 暗褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 4 黒褐色土 | 7 黒褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 5 黒灰褐色土 | 8 黒褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 6 暗褐色土 | 9 褐色土 | ロームブロックを間降り状に含む。 |
| 7 暗褐色土 | | |
| 8 暗褐色土 | | |
| 9 暗黄褐色土 | | |
| 10 黄褐色土 | | |
| 11 黄褐色土 | | |

林2号墳A地点土層説明【C-C'・D-D'】

- | | |
|---------|---------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 暗褐色土ブロックを斑状に含む。 |
| 2 暗灰褐色土 | ロームブロックを含み、暗褐色ブロックを斑状に含む。 |
| 3 黒灰褐色土 | 暗褐色土ブロックを斑状に含む。 |
| 4 黒灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 6 暗灰褐色土 | ロームブロックを間降り状に含む。 |
| 7 暗黄褐色土 | ロームブロックを間降り状に含む。 |

林2号墳C地点土層説明【B-B'】

- | | |
|---------|-----------------|
| 1 黒灰褐色土 | 暗褐色土ブロックを斑状に含む。 |
| 2 黒灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 3 暗灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

図32 林2号墳土層断面図

(1) 遺構

本庄市大字小島地内において、中心をX=27,795、Y=-59,825付近におく。周囲には東側に林1号墳、西側に林4号墳が所在する。調査着手の時点で、周辺は平坦な畑地となっており、確認調査によってはじめて古墳の所在が判明した。A地点の調査で墳丘南側の周堀の一部、C地点の調査で墳丘東側の周堀、D地点の調査で墳丘北東側の周堀の一部を検出している。なお、B地点は本来墳丘西側の周堀にかかる部分であるが、攪乱のためか明瞭な遺構は検出されていない。墳丘部分はA地点およびC地点の一部で確認している。A地点では墳丘の立ち上がりかほぼ整円を描く。現状では、径25m前後の円墳と推定される。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態であった。埋葬施設の痕跡も認められない。

周堀は、外側立ち上がりの規格線が蛇行して、平面形が整円を描かない。周堀幅は南側が狭く、南西側には一段と幅を減じる箇所がある。一方、南東側には一旦幅が広がり、東側では外側立ち上がりか内側に挟れるようにしてふたたび狭くなっている。周堀底面には各所に不整形の落ち込みが見られる。確認面からの深さは、浅い部分で30~45cm、落ち込み部分では50~60cmを測る。

周堀覆土は調査地点により異なるが、全体にロームブロックを含む暗褐色系の土層の堆積が目立つ。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

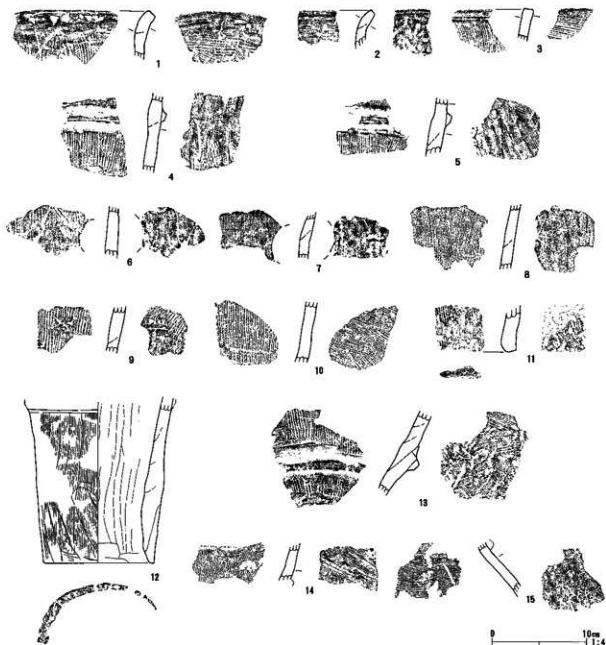


図33 林2号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図

(2) 遺物

遺物は少量の埴輪と土師器を出土している。埴輪はA地点、B地点およびD地点の表土ならびに周堀覆土から検出している。原位置を保つ資料は存在せず、特定の層位に集中する傾向も認めない。土師器はいずれもA地点の試掘調査時に出土している。

a. 埴輪

円筒埴輪 [1~12] (図33、写真23)

すべて破片資料で、全体の段構成、各段の幅も不明である。

外面調整は一次調整に伴う縦位のハケのみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位、横位および斜位のハケもしくはナデによる。12は基部外面調整として板押圧を施している。また、基

部内面に刀子状工具による横位のケズリを加えている。底面には棒状の圧痕を認める。

突帯は断面形が崩れた台形を呈する。透孔はいずれも円形である。6の外面にはヘラ状工具による線刻が存在する。

胎土は片岩・チャートを含むものと、角閃石安山

岩粒を含むものがある。前者のうち5・12には海綿骨針の混入が観察される。焼成は総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。8は二次的に被熱している。色調にはぶい橙色、橙色、ないし明赤褐色を呈する。

朝顔形埴輪 [13~15] (図33、写真23)

13・14は口縁部の破片である。13は中位に断面台形の突帯が巡る。15は肩部の破片で、外面一次調整に横位のハケを用いている。胎土は14に片岩・チャートを、13・15に角閃石安山岩粒を含み、13にはとくに砂礫の含有が目立つ。焼成は総じて良好で、色調は13が明赤褐色、14がぶい橙色、15は橙色を呈する。

形象埴輪 [1] (図34、写真23)

器種不明 [1] (図34、写真23)

板状の破片である。表裏とも斜離による傷みが著しい。象形埴輪の壁下端の一部である可能性が考えられる。調整は内外面とも斜位のハケがわずかに観察される。胎土には砂粒とともに角閃石安山岩粒を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

b. 土器

土師器 [1・2] (図35、写真23)

环 [1] (図35、写真23)

全体の1/3程度が残る。体部外面にヘラケズリを施し、口縁部は丁寧な横位のナデを加えている。外面は黒色処理が施されている。

甕 [2] (図35、写真23)

底部から胴部下位にかけてが残る。

体部外面にヘラケズリを施し、内面に

は1条の粘土接合痕が観察される。



図34 林2号墳出土形象埴輪実測図

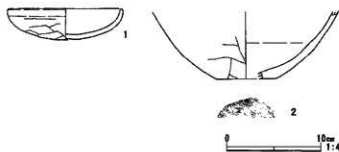


図35 林2号墳出土土器実測図

林2号墳出土土器観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 环	口径 (11.9) 底径 — 器高 3.3	体部は丸みを持ち、口縁部は内彎して立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・角閃石 内—橙色 外—褐色	1/3。 外面、黒色処理。
2	土師器 甕	口径 — 底径 (5.8) 器高 —	丸みを持って立ち上がる胴部。	外面一胴部下位～底部ヘラケズリ後ナデ。内面一胴部～底部ナデ。	黒色粒・チャート 内外—橙色	胴部下位～底部片。

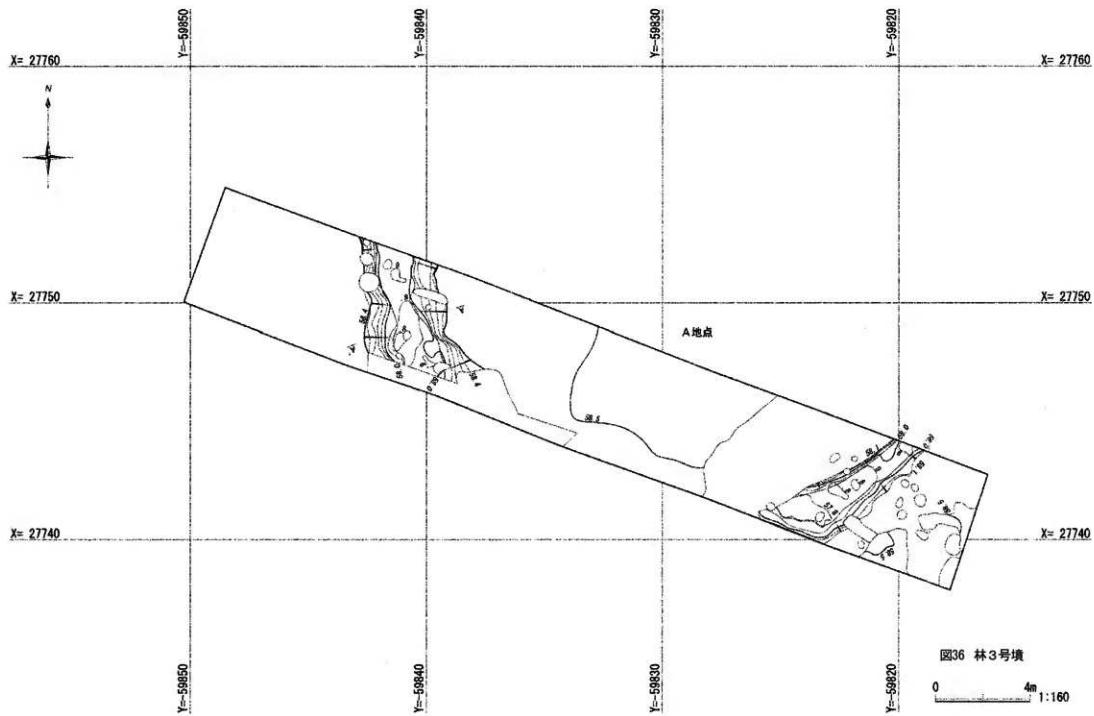


图36 林3号墳

(3) 小 結

これまでの調査より、林2号墳は径25m前後の円墳と推定された。出土遺物には埴輪および土師器があるが、後者は試掘調査時に表土層から検出したもので、混入の可能性を排除できない。また、追葬もしくは二次的な祭祀行為に伴い、追加的に供献された場合もありうる。一方、埴輪は出土量こそ少ないものの、周堀覆土でも検出されていることから、本来、林2号墳に伴うものと考えて差し支えないだろう。このうち、円筒埴輪は、突帯断面形が崩れた台形を呈し、第1段幅が長く、基部外面調整に板押圧が観察できる。以上から、林2号墳の構築時期は6世紀後半と推定される。

5 林3号墳

[A地点]

調査期間 平成5年9月27日～平成5年10月25日

調査面積 180㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

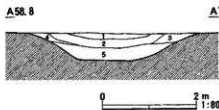
本庄市大字小島地内において、中心をX=27,750、Y=-59,830付近におく。周囲には北側にやや距離をおいて林2号墳が所在する。調査着手の時点で、周辺は平坦な畑地となっており、確認調査によってはじめて古墳の所在が判明した。墳丘南半と周堀西側および南東側のそれぞれ一部を検出している。調査範囲は限定されるが、墳丘の立ち上がりは西側、南東側とも緩やかな弧を描くことから、直径20m前後の円墳と考えられる。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態であった。埋葬施設の痕跡も認められない。

周堀は、外側立ち上がりの規格線が蛇行して、平面形が整円を描かない。南東側の周堀は南から東にかけて、西側の周堀は南から西にかけてそれぞれ幅を減じている。周堀底には緩やかな起伏があり、堀幅の広い部分ほど深い。確認面からの深さは西側最深部で60cm、同じく南東側最深部で40cmを測る。

周堀覆土は5層に分割され、全体にロームブロックを多量に含む黒褐色土および暗褐色土が堆積している。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

(2) 遺 物

遺物は表土から多数の埴輪を出土しているが、周堀覆土からの検出量は極端に少ない。土師器・須恵器も検出されていない。



林3号墳A地点土層説明 [A-A']

- 1 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子霈降り状に含む。小型ロームブロック若干含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子、小原ロームブロック霈降り状に含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを霈降り状に含む。

図37 林3号墳土層断面図

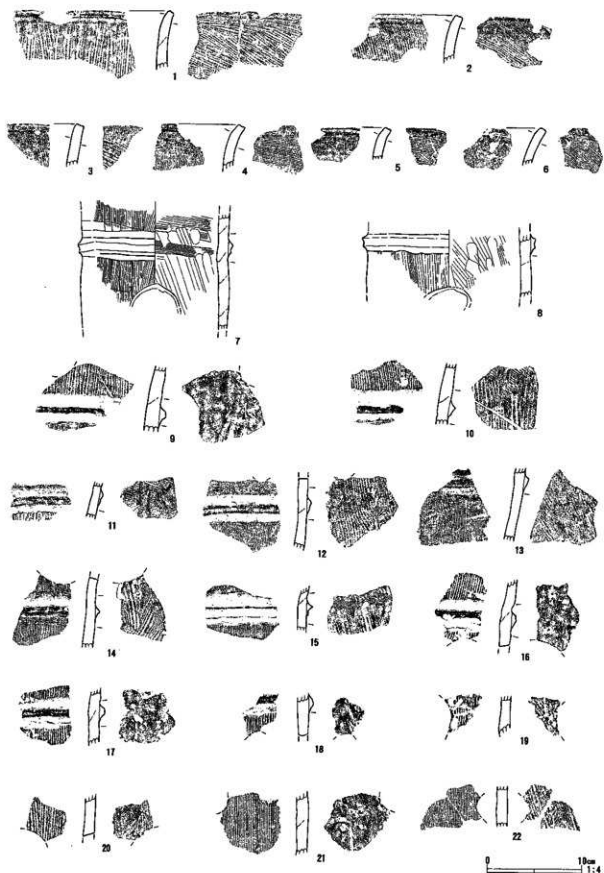


图38 林3号墳出土土陶筒・朝顔形蓮輪突測図(1)

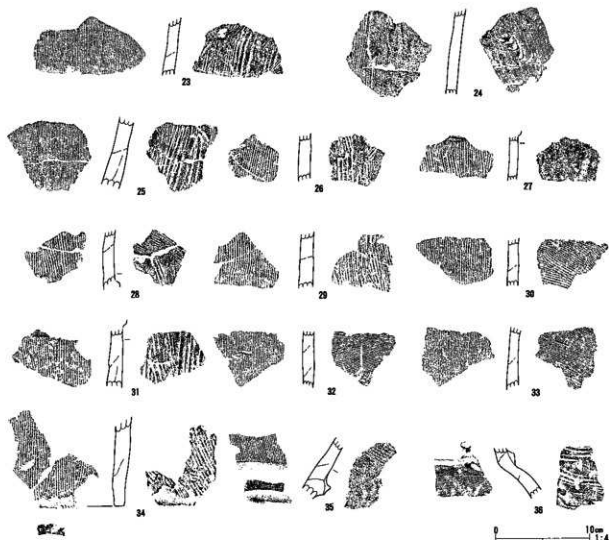


図39 林3号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(2)

a. 埴輪

円筒埴輪 [1~34] (図38・39、写真24・25)

検出した円筒埴輪はすべて破片資料で、全体の段構成、各段の幅等の詳細は不明である。ただ、7・8に見るように全体的には寸割でやや細長い形状を示すようである。

外面調整は一次調整に伴う縦位のハケのみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位、横位および斜位のハケもしくはナデによる。基部の破片が少なく、基部外面調整の有無・種別は不明である。34は底面に指頭圧痕を認める。

突帯は断面形が崩れた台形を呈するものと三角形を呈するものがある。透孔はいずれも円形である。8の透孔は歪みが顕著である。10の内面にはへら状工具による直線状の線刻が存在する。

胎土はほとんどの個体に角閃石安山岩粒を含む。海綿骨針の混入する個体は認められない。焼成は総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。色調はにぶい橙色、橙色、ないし明赤褐色を呈する。

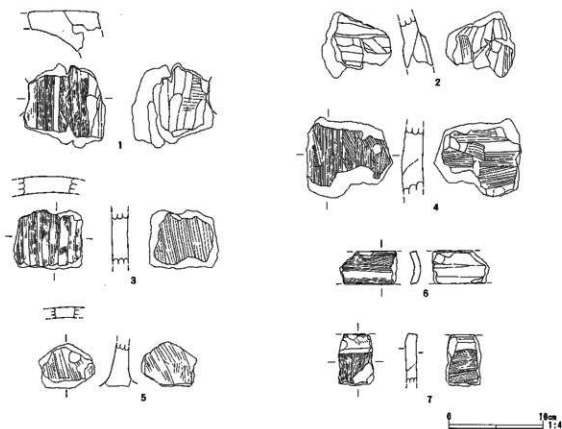


図40 林3号墳出土土形象埴輪実測図

朝顔形埴輪 [35・36] (図39、写真25)

35は口縁部の破片である。中に断面三角形の突帯が巡る。36は肩部から頸部にかけての破片で、外面一次調整に横位のハケを用いている。頸部には断面三角形の突帯が巡る。胎土には角閃石安山岩粒を含み、焼成は良好である。色調は35が明赤褐色、36が橙色を呈する。

形象埴輪 [1～7] (図40、写真25)

家 [1] (図40、写真25)

家形埴輪の妻側壁の隅付近と推定される。外面調整は縦位のハケおよびナデ、内面調整は斜位のハケのち縦位のナデが施されている。妻側の中央よりに円形の透孔が存在する。胎土には砂粒とともに角閃石安山岩粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

器種不明 [2～7] (図40、写真25)

2は幅広い粘土帯が貼付される。調整は外面が不定方向のナデ、内面が縦位のハケのちナデである。胎土は角閃石安山岩粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

3・4はともに板状の破片であるが、4は横方向にわずかな湾曲が認められる。調整は表裏面とも縦位もしくは横位のハケによる。胎土には角閃石安山岩粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

5は下方に向かって厚みを増し、下面は剝離面となっている。馬の鬣もしくは盾あるいは紋の譜状部分の破片と考えられる。調整は表裏面とも斜位のハケによる。胎土は粗砂を含む。焼成は良好で、

色調は橙色を呈する。

6は器壁が薄く、幅3.5cmの細長い部品である。単軸方向に丸く湾曲している。調整は外面が長軸方向のハケおよびナデ、内面が同じく長軸方向のナデである。胎土は角閃石安山岩粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

7も板状の破片で、上辺が端面となっている。調整は表裏面とも縦位もしくは横位のハケで、上端部には横位のナデが施されている。胎土には角閃石安山岩粒を含む。焼成は良好で、色調は明赤橙色を呈する。

b. 土器

土師器 [1] (図41、写真23)

壺 [1] (図41、写真23)

口縁部・胴部・底部のそれぞれ一部が残存するのみで、相互に接合しないが、胎土・焼成・色調その他の要素から、同一個体と認定しうるものである。底部は丸底気味に成形されている。胴部と底部との境界には屈曲部があり、胴部は緩やかに湾曲しながら立ち上がっている。胴部・中部は膨らみをもつ。口縁部は外反しながら立ち上がり、中部で明瞭な段を有し、この部分でさらに外反を強め、直線的にのびて口唇部へいたる。口唇部は端面をもたず、丸く成形されている。

調整は胴部および底部外面が斜位の粗いヘラケズリ、同内面がヘラナデ、口縁部が内外面とも横位のナデである。

胎土には石英・白色粒・黒色粒を含み、焼成はやや軟質で、色調は内外面ともいよいよ黄褐色を呈する。

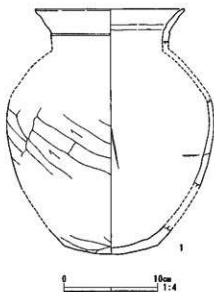


図41 林3号墳出土土器実測図

林3号墳出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	形造・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 壺	口徑 (16.0) 底径 (10.0) 器高 —	膨らみを持つ胴部。口縁部は中部に段を持ち、外反して開く。底部は丸底気味。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一いよいよ黄褐色	口縁部・胴部 中部・底部残存。

(3) 小 結

林3号墳出土の円筒埴輪は、全体的に寸胴でやや細長い形状を示すこと、透孔が小型で突帯から離れ、段の中央に配されること、突帯断面形が崩れた台形を呈すること、胎土に角閃石安山岩を含むことなどの特徴がある。旭・小島古墳群のなかで、こうした特徴をもつ円筒埴輪は、上前原地区に所在する前の山古墳・山の神古墳・御手長山古墳などで出土しているが、これらはいずれも埋葬施設に横穴式石室を採用し、副葬品からも6世紀末葉の築造が考えられる古墳である。林3号墳の場合、埋葬施設・副葬品とも明らかではないが、出土した円筒埴輪の諸要素から推測すれば、前の山古墳などと同様、6世紀末葉の築造が想定される。

6 林4号墳

[A地点]

調査期間 平成4年5月22日～平成4年5月30日

調査面積 570㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[B地点]

調査期間 平成5年11月26日～平成5年12月20日

調査面積 160㎡

調査原因 区画整理に伴う道路建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

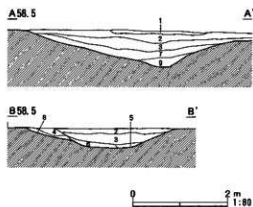
備考 同一調査区内で林2号墳の周堀を検出 [林2号墳B地点]

(1) 遺構

本庄市大字小島地内にあって、中心をX=27,810、Y=-59,854付近におく。周囲には南東側に林2号墳が、南西側の直近に林6号墳が所在する。調査着手の時点で、周辺は平坦な畑地となっており、確認調査によってはじめて古墳の所在が判明した。長径20.4m、短径17.6を測る北東-南西方向にやや長い方墳で、西側の約2/3ほどを検出している。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態であった。埴輪施設の痕跡も認められない。

周堀は墳丘に沿って長方形に巡る。堀幅は南西側で狭く、確認面で3.0～3.2m、南東および北西西側では広く、同じく確認面で3.8～4.8mを測る。周堀底面は南東側で土坑状の窪みが認められ一段と深くなっている。そのほかは、ほぼ平坦であるが、南西側中央および北東隅付近には陸橋状の高まりが存在する。確認面からの深さは40～75cmを測る。

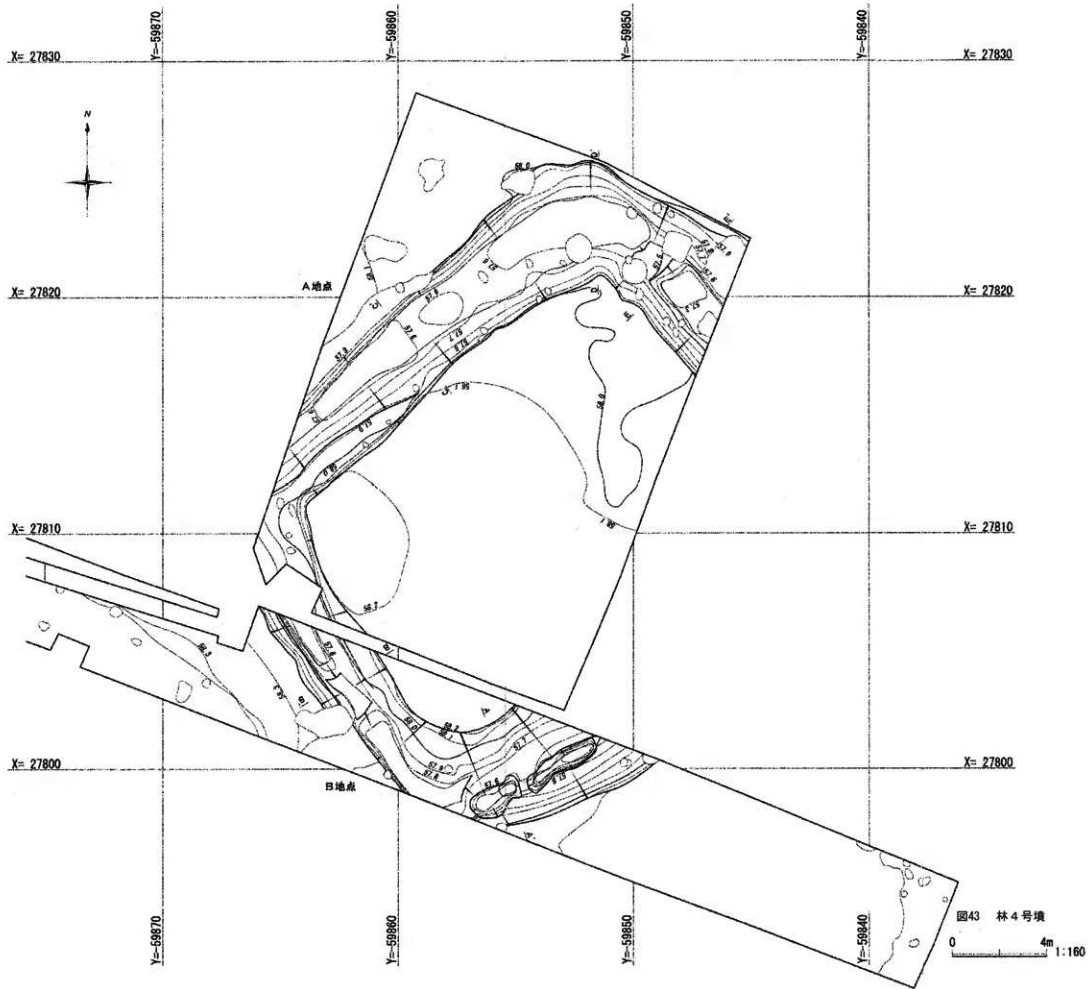
周堀覆土の堆積状況は地点により異なる。A地点では3層に大別され、上層に黒灰褐色土、中層に灰褐色土ないし暗灰褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、全体にロームブロックを多く含んでいる。B地点では1・2層に多量のパミスを含む層が見られ、その直下に灰褐色土ブロックを多量に含有

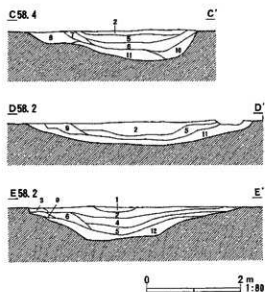


林4号墳B地点土層説明 [A-A'・B-B']

- 1 灰褐色土 As-Aを含みざらつく。
- 2 暗灰褐色土 As-Bを含みざらつく。黒色土ブロックを少量含む。
- 3 黒灰褐色土 灰褐色土ブロックを散状に含む。
- 4 黒灰褐色土
- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 黄褐色土 ロームブロックを覆降り状に含む。

図42 林4号墳土層断面図(1)





林4号墳A地点土層説明【C-C'・D-D'・E-E'】

- 1 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 黒灰褐色土 暗褐色土ブロック多量に含む。
- 3 灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 灰褐色土 ロームブロック、暗褐色土ブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロック、灰褐色土ブロックを多量に含む。
- 10 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 11 暗黄褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
- 12 黄褐色土 ロームブロックを露降り状に含む。

図44 林4号墳土層断面図(2)

する黒灰褐色土が発達する。最下層にはA・B地点ともにロームブロックを多量に含む黄褐色土が堆積する。Hr-FAの堆積は確認できない。

(2) 遺物

出土遺物には埴輪・須恵器があるが、いずれもB地点の表土から出土している。周堀覆土からの遺物は皆無の状態、本来、林4号墳に伴う資料は存在しないと判断される。

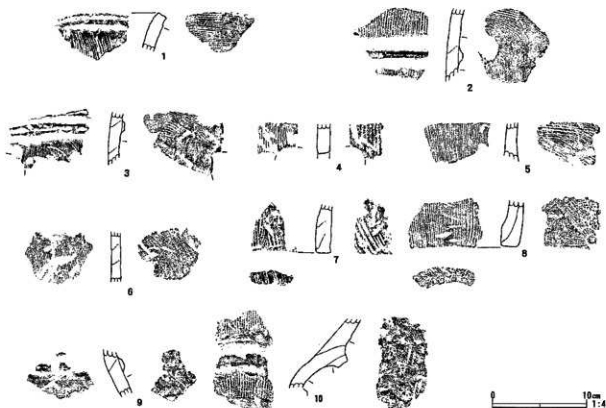


図45 林4号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図

a. 埴輪

円筒埴輪 [1~8] (図45、写真26)

すべて破片資料で、全体の段構成、各段の幅も不明である。

外面調整は一次調整に伴う縦位のハケのみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位、横位および斜位のハケもしくはナデによる。8は基部内面に刀子状工具による横位のケズリを加えている。また、7の底面には木目圧痕を認める。

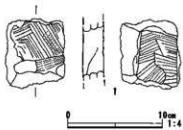


図46 林4号墳出土土形象埴輪実測図

突帯は断面形が台形を呈するものと「M」字形を呈するものとが見られ、透孔はいずれも円形である。3の外面にはヘラ状工具による弧状の線刻が存在する。

胎土は片岩・チャートを含むものと、角閃石安山岩粒を含むものがあり、後者の占有率が高い。海綿骨針の混入する個体は認められない。焼成は総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。色調は橙色、明赤褐色を呈する。

朝顔形埴輪 [9~10] (図45、写真26)

9は口縁部の破片である。中位に断面台角形の突帯が巡る。胎土には片岩・チャートを含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。10は肩部から頸部にかけての破片で、外面一次調整に横位のハケ、内面にはナデを施している。頸部には断面三角形の突帯が巡る。胎土には角閃石安山岩粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

形象埴輪 [1] (図46、写真26)

器種不明 [1] (図46、写真26)

厚みのある板状の破片である。家形埴輪の壁の一部である可能性が考えられる。調整は表裏面とも不定方向のハケが施され、表面の下部には一部ナデが認められる。胎土には砂粒とともに角閃石安山岩粒を含む。焼成は良好で、色調はぶい赤褐色を呈する。

b. 土器

須臾器 [1・2] (図47、写真26)

甕 [1・2] (図47、写真26)

1は口縁部の破片である。口唇端部が上方につまみ上げられている。内外面とも丁寧になでられ、外面には櫛描波状文が施されている。2は肩部の破片で、全体に丸みを帯びる。



図47 林4号墳出土土器実測図

林4号墳出土土器観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須臾器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	端部が上方に立ち上がる口縁部。	外面—口縁部ヨコナデで櫛筋き波状文。内面—口縁部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外一灰白色	口縁部片。
2	須臾器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	丸みを持つ胴部片。	外面—平行タタキ後ナデ。内面—同心門状当具痕。	白色粒・黒色粒 内—灰白色 外—灰色	胴部片。

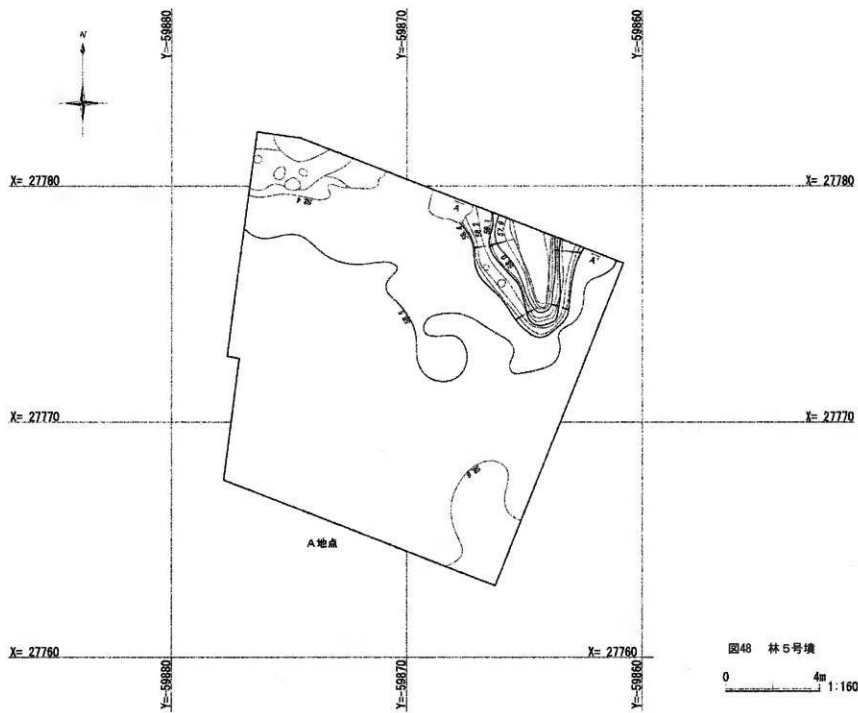


图48 林5号填
 0 4m 1:160

外面は平行タキののちナデが加えられ、内面には同心円状の当具痕が残る。

(3) 小 結

林4号墳では埴輪片・須恵器片が出土しているが、これらの資料は出土状況から本古墳に伴う遺物とは認定できない。ただ、旭・小島古墳群では、年代の判明する他の方墳がいずれも古墳時代前期後葉から中期初頭までの時期に限定され、古墳時代中期前半段階まで降下する例が存在しないことから推測すれば、林4号墳の築造時期も古墳時代中期初頭以前に遡ると考えられる。

7 林5号墳

[A地点]

調査期間 平成4年6月22日～平成4年6月29日

調査面積 220㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本市市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

本市大字小島地内にあつて、周囲には北側に林4号墳、西側に林6号墳・7号墳が存在する。調査区の一隅で古墳の周堀の一部を検出した。周堀は調査区北側の壁から緩やかに湾曲しつつ南南東方向へ伸び、長さ5m弱の地点で取束している。湾曲の方向から墳丘部分は調査区東側外に存在したと思われる。周堀が取束している箇所は、林1号墳と同様に南西側に存在する陸橋部分であろう。周堀底面は平坦で、確認面からの深さ約0.7mを測る。

周堀覆土は9層に分層される。1・2層中にAs-A、4層中にAs-Bの混入が認められる。上層の1～5層までは、バミスや暗褐色土ブロックなどを含む灰褐色系の土層が堆積するのに対し、下層の5～9層までは、ロームブロックを多量に含む褐色系の土層が堆積している。Hr-FAの堆積は確認できない。

なお、墳丘が存在したと思われる地点は、調査着手の段階ですでに平坦な畑地となっており、墳丘盛土はすでに削平されているものと推測される。

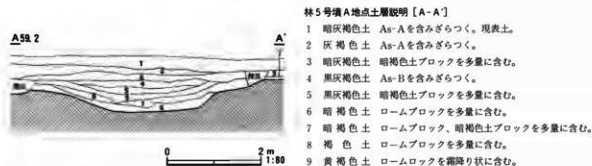


図49 林5号墳土層断面図

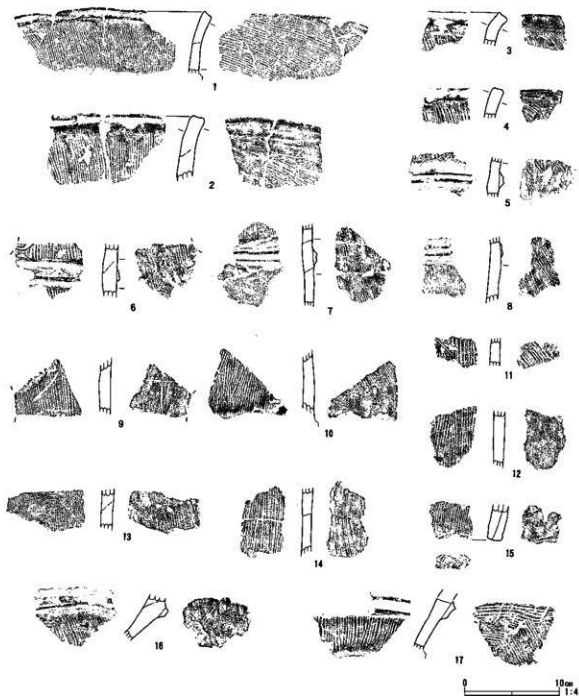


図50 林5号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図

(2) 遺物

周堀覆土および周堀上層表土から埴輪片を検出している。周堀内の遺物は、覆土の上層に集中し、周堀底面付近からは出土していない。

a. 埴輪

円筒埴輪 [1~15] (図50、写真26・27)

すべて破片資料で、全体の段構成、各段の幅も不明である。

外面調整は一次調整に伴う縦位のハケのみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位、

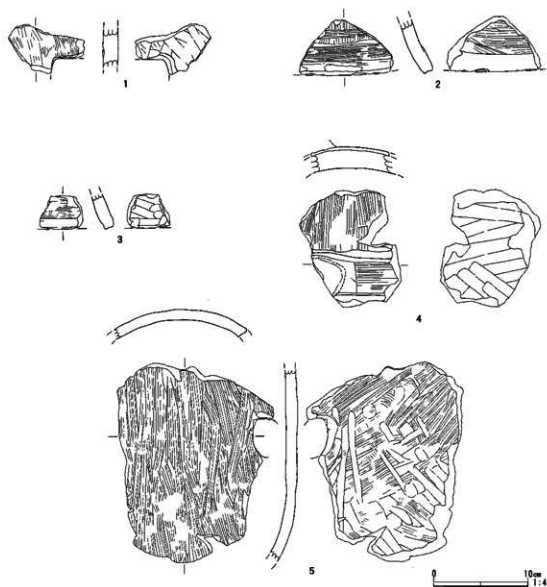


図51 林5号墳出土土形象埴輪実測図

横位、斜位のハケおよびナデが観察される。15は基部外面調整として板押圧を施している。また、基部内面に刀子状工具による横位のケズリを加えている。底面には棒状の圧痕を認める。

突帯は断面形が崩れた台形もしくは偏平化の著しい「M」字形を呈する。透孔の確認できる個体は存在しない。6の外面にはヘラ状工具による弧状の線刻が、また9の内面には同じくヘラ状工具による直線状の線刻が存在する。

胎土は片岩・チャートを含むものと、角閃石安山岩粒を含むものがあり、占有率は相半ばする。焼成は個体に関係なく総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。色調は橙色ないし明赤褐色を呈する。

朝顔形埴輪 [16・17] (図50、写真27)

16・17はともに口縁部の破片である。中位に断面台形の突帯が巡る。17は接合部を擬口縁状に仕上げ、接合用の刻みを加えている。胎土には片岩・チャートを含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を

呈する。

形象埴輪 [1～5] (図51、写真27)

家 [1] (図51、写真27)

家形埴輪の壁の一部である。入口もしくは窓を表現する方形の透孔がある。調整は外面が縦位のハケ、内面が不定方向のハケのち斜位のナデである。胎土には片岩・チャートを含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

人物 [2・3] (図51、写真27)

2・3ともに人物の着衣の裾部である。調整は2の外面が縦位のハケのち横位のハケ、内面が横位もしくは斜位のハケ、3の外面が横位のハケ、内面が不定方向のナデで、端部にはともに横位のナデを施している。胎土には片岩・チャートを含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

馬 [4・5] (図51、写真27)

4は胸繁ないし尻繁の一部である。幅広の粘土を用いて繁を表現している。繁の表面には剝離痕が観察される。大型の鈴が剝落した痕跡と思われる。調整は外面のうち馬本体が縦位のハケ、繁部分が横位のハケ、内面が不定方向のナデである。

5は馬形埴輪の尻部から左後脚上部にかけての破片である。尻部中央の透孔は歪んだ円形を呈する。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケのち不定方向のナデである。4・5ともに、胎土には片岩・チャートを含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

(3) 小 結

林5号墳は周堀の一部を検出したのみで、墳形・墳丘規模についての詳細は不明である。遺物は外面二次調整を欠く円筒埴輪と若干の形象埴輪が見られる。このうち馬形埴輪は尻繁を表現する大型品で、旭・小島古墳群内では山の神古墳、御手長山古墳など埋葬施設に横穴式石室を採用する古墳時代後期後半段階の古墳に伴うことが知られることから林5号墳の築造も同様の時期と推測される。

8 林6号墳

[A地点]

調査期間 平成4年6月22日～平成4年6月29日

調査面積 220㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備 考 同一調査区内で林5号墳の周堀を検出 [林5号墳A地点]

[B地点]

調査期間 平成5年12月15日～平成6年1月26日

調査面積 100㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備 考 同一調査区内で林4号墳の周堀を検出 [林4号墳B地点]

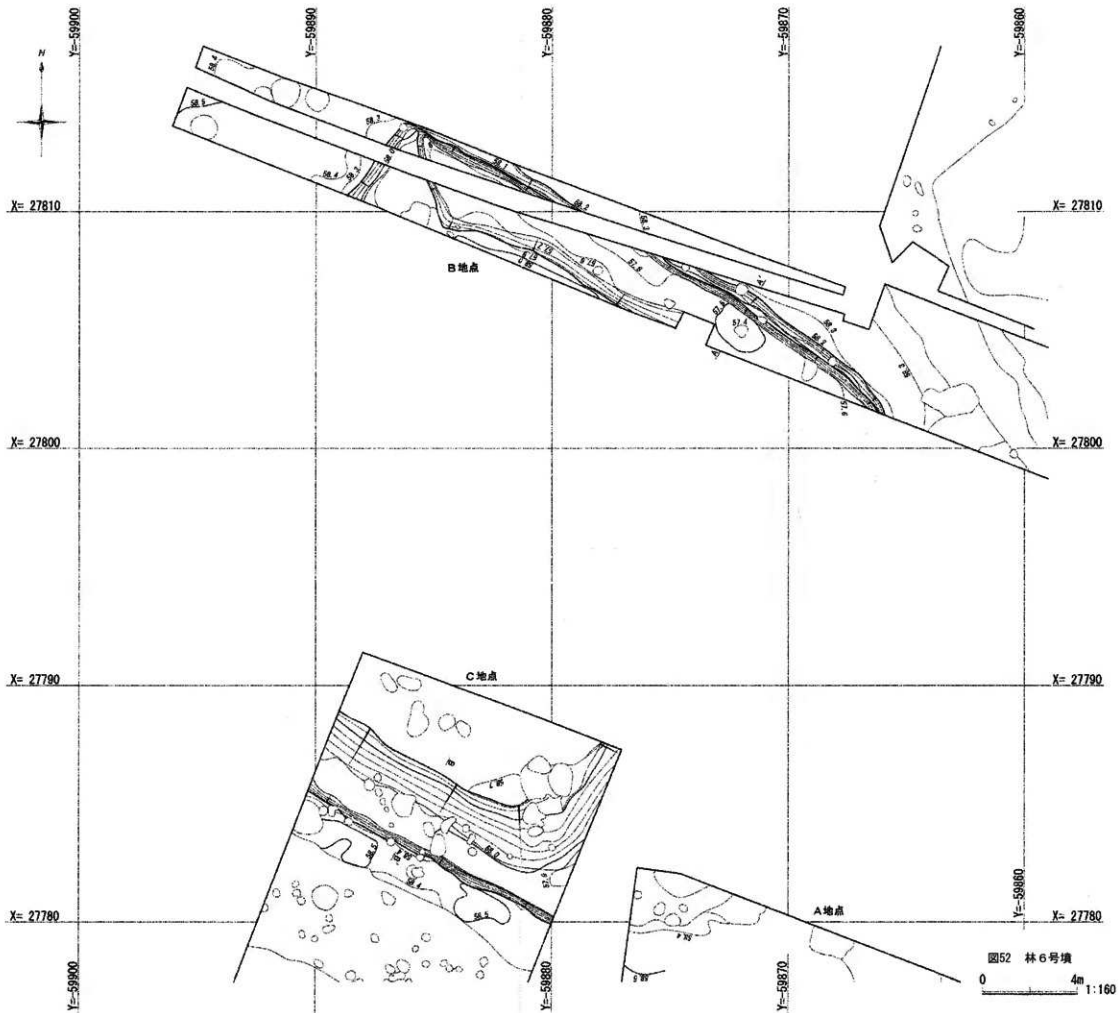
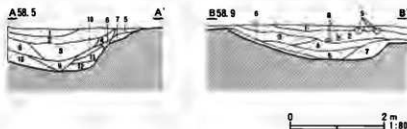


图52 林G号墳
0 4m 1:160



林6号墳B地点土層説明【A-A'】

- 1 黒灰褐色土 As-Aを含みざらつく。
- 2 黒灰褐色土 黒褐色土ブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 やや砂質。
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 黒灰褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
- 10 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

- 11 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 12 褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
- 13 黄褐色土 ロームブロック粒子を霜降り状に含む。

林6号墳C地点土層説明【B-B'】

- 1 灰褐色土 As-Aを含みざらつく。石材、埴輪片を含む。
- 2 暗褐色土 石材、埴輪片を含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。しまり強。
- 4 暗灰褐色土
- 5 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 褐色土 ロームブロックを霜降り状に含む。

図53 林6号墳土層断面図

【C地点】

調査期間 平成9年2月24日～平成9年3月17日

調査面積 230m²

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備考 同一調査区内で林7号墳の周堀を検出【林7号墳C地点】

(1) 遺構

本庄市大字小島地内において、中心をX=27,800、Y=-59,880付近におく。周囲には北東側に林4号墳、東側に林5号墳、南側に林7号墳所在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。一辺約23mを測る方墳で、A地点の調査で墳丘北辺と周堀の一部、B地点の調査で墳丘南東側と周堀の一部を検出している。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態であった。埋葬施設の痕跡も認められない。

周堀は墳丘に沿って方形に巡る。周堀幅はほぼ均等で、確認面で約3.5m前後を測る。周堀底面はほぼ平坦で、土坑状の掘り込みは認められない。周堀立ち上がりの角度は墳丘側が緩やかであるのに対し、外側は急傾斜をなしている。確認面からの深さは80～90cmを測る。

周堀覆土は、A・B地点とも、上層に灰褐色系、下層にロームブロックを多量に含む褐色系の土層が堆積している。1層中にはAs-Aの混入が認められる。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。なお、A地点では1・2層中に石材や埴輪片が包含されている。

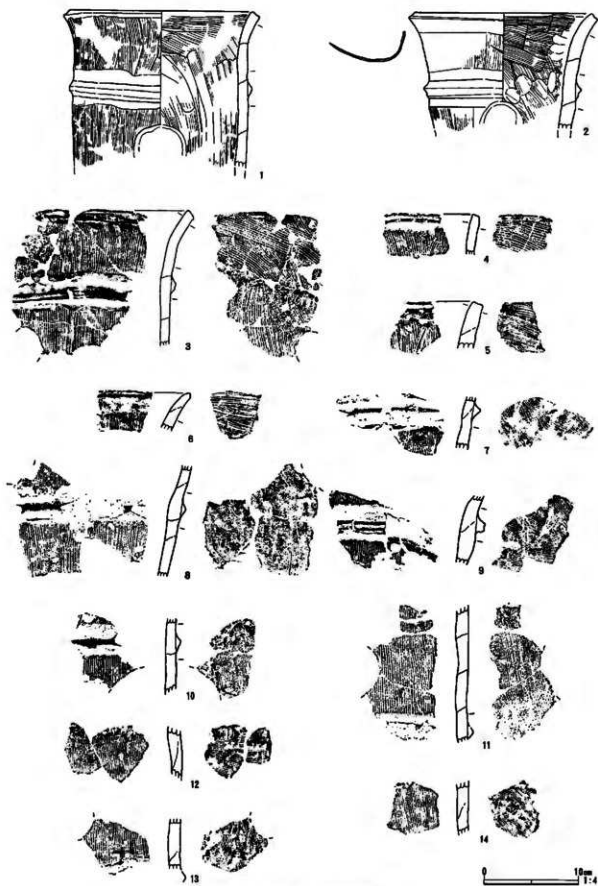


图54 林6号出土陶筒·朝顔形埴輪突測図(1)

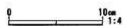
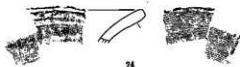
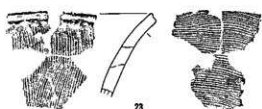
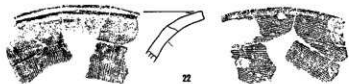
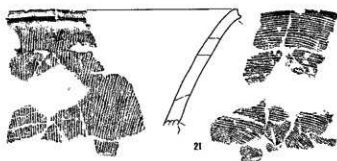
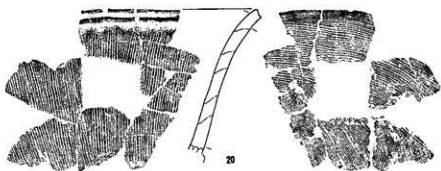
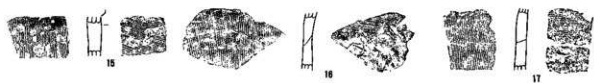


图55 林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(2)

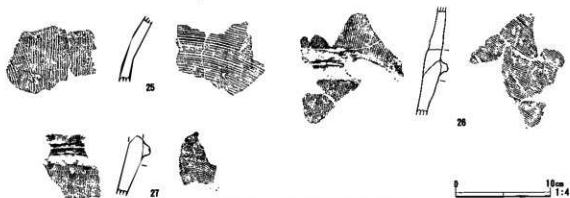


図56 林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(3)

(2) 遺物

埴輪片多数と少量の土師器を出土している。埴輪片はすべて表土層からの出土で周堀覆土からは検出されていない。周堀覆土内の遺物はすべて土師器で、鉢1点のほか器種不明の小片がわずかに認められる。

a. 埴輪

円筒埴輪 [1~19] (図54・55、写真27・28)

すべて破片資料で、全体の段構成が判明する資料は存在しない。

1~3は最上段幅のわかる資料である。1・3は透孔の位置などから中間段に比べ、最上段幅の狭い型式であることが理解される。また、器壁が薄く、細身で寸胴の形態も共通し、3条4段構成程度の大形品である。これに対し、2は器壁が薄く、逆台形に開く形態をとり、2条3段構成となる可能性が考えられる。

外面調整は一次調整に伴う縦位のハケのみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位、横位、斜位のハケおよびナデが観察される。

突帯は断面形が三角形を呈するものが多く、「M」字形を呈するものがわずかに見られる。透孔はすべて円形である。2の最上段外面にはヘラ状工具による弧状の線刻が存在する。

胎土は片岩・チャートを含むものと、角閃石安山岩粒を含むものがあり、占有率は相半ばする。12・14・16~18には海綿骨針の混入を認める。焼成は総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。色調はぶい橙色、橙色ないし明赤褐色を呈する。

朝顔形埴輪 [20~27] (図55・56、写真28・29)

いずれも口縁部の破片である。外面調整は縦位のハケ、内面調整は横位および斜位のハケである。26・27には断面台形の突帯が巡る。胎土は片岩・チャートを含むものと、角閃石安山岩粒を含むものがあり、占有率は相半ばする。22には海綿骨針の混入を認める。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

形象埴輪 [1] (図57、写真29)

馬 [1] (図57、写真29)

馬本体から剝離した鈴である。中実成形により、調整は全面的にナデが加えられている。胎土には角閃石を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

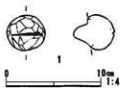


図57 林6号墳出土形象埴輪実測図

b. 土器

土師器 [1] (図58、写真27)

鉢 [1] (図58、写真27)

全体の4/5程度が残る。くぼみ底で体部は丸みをもって立ち上がり、外面にヘラケズリを施している。口縁部は外面に丁寧な横位のナデを、内面にはハケを加えている。胎土には白色粒・黒色粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

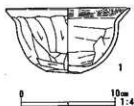


図58 林6号墳出土土器実測図

林6号墳出土土器観察表

No	器 種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	土師器 鉢	口径 13.2 底径 3.8 器高 6.9	丸みを持つ体部。口縁部は短く外傾して阔く。底部は平底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部—底部ヘラケズリ。内面—口縁部ハケ、体部ヘラナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—にぶい赤褐色	4/5。

(3) 小 結

林6号墳では多数の埴輪片を出土しているが、これらは検出状況から林6号墳に伴う遺物とは認定できない。一方、土師器は少量ながら周堀覆土から検出されている。この土師器鉢(図58、写真27)は、破断しながらも一か所に集中して出土しており、林6号墳に伴う遺物と考えられる。このうち土師器鉢は、口縁部内面に明瞭なハケ調整が見られ、少数ながら五領式後半段階に認められる器形であり、この資料に依拠すれば、林6号墳の築造時期は古墳時代前期末葉を前後する段階と推測される。

9 林7号墳

[A地点]

調査期間 平成5年8月31日～平成5年9月21日

調査面積 220㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[B地点]

調査期間 平成5年10月27日～平成5年11月17日

調査面積 120㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[C地点]

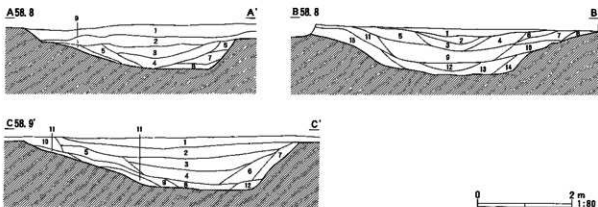
調査期間 平成9年2月24日～平成9年3月17日

調査面積 230㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備 考 同一調査区内で林6号墳の周堀を検出 [林6号墳C地点]



林7号墳C地点土層説明【A-A'】

- 1 灰褐色土 As-Aを含みざらつく。石材、埴輪片を含む。
- 2 暗褐色土 石材、埴輪片を含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 褐色土 ロームブロック、黒色土をブロック多量に含む。
- 9 黄褐色土 ロームブロック、黒色土をブロック多量に含む。

- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 11 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。
- 12 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 13 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 14 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。
- 15 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。

林7号墳B地点土層説明【B-B'】

- 1 黒灰褐色土 起眼不詳のバミスを含みざらつく。暗褐色土ブロックを少量含む。
- 2 黒灰褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。
- 3 暗灰褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む、暗褐色土ブロックを多量に含む。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロック、暗褐色土ブロックを多量に含む。
- 6 暗灰褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。

林7号墳A地点土層説明【C-C'】

- 1 黒灰褐色土 起眼不詳のバミスを含みざらつく。
- 2 黒灰褐色土
- 3 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 5 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 褐色土 ロームブロックを露降り状に含む。
- 11 黄褐色土 ロームブロックを露降り状に含む。周溝底部崩壊上。
- 12 黄褐色土 ロームブロックを露降り状に含む。

図59 林7号墳土層断面図

(1) 遺構

本庄市大字小島地内において、中心をX=27,750、Y=-59,830付近におく。周囲には北側に林6号墳、南西側に林8号墳が存在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によって初めて所在が判明した。長径30m、短径25mを測る北東—南西方向にやや長い方墳で、北東側から西側にかけての墳丘と周堀の一部を検出している。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態であった。埋葬施設の痕跡も認められない。

周堀は墳丘に沿って長方形に巡る。周堀幅は地点により異なり、確認面で4.2~6.8mを測る。周堀

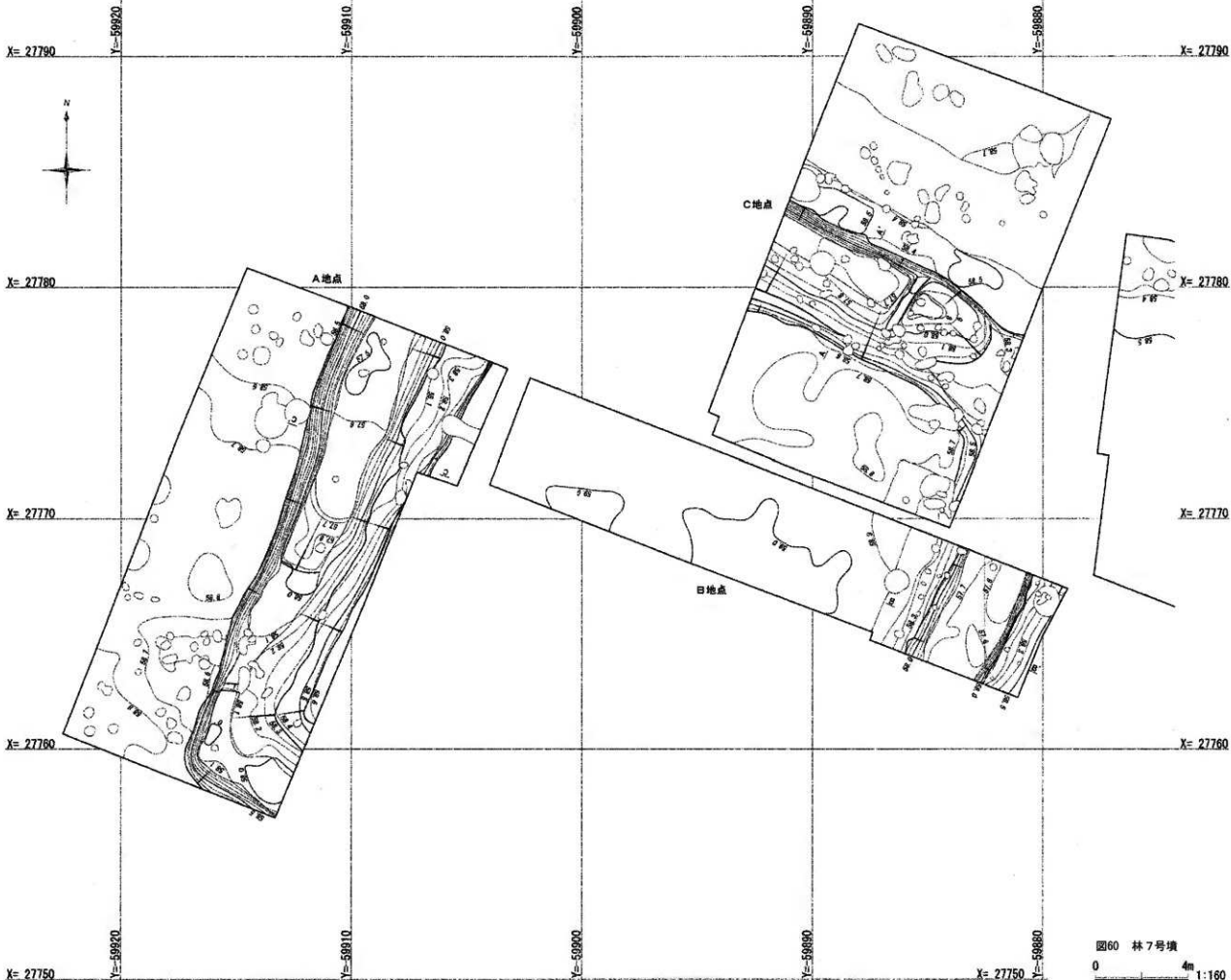


図60 林7号墳
0 4m 1:160

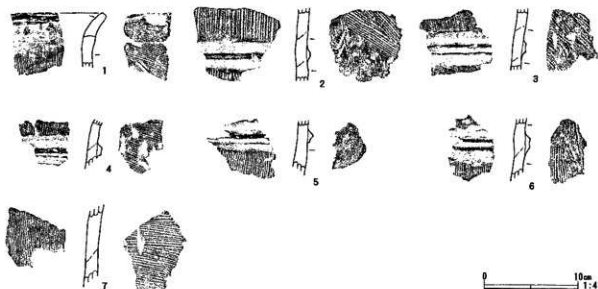


図61 林7号墳出土円筒埴輪実測図

底面には各所に段差が見られる。周堀立ち上がりの角度は墳丘側が緩やかであるのに対し、外側は急傾斜をなしている。確認面からの深さは90~120cmを測る。

周堀覆土は上層に灰褐色系、下層にロームブロックを多量に含む褐色系の土層が堆積している。各地点とも1層にはAs-Aあるいは起源不詳のパミスの混入が認められる。Hr-FAの堆積は確認できない。

(2) 遺物

遺物は表土および周堀覆土上層から少数の埴輪片を出土している。周堀覆土中位以下からの遺物は皆無の状態、本来、林7号墳に伴う資料は存在しないと考えられる。

a. 埴輪

円筒埴輪 [1~7] (図61、写真29)

検出した円筒埴輪はすべて破片資料で、全体の段構成、各段の幅等の詳細は不明である。

外面調整は一次調整に伴う縦位のハケのみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位または斜位のハケおよびナデによる。突帯は断面形が崩れた台形を呈するものと三角形を呈するものがある。透孔の確認できる個体は存在しない。

胎土はほとんどの個体に角閃石安山岩を含む。海綿骨針の混入するものは認められない。焼成は個体に関係なく総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。色調はにぶい橙色、橙色、ないし明赤褐色を呈する。

形象埴輪 [1~3] (図62、写真29)

人物 [1] (図62、写真29)

1は本体から脱落した人物埴輪の裾部である。調整は縦位のハケののち端部に横位のナデを加えている。裏側は剝離面となっている。胎土には角閃石安山岩粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

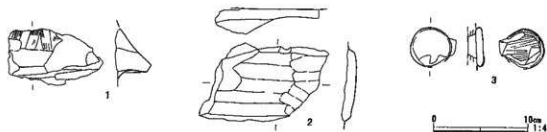


図62 林7号墳出土形象埴輪実測図

器種不明 [2～3] (図62、写真29)

2は円筒状の本体から脱落した板状の部品である。調整は横位および斜位のナデで、裏側は剝離面となっている。胎土には角閃石安山岩粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

3は円板状の部品で、裏側には本体の一部が残る。円板部の調整はナデ、本体裏面の調整はハケである。胎土には角閃石、白色粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

(3) 小 結

林7号墳では少量の埴輪片を出土しているが、これらは表土および周堀覆土上層からの出土であり林7号墳に伴う遺物とは認定できない。周堀中層以下の出土遺物は皆無の状態であるが、旭・小島古墳群内では年代の判明する他の方墳が古墳時代前期後葉から中期初頭までの時期に限定されることから、林7号墳築造時期も古墳時代中期初頭以前に遡ると考えられる。

10 林8号墳

[A地点]

調査期間 平成5年6月4日～平成5年7月22日

調査面積 130㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[B地点]

調査期間 平成5年9月26日～平成5年10月19日

調査面積 300㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

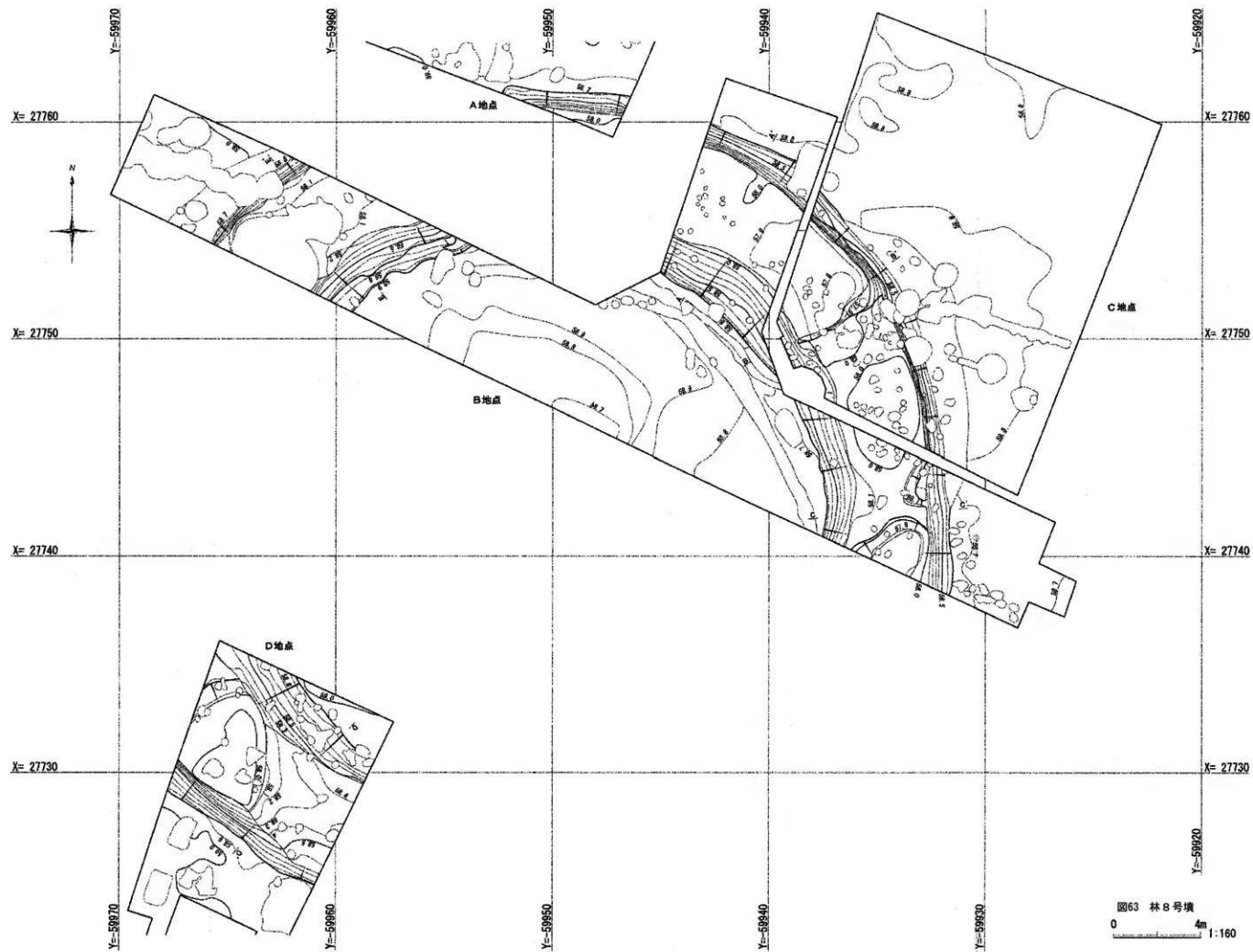
[C地点]

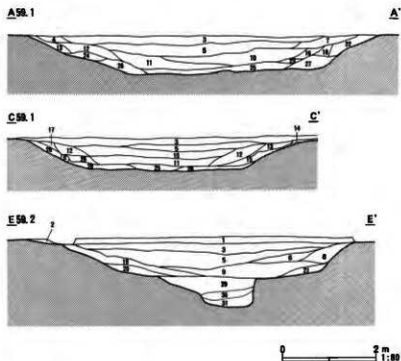
調査期間 平成7年3月1日～平成7年3月29日

調査面積 240㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司





林8号墳B地点土層説明【A-A'・C-C'・E-E'】

- | | | | |
|----------|-----------------------------|----------|--|
| 1 暗灰褐色土 | 起層不詳のバミスを含む。 | 19 褐色土 | ロームブロックを多量に含み、黒色土ブロックを少量含む。 |
| 2 黒灰褐色土 | 暗褐色土ブロックを多量に含む。 | 20 黄褐色土 | ロームブロック、礫(径5~40mm)を多量に含む。 |
| 3 黒灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。 | 21 黄褐色土 | ロームブロックを間隔り状に含む。 |
| 4 暗灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。 | 22 黄褐色土 | ロームブロックを間隔り状に含み、礫(径5~20mm)を少量含む。 |
| 5 暗灰褐色土 | 暗褐色土ブロックを多量に含む。 | 23 黒灰褐色土 | ロームブロックを間隔り状に含む。 |
| 6 灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。 | 24 暗灰褐色土 | ロームブロック、礫(径5~20mm)を少量含む。 |
| 7 灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | 25 黄褐色土 | ロームブロックを間隔り状に含み、礫(径5~40mm)を少量含む。 |
| 8 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | 26 明黄褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |
| 9 灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。6層より明るい。 | 27 暗褐色土 | ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。 |
| 10 灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。9層より明るい。 | 28 黄褐色土 | ロームブロックを間隔り状に含み、黒色土ブロック、礫(径5~20mm)を少量含む。 |
| 11 暗灰色土 | ロームブロックを多量に含む。 | 29 暗灰褐色土 | ロームブロック、礫(径5~30mm)を多量に含む。粘性強。 |
| 12 暗灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。11層より明るい。 | 30 暗灰褐色土 | ロームブロック、灰色粘質土ブロック、礫(径5~40mm)を多量に含む。粘性強。 |
| 13 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含み、黒色土ブロックを少量含む。 | 31 灰褐色土 | ロームブロック、灰色粘質土ブロック、粗砂礫(径5~40mm)を多量に含む。 |
| 14 黒灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | | |
| 15 暗褐色土 | ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。 | | |
| 16 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | | |
| 17 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含み、黒色土ブロックを少量含む。 | | |
| 18 褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | | |

図64 林8号墳土層断面図(1)

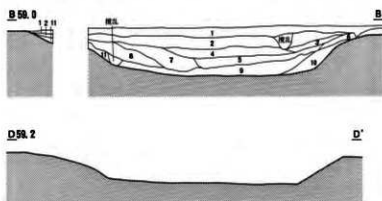
【D地点】

調査期間 平成11年4月12日～平成11年4月30日

調査面積 172㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕



林8号墳C地点土層説明 [B-B']

- | | | | |
|---------|------------------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 起源不詳のパミスを含む。 | 7 暗褐色土 | ロームブロック、暗褐色土ブロックを多量に含む。 |
| 2 黒暗褐色土 | 起源不詳のパミスを含む。 | 8 褐色土 | ロームブロック、暗褐色土ブロックを多量に含む。 |
| 3 暗灰色土 | ロームブロックを多量に含み、暗褐色土ブロックを少量含む。 | 9 暗黄褐色土 | ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。 |
| 4 暗灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | 10 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 5 灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | 11 黄褐色土 | ローム粒子小型ロームブロック難降り状を含む。 |
| 6 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | | |

図65 林8号墳土層断面図②

(1) 遺 構

本庄市大字小島地内において、中心をX=27,785、Y=-60,045付近におく。周囲には北西側に万年寺つつじ山古墳、北東側に林7号墳が所在する。地元住民の証言によれば、林8号墳はかつては「高山」と呼ばれ、万年寺八幡山古墳と同程度の高さを有する墳丘が見られたという。調査着手の時点では、墳丘盛土を完全に失っており、埋葬施設に関する伝承も残されていないが、調査の結果、直径30mを測る、やや大形の円墳であることが判明した。墳丘の立ち上がりに見る平面設計は整円を描き、墳丘北西側には周堀の掘り方と墳丘斜面とを画する傾斜変換線が認められる。

周堀は墳丘に沿ってほぼ整円に巡る。堀幅は南東側で狭く、確認面で5.6m、北西側では広く、同じく確認面で約7.0mを測る。周堀底面には緩やかな起伏があり、また、北東・東・南西側のそれぞれ1箇所に段差が認められる。東側の立ち上がり際にはステップ状の掘り残しが見られる。確認面からの深さは70~150cmを測る

周堀覆土は上層に灰褐色系、下層にロームブロックを多量に含む褐色系の土層が堆積している。各地点の1層には起源不詳のパミスの混入が認められる。Hr-FAの堆積は確認できない。

(2) 遺 物

遺物は周堀覆土から少量の土師器を出土している。分布状態は散漫であるが、B地点の墳丘東側からC地点にかけてやや集中する傾向を認める。埴輪の出土は皆無であることから、林8号墳には埴輪は樹立されていなかったと考えられる。

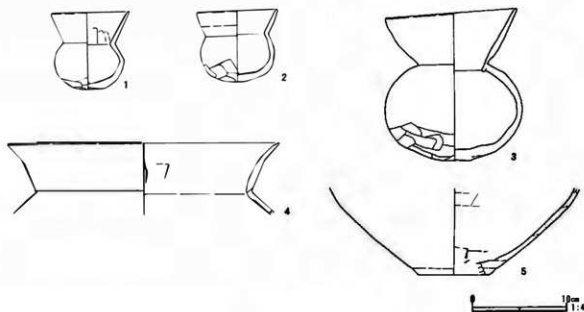


図66 林8号墳出土土器実測図

林8号墳出土土器観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 8.0 底径 2.0 器高 8.1	体部は膨らみ、口縁部は直線的に外傾して開く。底部は小さな上げ底。	外面一口縁部ココナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部上位～中位ナデ。内面一口縁部ヘラナデ・指ナデ、体部～底部指ナデ。	石英・角閃石 内外一橙色	4/5。
2	土師器 埴	口径 (8.4) 底径 一 器高 7.5	体部は膨らみ、口縁部はわずかな丸みを持ち外傾して開く。底部は丸底。	外面一口縁部ココナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部上位～中位ナデ。内面一口縁部ココナデ、体部～底部ナデ。	片岩・石英・チャート 内外一橙色	3/4。
3	土師器 埴	口径 13.7 底径 3.1 器高 15.5	体部は大きく膨らみ、口縁部は内彎気味に開く。底部は粘土を付加して平底をつくる。	外面一口縁部ココナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部上位～中位ナデ。内面一口縁部ココナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一橙色	口縁部の1/5を欠損。
4	土師器 甕	口径 (29.0) 底径 一 器高 一	外反して開く口縁部。	外面一口縁部ヘラナデ。内面一口縁部ヘラナデ。	片岩・石英・チャート 内外一赤褐色	口縁部1/3。
5	土師器 甕	口径 一 底径 (7.6) 器高 一	丸みを持って立ち上がる胴部。	外面一胴部ナデ。内面一胴部ヘラナデ。	片岩・石英・チャート 内外一赤褐色	胴部下位～底部片。

a. 土器

土師器 [1～5] (図66、写真29)

埴 [1～3] (図66、写真29)

1・2は小型の埴である。1はくぼみ底で、丸みをもつ体部から、口縁部は外傾して直線的に開く。2は丸底で、同じく丸みをもつ体部から、口縁部は外傾しつつ、やや丸みをもって短く開く。調整は全体にナデで、体部下半にヘラケズリを残す。胎土にはともに石英を含むが、1には角閃石、2には片岩が含まれる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

3は大型の埴である。底部は平底で、体部は球状に膨らみ、口縁部は内彎気味に大きく開いて立ち上がる。調整は全体にナデで、体部下半にヘラケズリを残す。胎土には石英とともに白色粒・黒色粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

甕 [4・5] (図66、写真29)

4は口縁部の破片で、「く」の字状に外反する。調整は内外面ともヘラナデである。5は底部から胴部下半の破片である。調整は外面がナデ、内面ヘラナデである。4・5とも、胎土には片岩・石英を含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

(3) 小 結

林8号墳では少量ながら周堀覆土から土師器埴・土師器甕を出土している。とくに土師器埴は遺存状態の比較的良好な資料であり、林8号墳に伴う遺物と考えられる。これらの土師器埴については、詳細な時期の特定が難しいが、古墳時代中期のうちにあることは確定的であり、林8号墳の築造時期も同様の段階と推測される。

11 林1号土器棺

(1) 遺 構

林1号土器棺は、本庄市大字小島字林77にあり、X=27,765、Y=-59,936に位置する。平成6年1月10日から同年1月28日まで行なった区画整理事業地内の区6-17号線の道路建設に伴う発掘調査(調査面積155㎡、調査担当 佐藤好司)により検出した遺構である。同地点の調査は、道路幅の調査であり、1号土器棺以外には遺構は見られない。最も近接した古墳は、林8号墳(万年寺高山古墳)で、土器棺から約8m離れた南側を同古墳の周堀がめぐっている。近接する位置から見て、同古墳と何らかの関係がある遺構と見るのが自然であるが、周辺一帯悉皆調査がなされているわけではないため、後述する西側の2・3号土器棺や周辺古墳との関係などについては、今後の検討に委ねる他ない。遺構は、土坑とその中に埋置された入れ子になった壺からなる。残存状態は良好であるが、遺構検出時に、棺身(土器棺本体)の大型壺の胴部の一部を欠いてしまった。

土坑の平面形は、南西半2辺がやや長い隅の丸い菱形であり、北東-南西の対角線を長軸と見れば、長軸長190cm、短軸長178cmである。長軸方位は、N-30°-Wである。中央が深く、中間に段をもつように掘り込まれており、壁にはかなり不規則な凹凸が見られ、傾斜も一様ではない。中央最深部での深さは、現存60cm前後である。

土器棺を構成する土器は、棺身の大型壺1個体(図71:1)、棺身の底に敷かれ、また口縁部に重ね合わされた類似の大型壺1個体(図72:2)、口縁部から挿入された完形の壺1個体(図72:3)、棺身の口頸部に仮面のように被せられた壺底部1個体、3の完形壺の口縁部を覆って被せられた壺底部1個体(図72:4)の5個体である。すべて壺からなる文字通りの壺棺である。

図70は、調査の経過に従い、組み合わされた壺を順を追って露出させてゆく階梯(図70:A→D)を図化したものであるが、ここでは、棺身が設置されたところから始まる一連の土器棺埋置過程をたどって説明を加える。ただし、調査時点で破片すべてに個別番号を付していないため、個体識別が必ずしも十全ではないことを付言しておきたい。

まず、掘り上げられた土坑底に土が入れられ(図68:35・36層)、ある程度平らに均された後、棺身の大型壺1が設置される。胴部中位を中心とする割れ口の穴を下にして棺身は置かれたが、その大穴は、あらかじめ内面を上にした大型壺2の胴部大型片4枚で塞がれたようである。棺身は、ほぼ土

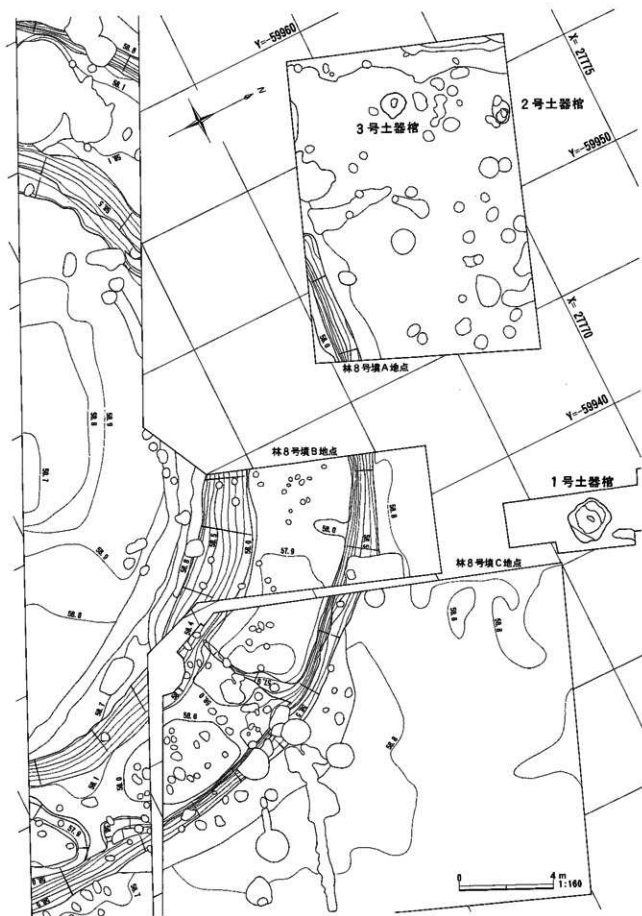


图67 林1~3号土器棺

坑の対角線上に置かれ、中心線はおおよそN-32-Wを指す。また、棺身の中心線が設置面に対し23°前後上を向くようにすえられている。これにより割れ口を下に、胴部がドームのようになって斜め上に開口した棺身が整えられたことになる。棺身内への何らかの埋葬行為が行なわれたとすれば、この段階であろう。棺身の周囲があらかた埋められたのは（図68：15～31層）、この段階と推定される。

続いて大型壺2の口縁部片が、設置された大型壺1の口縁部外側にあてがわれ、壺3で棺身の口が塞がれ、棺身内はほぼ閉塞された空間となる。大型壺2は、大型壺1より口径が小さいから、大型壺2の口縁部は、割ってから用いられたと見られる。また、大型壺2・壺3は、棺身と組み合わせればかなり不安定な状態になるから、この段階にも裏込めとして土が詰められたはずである（図68：14層）。棺身の口頸部に壺底部が上から被せられ、棺身の口からはみ出た壺3を覆って壺底部4が被せられる。これらにより棺身が閉塞されただけでなく、壺3の口も閉ざされることになる。ただし、壺3の底部は、調査時には大型壺1の中に落ち込んでいたようである。一部を欠く他ほぼ完形である点で大型壺1と壺3とは共通し、壺底部4は蓋としては、直接壺3の口を封じていることからすれば、壺3は単に棺身の口の栓や詰め物ではないのかもしれない。さらに土坑が埋め土で満たされ（図68：4～13層）、土器棺の埋置が完了する。

棺身内の覆土は、3層に分けられる。大型壺1の胴部内に転落した破片より上には、As-Aを含む灰褐色土、それより下位の、底に敷かれた大型壺2の胴部片との間、その胴部片と棺身との間には、ともにロームの多寡の異なる暗褐色土が堆積していたとされる。骨片や玉類などは検出できなかった。

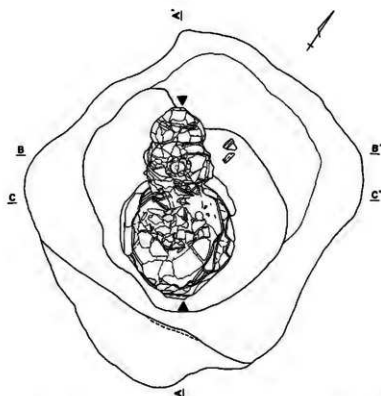
(2) 遺物

土器棺を構成する5個体の土器の内、4個体を図化した（図71・72、写真30）。棺身口頸部に上から被せられた壺は、所在不明のため図化することができなかった。

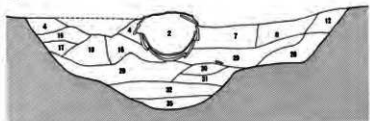
棺身の大型壺1は、胴部を欠いている。欠失部分は、図70（D）で胴部の割れ口に囲まれた範囲で、頸部近くから底部に及ぶ。意図的に打ち欠かれたものと思われ、割れ口は磨耗していない。この部分に接合する破片が見られないことから見て、胴部が打ち抜かれ、割れた破片が取り去られ、この場に持ち込まれたのであろう。また、口縁端部も打ち欠かれている。端面はわずかに1箇所2～3cmの範囲が残るのみで、その部分以外は一律に打ち欠かれ、割れ口がそのまま削ぎ状になっている。以上の欠失部分以外は、ほとんど欠ける部分は見られない。

器形全体大きさの割りには均整がとれており、歪みも少ない。端部に平坦面を有し、口縁部下端には断面三角形の突帯が付されている。口縁部の屈曲部は、外反する下半の粘土帯内面に粘土帯を貼り付け作出され、突帯は、屈曲部に別個に粘土帯を圧着し、強くヨコナデすることで仕上げられている。頸部のヨコナデされた範囲の下端付近には、斜め上に向かう粘土帯の接合面が見える。頸部のくびれ部には、粘土帯による補強がなされている可能性がある。調整は、幅16mm前後の竹筵状の工具によるものか、ナデ痕には部分的に細線状の擦痕が観察できる。底面の縁辺はナデられ、中央は砂粒が多量に露出してザラザラしている。外面には、局所的に2～8mm大の丸い剝落が集中する箇所があり、内面全面に細かな剝落が見られる。

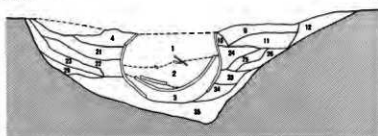
胎土には、大きいものでは1～2cm大に及ぶチャートを所々含み、また片岩片かと思われる黒みがあった光沢のある微小岩片を含む。比較的堅い焼きの土器である。



B58.9

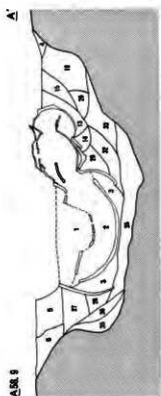


C58.9



林1号土器館土層説明

- 1 灰褐色土 As-Aを主とするスコリアを含む耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。3層より黒褐色土多い。
- 5 暗褐色土 ロームを主とし、ローム小ブロック含む。
- 6 暗黄褐色土 ロームを主とし、ローム中ブロック若干含む。5層より明るい。
- 7 暗褐色土 ローム粒を霏降り状に含む、黒色土混じる。



A58.9

0 50m 1:20

- 8 暗褐色土 ローム粒を霏降り状に含む、黒色土混じる。7層より明るい。
- 9 暗灰褐色土 ローム粒を霏降り状に含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒を多く含む、ローム小ブロック含む。
- 11 暗褐色土 ローム粒を霏降り状に含む。9層より明るい。
- 12 暗褐色土 ローム粒を含み、黒色土混じる。8層より明るい。
- 13 暗褐色土 ローム粒を霏降り状に含む。
- 14 暗黄褐色土 ロームを主とし、黒色土を含む。
- 15 黒褐色土 ローム粒を霏降り状に含む、暗褐色土ブロックを含む。13層より暗い。
- 16 暗褐色土 ローム粒を霏降り状に含む。4層より暗い。
- 17 暗黄褐色土 ロームを主とし、黒色土ブロックを含む。
- 18 暗褐色土 ローム粒を霏降り状に含む、ローム小ブロックを含む。

図68 林1号土器館平面図および土層断面図

- | | | | |
|----------|---------------------------------------|----------|---|
| 19 黒灰褐色土 | ローム粒を含む。4・15・16・18層より暗い。 | 28 暗黄褐色土 | ロームを主とし、ローム小ブロックを含む。5層より明るく、27層より暗い。 |
| 20 黒褐色土 | ローム粒を霜降り状を含む。15層より明るい。 | 29 暗黄褐色土 | ロームを主とし、黒色土ブロックを含む。 |
| 21 暗褐色土 | ローム粒・ローム小ブロックを霜降り状を含む。4層より明るい。 | 30 暗黄褐色土 | ロームを主とし、黒色土ブロックを含む。29層より明るい。 |
| 22 暗灰褐色土 | ローム粒・ローム小ブロックを霜降り状を含む。 | 31 暗黄褐色土 | ロームを主とし、全体に黒みがかかる。30層より暗い。 |
| 23 暗褐色土 | ローム粒を霜降り状を含む。22層より明るく、29層より暗い。 | 32 暗褐色土 | 黒色土を主とし、ローム粒・ロームブロックを含む。13層より明るい。 |
| 24 暗褐色土 | ローム粒を多く含む。11層より明るく、10層より暗い。 | 33 暗黄褐色土 | ローム粒を主とし、黒色土ブロックを含む。13・14・20・29層より明るい。 |
| 25 黒灰褐色土 | ローム粒を霜降り状を含む。9層より暗い。 | 34 暗黄褐色土 | ロームを主とし、全体に黒みがかかる。 |
| 26 暗黄褐色土 | ローム粒を主とし、黒色土ブロック混じる。7・8・24層より明るい。 | 35 黄褐色土 | ローム粒を主とする。底面直上に堆積した本層は、やや固くしまる。27・34層より明るい。 |
| 27 暗黄褐色土 | ロームを主とし、大小のロームブロックを霜降り状を含む。5・6層より明るい。 | 36 暗褐色土 | ローム粒を主とし、全体に黒みがかかる。5層より明るい。 |

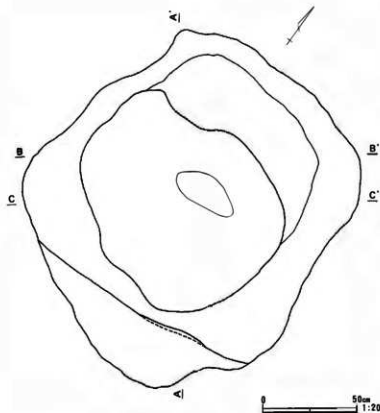


図69 林1号土器棺掘り方平面図

大型壺2は、大型壺1とほぼ同大で、胎土、焼成ともに類似するが、相違点も見られる。口縁部のごく一部を欠き、胴部は1/3～1/2前後残存する。土器棺としては、胴部片すべてが大型壺1の胴部の大穴を塞ぐ底板のように用いられており、その破片はほとんど皆接合した。つまり、ほぼ現存の遺存状態のまま破片化された後に、土器棺の一部として用いられたのであろう。

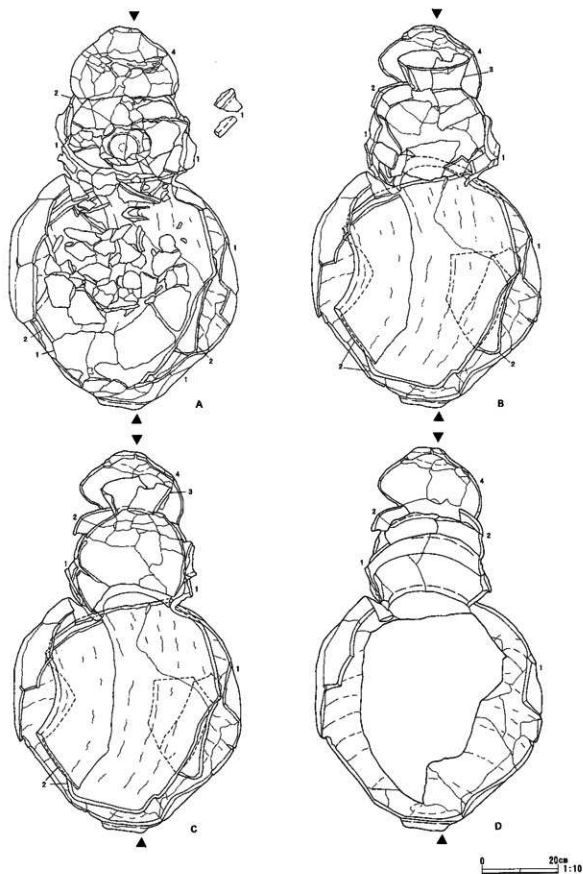


图70 林1号土器棺出土状况图

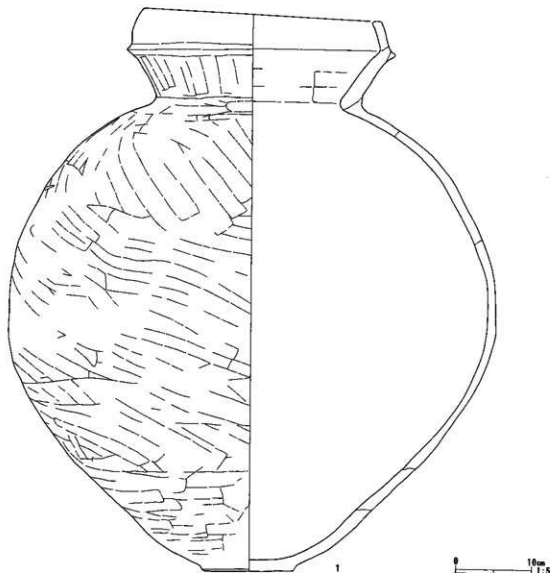


図71 林1号土器棺実測図(1)

林1号出土土器観察表

No	器種	流量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 31.4 底径 12.5 器高 74.5	中位が大きく膨らむ胴部。口縁部下位は外反し、中位に突帯を巡らせ、上位は彎曲気味に内傾する。	外面-口縁部上位ヨコナデ、下位ヘラナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面-口縁部上位ヨコナデ、下位ヘラナデ、胴部は厚紙のため調整不明瞭。	粗粒チャート・白色粒・黒色粒 内外一様な褐色	5/6。 胴部最大径 64.5cm。
2	土師器 甕	口径 28.3 底径 -- 器高 --	大きく膨らむ胴部。口縁部下位は外反し、中位に突帯を巡らせ、上位は彎曲気味に内傾する。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	粗粒チャート・白色粒・黒色粒 内一灰黄褐色 外一褐色	1/3。 胴部最大径推 定65.7cm。
3	土師器 甕	口径 18.4 底径 7.3 器高 36.3	中位に膨らみを持つ胴部。口縁部は外反して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部棒状圧痕。内面-口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい赤褐色	ほぼ完形。
4	土師器 甕	口径 -- 底径 -- 器高 --	膨らみを持つ胴部。底部は上げ高。	外面-胴部中位ヘラケズリ、胴部下位~底部ナデ。内面-胴部ヘラナデ、底部ナデ。	片岩・石英・チャート 内一にぶい赤褐色 外一にぶい褐色	胴部中位~底部。

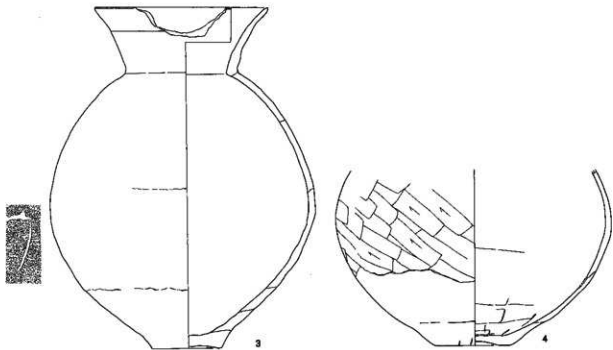
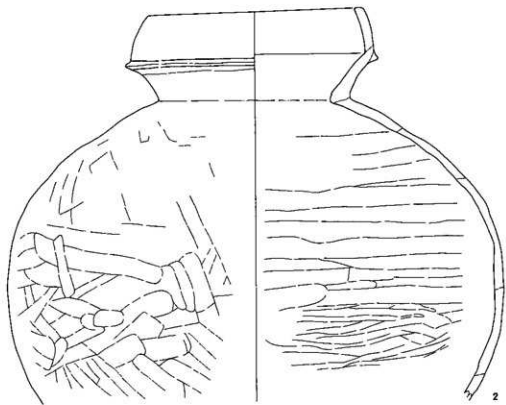


图72 林1号土器棺实测图(2)

端部はやや丸みを帯びるが、端面中央が微妙にくぼむ部分もある。口径は明らかに大型壺1より小さい。さらに比較を続けるなら、口縁部の屈曲部以上は、大型壺1より長く、突帯も突出が鋭角的で、全体に稜角がはっきりしている。口縁部の形態的特徴から見れば、大型壺2より大型壺1の方がくずれていることになる。ただし、口縁部の屈曲部の接合法や突帯の貼り付け方はよく似ている。頸部のくびれ部には、円化したように接合面が見える部分もあるが、粘土の補強帯を加えたことが、接合面と粘土の隆起により明確に認められる部分もある。

外面調整は、ともにヘラナデであるが、大型壺1よりやや丹念にナデつけられ、調整痕が見分けにくい。ナデ痕の擦痕、調整工具の幅などに大きな違いは見られない。

胎土には、大型壺1と同じ光沢のある微小岩片を含み、ごく少数ではあるが、3～5mm大の網雲母岩片かと思われる岩片が認められる。比較的堅い焼きの土器である。

壺3は、口縁部を打ち欠かれている他は完形である。壺4が被せられていたため、土器棺として用いられた際、口縁部が打ち欠かれていたことは確実である。また、割れ口は一切磨耗しておらず、土器棺の一部として埋置されるに際し、口縁部が打ち欠かれたと見てよいであろう。

全体に均整がとれ歪みも少なく、調整も入念である。口縁部外面の調整は、ヨコナデであるが、中に沈線状の調整工具痕が全周する。ヘラナデは幅15mm前後の工具によるもので、口縁部～肩部のヘラナデ痕には、部分的に細線状の擦痕が走る。胴部外面全体に輪痕の凹凸が見られる。胴部下半の外面には、弧状のヘラ痕が認められる。ヘラ痕は、長さ6cm、幅3mm前後、調整痕などに同種の痕跡が見られないことからすれば、いわゆるヘラ記号の可能性もある。焼成良好で、堅い焼きの土器である。

壺4は、胴部上位以上を打ち欠かれている。やはり割れ口は磨耗していない。外面にはナデ、ケズリが加えられているが、同じ工具によるものである。光沢のある岩片など、大小砂粒、小礫をかなり含む堅い焼きの土器である。

壺棺に用いられた土器は、いずれも5世紀代の土器であろう。ほぼ完形の壺(図72:3)は、5世紀代でもやや新しい時期に位置付けられようか。

12 林2号土器棺

(1) 遺構

林2号土器棺は、本庄市大字小島字林76-1にあり、X=27,771、Y=-59,953に位置する。林8号墳(万年寺高山古墳)A地点の発掘調査により検出した遺構である。同地点の調査は、区画整理事業地内の造成工事に伴う調査であり、2号土器棺以外に、3号土器棺及び林8号墳の周堀を検出している。最も近接した古墳は、林8号墳で、2号土器棺から約9.2m離れた南側を同古墳の周堀がめぐっている。現状では、近接する同古墳と何かしら関係のある遺構と見て、無理はない。また、東側16.3mの位置に林1号土器棺、南西側3.7m離れて次に記す林3号土器棺が所在する。古墳との関係のみならず、土器棺が近接して見られることも今後検討する必要がある。

遺構は、土坑とその覆土中から出土した土器からなる。異例の大きさの大型壺から見て、土坑を伴う土器棺であることはまず間違いないが、残存状態も悪く、土器棺とする状況証拠は至って乏しい。

土坑の平面形は、北西-南東方向にやや長い楕円形である。東側、南側の壁の一部は攪乱により破

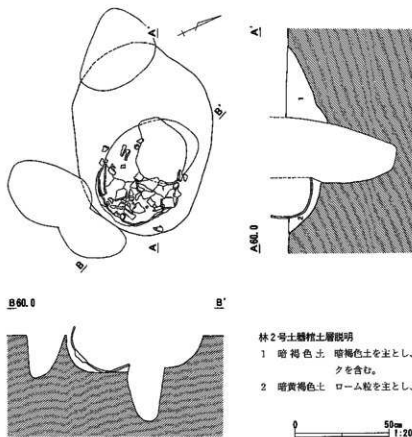


図73 林2号土器棺平面図および土層断面図

され、土坑中央もピット状の攪乱により坑底まで壊されている。長径は推定102cm前後、短径74cm、長軸方位は、およそN-71°-Wである。断面形は中央がやや平らな鍋底形に近く、西側の壁は傾斜がゆるい。現存最深部の深さは20cmである。覆土は、2層に分けられる。大型壺の下に堆積した2層は、土器棺埋置に先立ち坑底に敷かれた土であろうか。

土器棺の棺身と思われる大型壺は、底部を斜め下方に向けた状態で、土坑の南東半で検出した。大型壺の設置角度は、推定で坑底に対し40°前後である。大型壺の胴部中位より上は、設置角度から見て、大半が土坑上端より上になるから、大型壺の大半は、土坑中央の攪乱だけでなく、上面の削平などにより失われたと考えられる。大型壺の中心線は、N-41°-W前後を指すと推定できる。

(2) 遺物

棺身とした1の土器は、大型壺であろう(図74、写真30)。胴部中位以下が長く、特異な器形になりそうである。器厚5、6mmと大きさの割に器厚が薄いこと、外面調整が粗いケズリであることなど、やはり特異である。大小砂粒、小礫を多量に含み、器面には、砂粒移動の痕跡が著しい。比較的堅い焼きの土器である。

残存率が低く時期限定が困難であるが、ケズリが多用される点などから、5世紀後半あるいはその前後の時期の所産と考えておきたい。

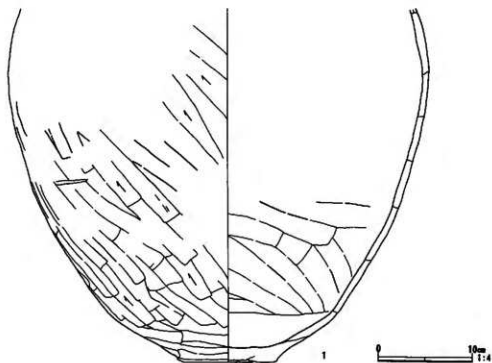


図74 林2号土器棺実測図

林2号出土土器観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 — 底径 10.6 器高 —	中位に膨らみを持つ胴部。	外面—胴部ヘラズリ。内面—胴部ヘラナデ、底部ナデ。	粗粒チャート・白色粒 内外—よい褐色	胴部中位～底部。胴部最大径42.6cm。

13 林3号土器棺

(1) 遺構

林3号土器棺は、本庄市大字小島字林76-1にあり、X=27,767、Y=-59,955に位置する。2号土器棺と同様に、林8号墳（万年寺高山古墳）A地点の発掘調査により検出した遺構である。同地点では、本土器棺以外に、2号土器棺及び林8号墳の周堀を検出している。最も近接した古墳は、林8号墳で、土器棺から約6m離れた南側を同古墳の周堀がめぐっている。また、東側18mの位置に林1号土器棺、北東側3.7m離れて林2号土器棺がある。

遺構は、土坑とその覆土中から出土した大型甕の破片からなる。大型甕から見て、土坑を伴う土器棺であることはまず間違いないであろう。

土坑の平面形は、南東部分がやや突出した不整形に近いが、あるいは1号土器棺のように、角の丸い菱形のような形態になる可能性もある。北西—南東方向での長さは111cm、北東—南西方向での長さは、102cmである。北西—南東方向を長軸と考えれば、長軸方位は、N-55°-W前後になる。断面形は中央がやや深い碗状に近い。現存最深部の深さは23cmである。覆土は、3層に分けられる。大型甕破片が密着していた3層は、上面がほぼ平らである。

土器棺に関連すると推定した大型甕の破片は、内面を上口縁部側を北西に向け、1層中から出土している。土器棺であろうが、土器棺に伴う土坑の下部のみ残ったものと考えられる。

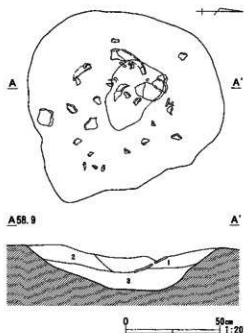


図75 林3号土器棺平面図および土層断面図

林3号土器性土層説明

- 1 暗褐色土: 暗褐色土を主とし、ローム粒・ロームブロックを含む。
- 2 黒灰褐色土: 黒灰褐色土を主とし、暗褐色土を斑状に含む。土器はほとんど本層中より出土。1層より暗い。
- 3 暗褐色土: 暗褐色土を主とし、ローム粒、大小のロームブロックを斑状に含む。1層より明るい。

(2) 遺物

1の土器は、大型壺である(図76、写真30)。混入物などの点で、胎土は、1号土器棺の大型壺(図71:1、図72:2)に似るが、やや硬質に見え、色調が淡い。器面調整は、1号土器棺の大型壺に比べ、ヘラナデが入念で器面がより平滑に仕上げられている。

1号土器棺の大型壺(図71:1、図72:2)との類似を考慮し、5世紀代の土器と考えたい。

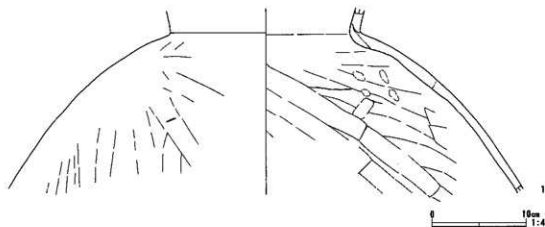


図76 林3号土器棺実測図

林3号出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師壺 壺径 底径 壺高	— — —	胴部上位に丸みを持つ。頸部はやや外傾して立ち上がる。	外面・口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラナデ・指取圧痕。	角閃石・チャート・白色粒内・黄灰色 外にぶい黄褐色	大型品。土器棺の可能性あり。 口縁部下位～胴部上位片。

IV 万年寺八幡山古墳のテフラ分析

1. はじめに

ここでは埼玉県本庄市の万年寺八幡山古墳の堆積物より鍵層となる指標テフラを検出し、堆積物編年の資料とすることを目的とし、テフラ分析を行う。

2. 試料と分析方法

万年寺八幡山古墳周堀より採取された試料を用いて、テフラの検出をおこなった。分析には噴丘の西側に掘られた2つのトレンチから採取された試料を用いた(図4: H1地点 Tr. 1・2)。試料は、北側のトレンチ1からは粗砂から小礫の褐色軽石を含む暗褐色砂(土層番号38)の1試料、南側のトレンチ2からは黒褐色シルト質砂(土層番号33)下部から暗褐色砂混じりシルト(土層番号48)まで5cm間隔で6試料と、黒褐色シルト質砂(土層番号37)の1試料の計8試料で(図7: E-E', F-F'), これらについてテフラの検出および鉱物組成分析をおこなった。

- ① 各試料について自然含水状態で約40g程度秤量し、テフラ分析試料とした。また、乾燥試料重量を求めるために別途試料を10g程度秤量し、乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。
- ② 1φ(0.5mm:30メッシュ)、2φ(0.25mm:60メッシュ)、3φ(0.125mm:120メッシュ)、4φ(0.063mm:250メッシュ)の4枚のふるいを重ね、流水下で電磁式フルイ振とう機を用いて、湿式ふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらし、試料の乾燥重量中における粒径4φ以上の砂粒分の重量%を含砂率とした。
- ③ 4φの残渣(粒径0.125~0.063mm)については、重液(テトラプロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物(有色鉱物)と軽鉱物(無色鉱物)に分離した。
- ④ 分離したそれぞれについて封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。作成した軽鉱物プレパラートを偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、その組成を求めた。軽鉱物は火山ガラスと長石類に分類した。なお、軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、火山ガラスの形態については、町田・新井(2003)の分類基準に従い形態分類をおこなった。重鉱物は一部の試料を用いて観察を行い、カンラン石、斜方輝石(主にし輝石)、単斜輝石(主に普通輝石)、角閃石(ホルンブレンド)、磁鉄鉱、不透明鉱物(その他の不透明粒子を含む)に分類し、計数した。
- ⑤ 連続試料中から火山ガラスの含有量と重鉱物組成を検討し選び出した1試料と、個別に採取した2試料を用いて火山ガラスの屈折率測定をおこなった。測定方法は、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率を測定し、その結果を範囲であらわした。

3. 分析結果

本地域においてテフラ検出分析をおこなった結果を表1、図77・78に示す。

含砂率は、概ね50%強であるが、トレンチ2柱状試料の下部(48層)では30%程度と低い値を示す。

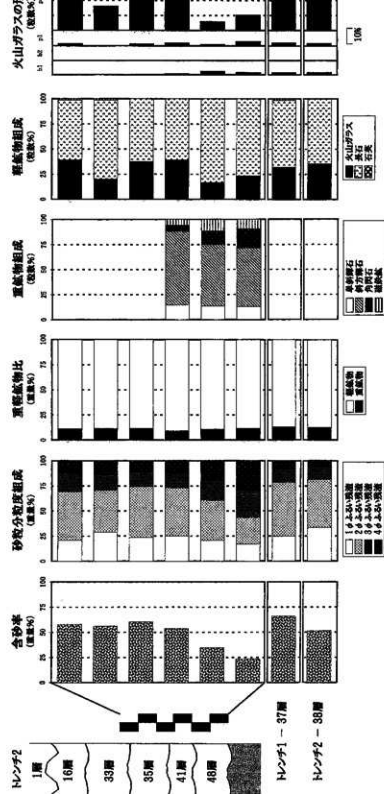


図77 万年寺八幡山古墳における堆積物中の鉱物組成

砂粒分の粒度組成は、ほとんどの試料で2φ残渣がもっとも高く40%以上を占めているが、48層では4φ残渣が高くなり下部では30%を占める。

重軽鉱物比は、87~91%を軽鉱物が占める。

鉱物組成について、軽鉱物は、59~84%が長石で、火山ガラスは19~40%となり、33・35・37・38層で30%以上の値となる。重鉱物は、斜方輝石を主とし、単斜輝石と角閃石、磁鉄鉱を含む。41層と48層を比較すると、下位の48層において角閃石がやや高率に検出され、15%前後の値となる。

火山ガラスの屈折率測定には、トレンチ1の38層、トレンチ2の37層と48層下部の3試料を用いた。その結果、38層では範囲1.5196-1.5323、平均1.5261、37層では範囲1.5210-1.5292、平均1.5253となり、近似した値となる。また48層下部では範囲1.495-1.504、平均1.501となる。

表1 堆積物の鉱物分析結果一覧

トレンチ名	土層番号	含水量 (重量%)	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成 (重量%)				重・軽鉱物組成 (重量%)	
				1φ	2φ	3φ	4φ	重鉱物	軽鉱物
トレンチ2	33・35層	31.9	57.9	20.8	48.5	18.1	12.6	11.1	88.9
	35層中部	33.0	56.3	28.8	41.9	15.3	14.0	11.4	88.6
	35層下部	32.8	60.3	23.9	50.4	14.9	10.9	11.6	88.4
	41層	25.8	53.9	25.2	48.1	14.8	11.8	9.0	91.0
	48層上部	32.6	34.7	20.7	40.1	19.5	19.7	10.9	89.1
48層下部	32.8	23.4	17.0	26.5	26.6	29.9	11.6	88.4	
トレンチ1	38層	15.8	65.8	24.8	54.1	13.1	8.0	13.2	86.8
トレンチ2	37層	5.6	51.3	33.6	47.9	12.1	6.3	12.4	87.6

トレンチ名	土層番号	重鉱物組成(粒数)					重鉱物組成(粒数)			火山ガラス形態分類(粒数)				
		単斜輝石 Cpx	斜方輝石 Opx	角閃石 Hor	磁鉄鉱 Mag	不明 Opq	石英 Qt	長石 Pl	火山ガラ Vg	平板状 bl	繊維状 pl	スポンジ p2	破砕型 cO	
トレンチ2	33・35層	—	—	—	—	—	2	96	63	—	2	42	19	
	35層中部	—	—	—	—	—	2	123	31	—	—	25	6	
	35層下部	—	—	—	—	—	—	120	72	—	2	50	20	
	41層	26	130	11	10	45	—	119	77	1	3	58	15	
	48層上部	27	122	27	23	92	—	118	24	3	1	8	12	
48層下部	22	100	32	16	94	—	123	38	2	4	16	16		
トレンチ1	38層	—	—	—	—	—	3	122	59	2	3	46	8	
トレンチ2	37層	—	—	—	—	—	—	98	54	2	2	35	15	

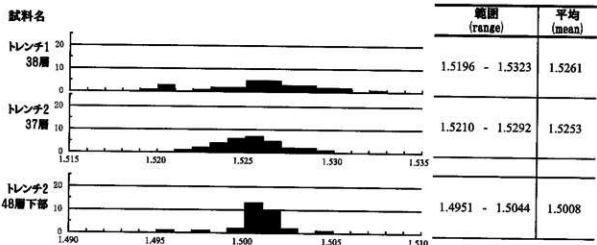


図78 火山ガラスの屈折率測定結果

4. テフラ同定の検討

今回の分析により万年寺八幡山古墳において浅間Bテフラ、榛名ニツ岳渋川テフラが検出された。それらの特徴と噴出起源及び年代について述べる。

【浅間B (As-B)】

37層と38層に認められる軽石を含む堆積物は、その軽石の特徴と火山ガラス屈折率から“浅間Bテフラ (As-B)”に同定・対比される。

浅間Bテフラの特徴は淡灰黄色の軽石を含む。主要な構成鉱物は、浅間火山起源に共通の特徴であるが、斜方輝石と単斜輝石であり、スポンジ状火山ガラスを比較的多く含む。37層および38層に含まれる軽石型火山ガラスの屈折率測定結果は、従来の値（範囲1.524-1.532；町田・新井，2003）と重なることから、浅間Bテフラに同定・対比されるといえる。また、屈折率測定はおこなっていないが、38層の直上と直下にあたる35層と41層においても類似した傾向が確認されることからこれらの層にも浅間Bテフラが含まれているといえる。

浅間Bテフラは群馬県西部の浅間火山を噴出源とし、関東北西部から東北部にまで分布し、完新世に噴出した浅間A～Dテフラの中でもっとも規模の大きな噴火に伴うテフラである。また、噴出年代は古文書記録等の検討から西暦1108年（天仁1年）とされている（新井，1979）。また、この噴火による災害は、上州の田畠が全滅したという記録が残されるほどのものであった（峠岸，1993）。

【榛名ニツ岳渋川テフラ (Hr-FA)】

48層下部に認められるスポンジ状火山ガラスは、その火山ガラス屈折率および角閃石の含有量から“榛名ニツ岳渋川テフラ (Hr-FA)”に同定・対比される。

榛名ニツ岳渋川テフラの特徴は角閃石を多量に含むことであり、48層下部は上位層に比べ、角閃石を比較的多く含んでおり、また火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.4951-1.5044、集中度の良い範囲1.500-1.502、平均1.501となり、従来の値（範囲1.500-1.502；町田・新井，2003）と近似することから、榛名ニツ岳渋川テフラに同定・対比されるといえる。

榛名ニツ岳渋川テフラは群馬県中部の榛名山ニツ岳を噴出源とし、東方向に広く分布し、霞ヶ浦まで達している。その噴出年代は考古遺物、遺跡との関係から古墳時代（6世紀初頭）とされている。

5. まとめ

万年寺八幡山古墳の堆積物を用いて鉱物分析および火山ガラス屈折率測定をおこなった結果、浅間Bテフラと榛名ニツ岳渋川テフラが確認された。しかし両者とも明瞭なテフラ層として検出されず、堆積物中に拡散した形で検出されている。浅間Bテフラは35層から41層にかけて、榛名ニツ岳渋川テフラは48層で検出されている。それぞれの噴出年代は、浅間Bテフラが西暦1108年（天仁1年）、榛名ニツ岳渋川テフラが6世紀初頭の古墳時代である。よって堆積状況を考慮すると、35層から41層は、西暦1108年以後の堆積物であり、48層は6世紀初頭以後の堆積物であることが示される。

引用文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，157，41-52。
町田 洋・新井房夫（2003）「新編 火山灰アトラス」。東京大学出版会，336。
峠岸純夫（1993）東国古代を変えた浅間天仁の噴火。新井房夫編「火山灰考古学」，111-127。古今書院

V 結 語

1 万年寺つつじ山古墳出土の石製模造品の全体組成と個別の様相

(1) 全体の組成と特徴

万年寺つつじ山古墳では、明確な遺構や遺物群に伴わない石製品が14点出土した。層位や出土位置などの出土状況からは必ずしも一括性が保証されているものではないが、遺物分布範囲の大きさや古墳の規模、他の古墳の調査事例などから、万年寺つつじ山古墳の単独の被葬者に対する一括の副葬品であるところでは仮定する。

出土した石製品の内訳は、刀子の形を模倣したもの（以下、刀子などと略記する）が6点、有肩斧が3点、短冊形斧が2点、鎌が1点であり、他に石製の管玉が1点、石製の白玉が1点出土している。

まず、全体を概観すると、ほぼ同様な工具・技法により穿孔や研磨がなされていることがわかるが、実際に手に取り、肉眼観察を行うと、12点の石製模造品は器種を越えて2つのグループに分けることが可能である。1、2、3、8、10の5点をA群とし、他の7点をB群とする。A群は石材の緑色が深く、成形は厚みを持ちしっかりとしている。B群は白色味が強く、成形はいずれも薄く、シャープに作られている。特に、B群の11と12は、石材の紋様や質感などが非常に似通っており、同一の母岩から同時に連続して切り出された可能性が高い。他にも、図や数値データなどでは充分に表現できないが、整形から仕上げに至る作業痕でも、両群には差異が見られる。すなわち、最終工程のミガキ痕と考えられる擦痕の直前工程の、幅・方向ともに揃った整形痕（ノミ痕か）がある程度読みとれるが、その深さはA群がやや深めに残っており、B群ではやや浅い。また、B群の石材には「鬆」とも呼ぶべき部分が目立つが、A群にはほとんど見られない。

一方で、やや別の観点から分類する事も可能である。特に刃先を稜にするか、面取りするかの差を重視すれば、7、9もA群に入れることも出来よう。この場合、微妙な差ではあるが穿孔のサイズでも確かにA群の方が大きい傾向にあり、より工人差に近い分類になるだろう。

大きさや色の深さ、重量感などの点でA群の方が優品と言えないこともないが、製品としての重要度や工人の熟練度とはおそらく無関係であろう。石材に関しても直接比較すれば初めて違いが分かる程度で、一目にB群の石材が劣っているとは言えない。石材の違いは異なった工人が異なった母岩から製作したためだろう。AB両群は異なった作り手によるものであるが、情報を交換しながら作成していると考えられ、工程上も共働した可能性もある。

なお、石材は全て蛇紋岩であり、同じ特徴・性質を持った石材は埼玉県北部および群馬県南部を含む周辺地域で産出している。当地で石材が採集されて、製作されたとしても矛盾は無いが、逆にそれを積極的に支持するデータも現在のところは無い。またAB両群の石材の差は、産地レベルでは有意な差とは言えない。

以下では器種ごとに特徴とその时期的な先後関係について述べ、最後に石製模造品群全体の時期について触れる。

(2) 刀 子

刀子は石製模造品の中でもっとも特徴が豊富であり、かつ出土数の多い器種であるため、従来より多くの研究者によって分類や編年の主要な要素とされてきた。

ここでは、石製刀子の持ついくつかの特徴を選んで、万年寺つつじ山古墳出土の石製刀子の様相を示すと同時に、他の古墳出土例や先学の成果などを参照しつつ、その特徴の時間的変化について述べる。

まず、刃部そのものの表現については、万年寺つつじ山古墳出土例（以下、本例）の6点の刀子はいずれも刀身に鞘が被った状態（鞘が被っているか否かに関しての属性を属性aとする）を表していると考えられる。他の

古墳からの出土例でもほとんどの刀子は鞘を装着したものを表現しており、奈良県佐紀陵山古墳出土例のような鞘表現の無い「抜き身刀子」はもっとも古いものとして位置付けられている。

方形突出部と呼ばれる部分の穿孔（属性b）については本例は一律に横並びに2孔である。また、穿孔方向に関しては、6点とも刃を下向きにして刃先側から見て右→左の向きであり、敢えて「平面的な正面」を想定すると刃が手前向き、刃先が左側となる面であろう。この属性bは明確な時期ごとの特徴は得られていないが、刃側装飾（属性f）の縫目表現が方形突出部の穿孔列にそのまま接続する例もあり、縫目表現の一部である可能性があるが、一般的にはつり下げるための紐通し穴と考えられている。単一古墳から出土した石製模造品であっても多くの様相が見られるため、現在のところ直接時期決定には用いられにくい。

棟の平面的形態（属性c）は本例のいずれもが鞘部全体にわたり直線状である。ただし厳密に観察すると、1はやや反り、2はS字状に波打ち、3～6は比較的精度の良い直線である。他の古墳出土例でも実測図から判断する限りほとんどが直線状であり、反っている例は本市周辺では、本庄市公卿塚古墳や群馬県藤岡市白石十二天塚古墳、高崎市剣崎天神山古墳、高崎市高崎一号墳などで見られるが、いずれも全長がかなり小さいものや、ふくら部分が大いもの（属性eの「先広」）など比較的新しいとされる属性に伴い、その他の特徴からも時間的に後出するものと言えるだろう。模倣元の鞘が一枚の革を折り曲げて縫い合わせたものであると仮定すれば棟面は直線になるため、現物に忠実であれば自然と「直線状」となろう。なお、本例の1は、実測図に表現できる程は反っておらず、直線状に分類される。

棟の調整および断面形態（属性d）では、本例の1～3は主軸方向（刃先方向）のケズリで、断面を馬蹄形状に丸みを持たせるために丁寧に仕上げられている。4～6ははっきりとした平坦面を作り出しており、カドは面取りされている。ここで本例に見られた差は、属性cで述べた微妙な形状差と共に、棟の製作技法の差に関連する可能性がある。他の古墳の出土例として、石製模造品の初期の形態と考えられる茨城県大洗町鏡塚古墳出土例のものも断面馬蹄形であり、平坦面を持つものより古いタイプであると考えられる。属性cと同様、革を折り返した鞘であれば、断面は馬蹄形に近くなることも傍証の一つと言える。

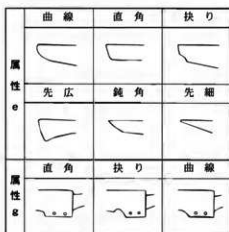


図79 石製刀子属性模式図

ふくらの平面形態(属性e)は図79の分類で、本例の1と3が「曲線」、2が「挟り」、4～6が「直角」にそれぞれ分類される。石製模造品全体では「曲線」のものももっとも多く、時期的にも全時代にわたっている。「先広」や「先細」は石製模造品の初期のものには見られず、特に後者は簡略化された小型石製刀子によく伴う表現である。模式図に挙げた以外でもふくらに鱗状突起を持つものがあり、清喜裕二は奈良県東大寺山古墳出土の家形裝飾付環頭などの時期的な関連性を指摘しており(清喜1998)、石製模造品の初期的な形態の一つであるとしている。「挟り」や挟りによる突起状表現なども、これらに関連する表現であろうか。

鞘の刃側裝飾(属性f)としては本例の6点とも「裝飾無し」である。この属性も属性eと並んで多様な形態が見られ、もっとも目を引く属性である。典型例は鞘の刃側に一切の裝飾表現が無い「無裝飾」タイプであるが、刃に沿って穿孔や線刻のあるもの、縫目表現のあるものは写実性が高く、省略化がなされる以前の古い形態であるとされている。

足元(属性g)は図79の分類で、本例の2が「足元挟り」で、他は「足元直角」として良いだろう。属性gは「直角」と「曲線」が主流形態で、そのうちでは時期的に新しいものほど「曲線」が多くなる様だが、属性fが古いタイプとされる縫目表現であるものの中に、縫目に沿って曲線になっているものもあるため明確な傾向とは言えない。他に挟りを持つものが、万年寺つつじ山古墳のものも含めて存在するが、「直角」にするための工程と「挟り」にするための工程が似た作業であると想定できるため、方形突出部を強調するためのバリエーションとも考えられよう。

柄頭(属性h)の表現は基本的に柄からそのままの形状で終端となるものがほとんどである。本例もいずれも特別な裝飾は見られない。杉山晋作は特に柄の長さを中心的に着目し編年を組んでおり(杉山1985)、柄頭の刃側に小さな挟りのあるものは新しい(杉山III期)としている。また、柄頭に線刻や瘤表現のあるものは古いものと言えるだろう。

鞘と柄の区切り部分(属性i)は、本例ではいずれも沈線が刻まれ、段差などは見られない。属性iに関しては、段差を明瞭に持つもの、線刻で分離するだけのもの、区切りが無いもの、の順で新しくなっていると考えられる。

最後に全長に関しては、本例の1、2が7cm台、3～6が5cm台と見た目では2種に分けられるが、先学の分類では全長9～10cm以上を大型品と呼ぶ場合が多く、そういった点からは6点の全長の散らばりは大きいものとは言えないだろう。

確認のために、万年寺つつじ山古墳出土例について特徴を個体ごとに整理しておく。1、2の組と4～6の組はほとんどの要素が共通している。すなわち、1と2の差は挟りが2カ所入っている点(属性e、g)であり、それ以外の属性は共通している。4～6も上に挙げた9カ所の属性は完全に一致している。一方、3はサイズの点では4～6に近く、ふくらは1、2に近く、稜面の調整は1、2と同じ手法である。3は1、2と4～6の中間的性質を持っていると言える。

(3) 有肩斧

有肩斧は3点出土した。いずれも袋部は柄の差込方向に穿孔されたもので、いずれも穿孔は深い部類ではない。また、紐通し穴などとも呼ばれる横方向の小穿孔もほぼ3点とも同じ形態である。更に、肩の角度なども含めて全体的な形態で言えば、ほぼ同一のものと考えられるが、細部に関しては本章

冒頭の部分でも述べたものも含めて、多少の差異が見られる。いずれの差異も7、9が同じグループで、8のみが異なったものである。ここでも前者をB、後者をAと呼称し、以下、箇条書きで差異を列挙する。①Aの袋部幅はBのそれより細く、刃部最大幅との比率で言えば、Aは0.5に近く、Bは0.6～0.7である。結果としてAの袋部は長く見える効果も持つ。②穿孔の「底」にあたる部分がAはU字状に近いが、BはV字状である。③袋部基部上面の全体における穿孔の大きさの割合がAは大きく、Bは小さい。④Aには穿孔の「底」に小孔がみられる。

以上の4点の差異は必ずしも新古を示すものではないが、③について袋部穿孔の大きさと深さなどに着目した北山峰生は、Bに対してAは古い特徴を持っているとしており(北山2005)、②に関しても手の込んだAからBへの省略化と捉えることも出来るかも知れない。編年的には、袋部の合わせ目表現が無いことから初期のものではないと考えられるが、肩部が緩やかに屈曲する本例のタイプは時間的に幅広く見られるため(たとえば河野2002)、有肩斧だけでは時期決定の根拠とはし難い。

(4) 短冊形斧

短冊形斧は2点出土した。古墳に副葬された鉄器の消長を述べた魚津知克は、短冊形斧は氏の編年の3期を最後にほとんど見られなくなるとしており(魚津2000)、石製の短冊形斧もこれに連動して、農・工具を表現した石製模造品としては比較的早い時期の5世紀初頭頃に消滅するようである。

万年寺つつじ山古墳出土の二つの短冊形斧は形状がはっきり異なっている。10は形状・重量感などから弥生時代石器の太形始刃形石斧を連想させる。主軸方向の厚みの変化はほぼ前後対称であり、刃先の厚さと基部の厚さはほぼ等しい。幅に関しては刃部側がやや幅広になっており、紐通し穴を除けば、この表現がほとんど唯一の前後(刃先)方向を知る手がかりである。

一方11は、10とは全く形態が異なり、刃先部が薄く削られている以外は文字通り楔形の直線的な構成である。共伴関係などから初期型と考えられる富雄丸山古墳の短冊形斧は10に似た太形のタイプであり、10の方がより初現的な形態である可能性がある。

(5) 鎌

鎌は1点出土した。石製模造品の鎌の模倣元となった鉄製の鎌は、5世紀前半頃に直刃から曲刃へと変化する事が知られており(都出1967)、模倣品としての石製模造品においても同様に直刃から曲刃へと変化している。その画期を示す一つの例としては、東京都世田谷区野毛大塚古墳の第3主体部が挙げられる。野毛大塚古墳の第3主体部からは石製と鉄製の鎌形模造品が共伴しているが、鉄製のものは曲刃、石製は直刃である。まさにその変化が進んでいる時期であろうか。白石太一郎は2期と3期の画期を、この曲刃鎌の出現という現象に求めている(白石1985)。また直刃鎌の中でも、背側が直線状の平面長方形タイプと、背面が刃側に曲がり先細になるタイプがあり、前者が先行するとされている。もっとも、古墳時代中期後半とされる本庄市公卿塚古墳でも平面形が長方形タイプの直刃鎌が出土しており、一概には時期決定には利用出来ない。

一般に刃を手前、刃先を左に置いたときに基部が折れ曲がる方向として上側と下側の2種類がある。都出比呂志は本例の様な「下側」の技法を、朝鮮半島より鉄製の曲刃鎌を導入した際に同時に入ってきた「クセ」の様なものであるとするが(都出 前掲)、いずれにせよ、微妙な構造をわざわざはつき

りと模倣しており、注意が必要であろう。

2 万年寺つつじ山古墳の石製模造品の時間的位置付け

前項で器種ごとに特徴を列挙し主要なものに関しては変化の方向を述べた。ここでは、個々の特徴を他の古墳出土品と比較して詳細な編年を組む余裕はないが、先学の成果などを利用しつつ、万年寺つつじ山古墳の石製模造品を時間軸上に位置付けてみたい。

ある特徴を持つ遺物と持たない遺物が、単一の時刻を境に明確に分離できれば、編年上の有効な指標になりうる。もちろんそういった特徴は事実上あり得ないが、その例外が少ない特徴を「強い傾向を持つ」特徴と呼び、例外がやや多いものを「弱い傾向」とする。ここまでに挙げたいくつかの特徴のうち、比較的時期決定に有効なものを選択し、検討していきたい。

まずもっとも強い傾向を持つと考えるのは、石製刀子の出土点数である。古墳時代前期の比較的早い時期には、せいぜい10点以下の石製刀子を副葬するあり方が一般的であり、次第に大量の石製模造品を副葬するようになり、更に多いものでは100点をはるかに越えるケースも出てくる。万年寺つつじ山古墳では、その出土状況から考えれば、もっと多くの石製模造品が副葬された可能性は十二分にあり得るが、本章で検討した属性のあり方がかなり揃っていることから、全体の副葬数はそれ程多くはないと考える。つまり、仮に100点に近い刀子が副葬されたうちの6点がたまたま採取されたたすると、他の古墳の出土例からみて、その特徴はバラバラになるはずである。実際、多数の石製刀子を出土した古墳の刀子群からランダムに6点選んだ場合、これ程似通ったもののみが選ばれる可能性は極めて低い。また、同じ割合でサンプリングされたものであるとすると、弁類や鎌も10点を越える可能性があり、他に全く類例を見ないセットとなる。副葬された石製刀子は多くても20点程度だったのではないだろうか。

同じく強い傾向を持つと考えられる指標として、短冊形斧と平面が長方形タイプの鎌の存在が挙げられる。いずれも5世紀の早い時期までに消失する遺物であり、時期決定に大きな情報を与える。

有肩斧の袋部の合わせ目表現が、9の稚拙な表現以外見られないこと、及び石製刀子の属性aなどから、4世紀に大きく遡ることは無いと考えられる。

また、石製刀子のうち3点が属性dで馬蹄形であり、これは弱い傾向ではあるが、5世紀前半以前のものと考えられる。同じく弱い傾向で言えば、属性eで「先細」や「先広」が無いことも5世紀中頃まで下らない根拠になろう。

他の属性は触れる余裕がないが、以上の簡単な検討から万年寺つつじ山古墳出土の石製模造品の製作年代に関しては、4世紀末～5世紀初め頃、他の編年との比較で言えば、白石編年（白石1985）の2期の初め、清喜編年（清喜1998）の3期の前半、杉山編年（杉山1985）のⅡ期の古相と言えるだろうか。

なお、墳丘盛土の遺存状況などから考えて、これらの石製模造品群は主体部より下方の位置から出土した可能性がある。原位置は不明確であるが、特異な出土状況であることも注意を要する。

(註) 石材の記述に関しては埼玉県立本庄高等学校教諭中村正芳氏に助言を頂いた。また、本章全体にわたる宮内庁書陵部の清喜裕二氏に多くの点でご指摘・ご教示頂いた。記して感謝いたします。

備山古墳 円筒埴輪観察表

法	高さ (cm)				突帯幅 (cm)	突帯形制	透孔径	口縁高	外面調整		内面調整		底面	底面圧痕	胎成色調	残存率	備
	部	第1段	第2段	第3段					第4段	調整	調整	調整					
表	2.0	0.7	1.5x2.9xハク	7本	-	タナナ	-	-	良好 褐色	破片	チャート、磁土の片
裏	-	-	(円)	...	1.5x2.9xハク	6本	-	タナナ	-	-	良好 じょうい褐色	破片	チャート、磁土の片
...	-	-	1.5x2.9xハク	6本	-	タナナ	-	-	良好 褐色	破片	チャート、磁土の片
...	-	-	1.5x2.9xハク	6本	-	ナメナナ	-	-	良好 明赤褐色	破片	チャート、磁土の片
...	-	-	(円)	...	1.5x2.9xハク	10本	-	ナメハク・ナナ	-	-	良好 明赤褐色	破片	チャート、磁土の片
...	-	-	1.5x2.9xハク	8本	-	ナメナナ	-	-	良好 褐色	破片	チャート、磁土の片
...	-	-	1.5x2.9xハク	9本	-	ナメハク・ナナ	-	-	良好 褐色	破片	チャート、磁土の片

円筒埴輪観察表

法	高さ (cm)				突帯幅 (cm)	突帯形制	透孔径	口縁高	外面調整		内面調整		底面	底面圧痕	胎成色調	残存率	備
	部	第1段	第2段	第3段					調整	調整	調整	調整					
表	1.5x2.9xハク	8本	-	ヨコナ	-	-	良好 明赤褐色	破片	片料、チャートを
裏	1.5x2.9xハク	11本	-	ナナ	-	-	良好 褐色	破片	片料、チャートを
...	1.5x2.9xハク	10本	-	ナメハク	-	-	良好 明赤褐色	破片	角礫石山磁土を
...	1.6	0.5	1.5x2.9xハク	10本	-	タナハク・タナ	-	-	良好 明赤褐色	破片	片料、チャートを
...	1.7	0.6	1.5x2.9xハク	10~12本	-	ナメハク・ナナ	-	-	良好 明赤褐色	破片	片岩・白色粘板
...	-	-	1.5x2.9xハク	6本	-	ナナ	-	-	良好 褐色	破片	外面に彫刻あり。
...	-	-	1.5x2.9xハク	12本	-	タナナ・ナナ	-	-	良好 褐色	破片	胎部の片料、チャート
...	-	-	1.5x2.9xハク	14本	-	ナナ	-	-	良好 じょうい褐色	破片	角礫石、白色磁土
...	-	-	1.5x2.9xハク	8本	-	ナメハク・タナ	-	-	良好 明赤褐色	破片	片料、チャートを

法	葉 (m)		吹寄	穿孔	口輪径	外 面 調 整	内 面 調 整			底 部	地 質	色 調	残存率	備 考
	第1段	第2段					第3段	葉 長	葉 幅					
—	—	—	—	—	—	別 葉	ハクモク	基部	—	—	—	—	—	片肉石・白色を
—	—	—	1.8	0.4	円	1葉チチハク	12本	—	チチメハク・チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石・白色を
—	—	—	1.7	0.5	—	1葉チチハク	12本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石・白色を
—	—	—	1.3	0.5	円	1葉チチハク	13本	—	チチメハク・チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	1.8	0.6	—	1葉チチハク	11本	—	チチメハク・チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	2.0	0.5	円	1葉チチハク	9本	—	チチメハク	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	1.9	0.5	—	1葉チチハク	8~9本	—	チチメハク	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	2.1	0.5	円	1葉チチハク	9本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	8本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石・白色を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	8本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	12本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石・白色を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	11本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	12本	—	チチメハク・チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	13本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	9本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	8本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	9本	—	チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	10本	—	チチメハク・チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を
—	—	—	—	—	円	1葉チチハク	10本	—	チチメハク・チチメハク後ナズ	—	—	—	—	片肉石赤山岩を

片肉石赤山岩を

法		量 (cm)		穿孔		口部		外面		内面		底面		形状		色調		残存率		備	
用途	部	第1段	第2段	第3段	直径	形	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	13本	-	ナメハナ	-	-	-	良好	褐色	破片	内院石宝山群衆を		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	13本	-	ナメハナ・ヨコハナ	-	-	-	良好	明赤褐色	破片	内院石宝山出物を		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	10本	...	ナメハナ	良好	褐色	破片	内院石宝山群衆を			
-	-	-	-	-	2.2	1.0	-	-	1.3x2.4x1.4	13本	-	ナメハナ後ナデ	-	-	良好	明赤褐色	破片	新田内野群衆を			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	ヨコハナ	11本	-	ナメハナ後ナデ	-	-	良好	褐色	破片	新田内野群衆を			

円筒埴輪群衆表

法		量 (cm)		穿孔		口部		外面		内面		底面		形状		色調		残存率		備	
用途	部	第1段	第2段	第3段	直径	形	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	9本	-	ヨコハナ・ナメハナ	-	-	-	良好	明赤褐色	破片	片着・チャート土を		
-	-	-	-	-	2.3	0.4	-	-	1.3x2.4x1.4	8~9本	-	ナメハナ・タテハナ	-	-	良好	褐色	破片	内院石宝山群衆を			
-	-	-	-	-	1.5	0.3	(円)	-	1.3x2.4x1.4	13本	-	ナメハナ後ナデ	-	-	良好	明赤褐色	破片	外野田群衆を			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	10本	-	ナデ	-	-	良好	褐色	破片	外野田群衆を			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	12~13本	-	ヨコハナ・ナメハナ	-	-	良好	褐色	破片	角田石宝山群衆を			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	13本	-	ナデ	-	-	良好	褐色	破片	外野田群衆を			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	6本	-	ナメハナ・ナデ	-	-	木目	明赤褐色	破片	角田石宝山群衆を			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3x2.4x1.4	10本	-	ナメハナ・ナデ	良好	褐色	破片	新田内野群衆を			
-	-	-	-	-	1.8	0.4	-	-	ヨコハナ	9本	-	ナデ	-	-	良好	明赤褐色	破片	新田内野群衆を			
-	-	-	-	-	3.4	1.2	-	-	1.3x2.4x1.4	8~9本	-	ナメハナ後ナデ	-	-	良好	褐色	破片	新田内野群衆を			

円筒植翰表

法	量 (cm)		突帯	透孔	口徑	外面	内面		芯部	色澤	高寸	備
	第1段	第2段					第3段	直径				
—	—	—	—	—	3コナ	1次タテハク	10本	ナナメハク	—	良好 明赤褐色	破片	向阿石深山岩を
—	—	—	—	—	3コナ	1次タテハク	9本	ヨコハク・ナメハク	—	良好 褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	—	—	3コナ	1次タテハク	8本	ナナメハク	—	良好 明赤褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	—	—	3コナ	1次タテハク	8本	ナナメハク後ナ	—	良好 明赤褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	1.8 0.5	—	—	1次タテハク	8本	ナナメハク後ナ	—	良好 明赤褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	1.6 0.3	—	—	1次タテハク	8本	タテハク・ナメハク後ナ	—	良好 明赤褐色	破片	外阿石深山岩を 粗粒の片岩・チャートを
—	—	—	1.8 0.4	—	—	1次タテハク	12本	タテハク後ナ	—	良好 褐色	破片	向阿石深山岩を
—	—	—	1.8 0.2	—	—	1次タテハク	9本	ナナメハク後ナ	—	良好 褐色	破片	向阿石深山岩を
—	—	—	—	(U)	—	1次タテハク	13本	ナメ	—	良好 明赤褐色	破片	内阿石深山岩を 片岩・チャートを
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	10本	ナナメハク・ナメ	—	良好 明赤褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	6本	ナナメハク	—	良好 明赤褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	7本	ナメ	—	良好 褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	12本	ナナメハク後ナ	—	良好 褐色	破片	向阿石深山岩を
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	7~8本	タテハク後ナ	—	良好 褐色	破片	片岩・チャートを
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	9本	ナメ	—	良好 明赤褐色	破片	本目石
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	6本	ナナメハク後ナ	—	良好 明赤褐色	破片	本目石 本目石門層を
—	—	—	—	—	—	1次タテハク	7本	ヨコハク・ナメハク後ナ	—	良好 明赤褐色	破片	本目石門層を 片岩・チャートを

①—②—③—④—⑤—⑥—

法	量 (cm)		深さ	穿孔	口径	外周調整	内周調整		断面	地質	色調	残存率	備
	長さ	第1段 第2段 第3段					調整	調整					
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	8本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	10%	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	8本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	—	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	10本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 上い褐色	—	片麻・白色斜紋 結晶片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	8本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 上い褐色	—	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	12本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 上い褐色	—	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	—	1本 タナハク	9本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	—	輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	—	1本 タナハク	11本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	—	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	—	1本 タナハク	12本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	—	輝石系片麻岩が

円筒地輪観表

法	量 (cm)		深さ	穿孔	口径	外周調整	内周調整		断面	地質	色調	残存率	備
	長さ	第1段 第2段 第3段					調整	調整					
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	8本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 赤褐色	—	片麻・チャー・ト全 角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	8本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 赤褐色	—	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	12本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	—	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	11本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	—	片麻・チャー・ト全 角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が
—	—	—	—	—	ココナツ	1本 タナハク	12本 —	ココナツ タナメハク	—	—	良好 褐色	—	角閃石系山岩を主とし、 輝石系片麻岩が

【引用・参考文献】

- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成畿内編』 山川出版社 東京 pp.24-26.
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 『有勝寺北裏遺跡』 有勝寺北裏遺跡調査会 東京.
- 本庄市 1986 『本庄市史』 通史編Ⅰ 本庄.
- 河野一隆 2002 「石製模造品」『考古資料大観』9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器 小学館 東京 pp.331-340.
- 北山峰生 2005 「古墳出土の石製模造品」『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』第54回埋蔵文化財研究集會発表要旨・資料集 第54回埋蔵文化財研究集會事務局 pp.157-180.
- 並木 隆 1976 「7 本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘報告会発表要旨』 埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会 浦和 pp.8-9.
- 南毛古墳文化研究会 2001 『本庄市域における古式古墳調査の成果と課題』第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄.
- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪編年の諸問題」『埴輪の変遷—その普遍性と地域性—』 北武蔵古代文化研究会 pp.63-69.
- 1986 「埼玉における前期古墳の形成」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室 浦和 pp.204-207.
- 埼玉県 1982 「下野堂(しものどう)古墳群」『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳 浦和 pp.674-677.
- 埼玉県教育委員会 1956 『古墳調査報告書』第1編 本庄市及び児玉郡古墳調査 浦和.
1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』 浦和.
- 清喜裕二 1998 「初期農具形石製模造品の基礎的研究—大形石製刀子を中心として—」『古代』105号 早稲田大学考古学会 東京 pp.75-100.
- 白石太一郎 1985 「袴まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 佐倉 pp.79-114.
- 菅谷浩之 1976 a 「下野堂遺跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.59-62.
1976 b 「有勝寺北裏埴輪窟跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.100-103.
1976 c 「赤坂埴輪窟跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 P.103.
- 1984 「北武蔵における古式古墳の成立—児玉地方からみた北武蔵の古式古墳—」児玉町史資料調査報告 古代第1集 児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会 児玉郡児玉町.
- 杉山晋作 1985 「石製刀子とその使途」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 佐倉 pp.115-133.
- 都出比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13巻3号 考古学研究 岡山 pp.36-51.
- 魚津知克 2000 「鉄製農具副葬についての試論」『第7回鉄器文化研究集會 表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会 pp.105-120.
- 山川守男・盛 敬彰・金子彰男・中村正明・橋本雅夫・松本和弘 1981 「新発見の埴輪窟跡群」『いぶき』12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 本庄 pp.29-40.
- 早稲田大学有勝寺北裏遺跡調査会 1979 『埼玉県本庄市前山有勝寺北裏遺跡発掘調査概要』 東京.

写 真



万年寺八幡山古墳 墳丘断面 【昭和52年撮影・南西から】



万年寺八幡山古墳 南東端墳丘断面 【昭和52年撮影・南西から】



万年寺八幡山古墳 石棺断面 【昭和52年撮影・南西から】

写真2



万年寺八幡山古墳E地点 墳丘・周堀検出状況【北から】



万年寺八幡山古墳E地点 周堀検出状況【西から】



万年寺八幡山古墳E地点 周堀検出状況【西から】



万年寺八幡山古墳G1地点 墳丘調査区全景〔西から〕



万年寺八幡山古墳G1地点 墳丘調査区・遺構確認状況(1)〔南から〕



万年寺八幡山古墳G1地点 墳丘調査区・遺構確認状況(2)〔南から〕

写真4



万年寺八幡山古墳 石棺検出状況【南西から】



万年寺八幡山古墳 石棺・鉄器検出状況【南東から】



万年寺八幡山古墳H1地点 調査区全景 [南東から]



万年寺八幡山古墳H1地点 墳丘・周堀検出状況 [北西から]



万年寺八幡山古墳H1地点 トレンチ2 周堀検出状況 [東から]

写真6



万年寺つつじ山古墳A地点 調査区全景【南東から】



万年寺つつじ山古墳A地点 墳丘断面【西から】



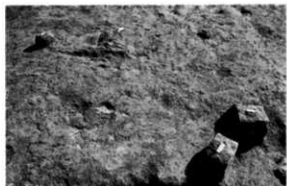
万年寺つつじ山古墳A地点 墳丘断面【南東から】



万年寺つつじ山古墳F地点 調査区全景 [北から]



万年寺つつじ山古墳F地点 石製模造品検出状況(1) [北東から]



万年寺つつじ山古墳F地点 石製模造品検出状況(2) [北西から]



万年寺つつじ山古墳F地点 石製模造品検出状況(3) [南東から]

写真8



林1号墳A地点・2号墳C地点 調査区全景【北東から】



林1号墳A地点 周廻検出状況【南から】



林1号墳A地点 周廻検出状況【北東から】



林2号墳A地点 調査区全景〔南西から〕



林2号墳A地点 調査区全景〔北西から〕



林2号墳B地点 海堀検出状況〔南東から〕

写真10



林2号墳C地点 周堀検出状況【北東から】



林2号墳C地点 周堀検出状況【南東から】



林2号墳D地点 調査区全景【南東から】



林3号墳A地点 周堀検出状況【南東から】



林3号墳A地点 周堀検出状況【北西から】



林4号墳A地点 周堀検出状況【南西から】

写真12



林4号墳A地点 周堀検出状況 [北東から]



林4号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]



林5号墳A地点・6号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]



林6号墳B地点 周堀検出状況【北西から】



林6号墳B地点 周堀検出状況【南東から】



林6号墳C地点・7号墳C地点 周堀内遺物検出状況【南西から】

写真14



林6号墳C地点 調査区全景【西から】



林7号墳A地点 周辺内遺物検出状況【南西から】



林7号墳B地点 調査区全景【南東から】



林8号墳B地点 調査区全景【西から】



林8号墳B地点 周壙検出状況【北東から】



林8号墳B地点 周壙検出状況【南東から】

写真16



林8号墳C地点 調査区全景 [北東から]



林8号墳C地点 周堀内遺物検出状況 [北から]



林8号墳C地点 周堀内遺物検出状況



林1号土器棺核出状況（1）



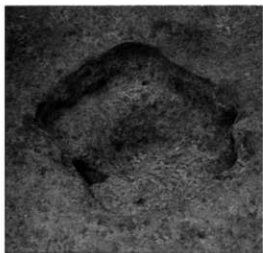
林1号土器棺核出状況・土層断面【南西から】



林1号土器棺核出状況（2）



林1号土器棺核出状況（3）



林1号土器棺・完掘状況【南西から】

写真18



林2号土器棺検出状況〔南西から〕



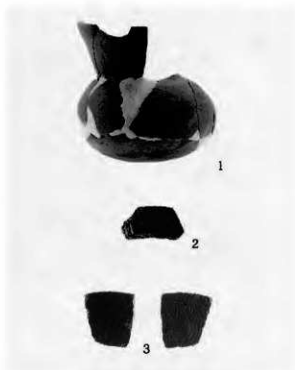
林2号土器棺完掘状況〔南西から〕



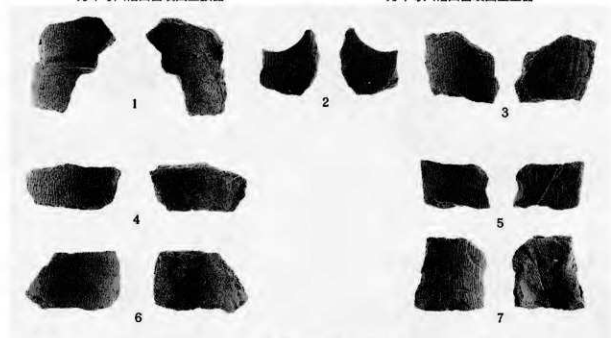
林3号土器棺土層断面〔西から〕



万年寺八幡山古墳出土鉄器



万年寺八幡山古墳出土土器



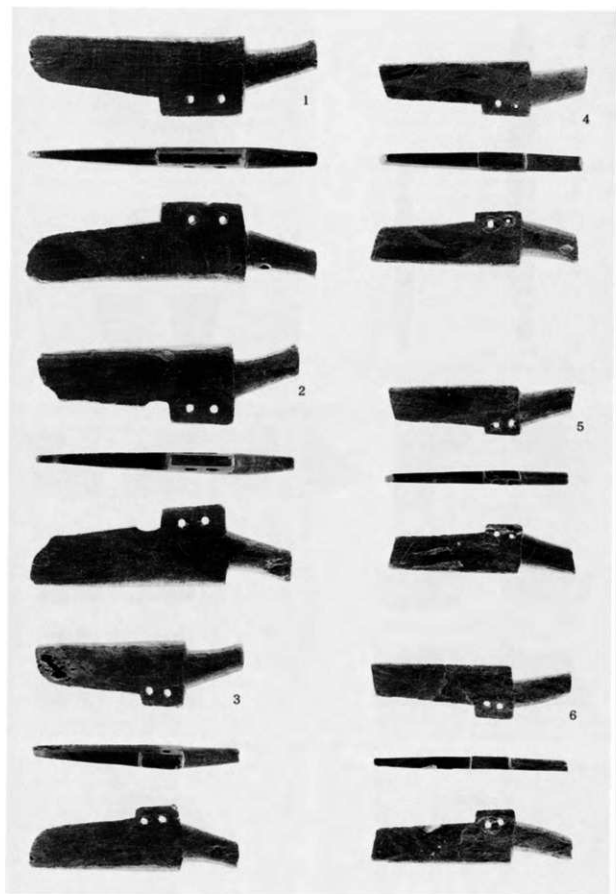
万年寺八幡山古墳出土円筒埴輪



万年寺八幡山古墳出土耳環



万年寺つつし山古墳出土土器

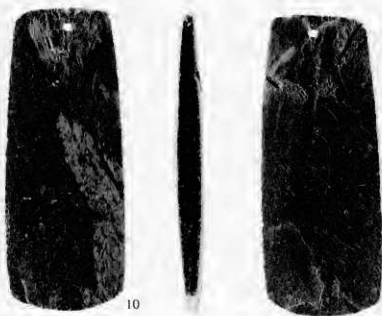


万年寺つつじ山古墳出土石製模造品（1）



万年寺つつじ山古墳出土石製模造品（2）

写真22



10



11



12



13



14

万年寺つつじ山古墳出土石製模造品（3）



1



2

林2号墳出土土器



1



2



3



4



5



6



7



8



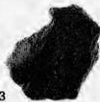
9



10



11



13



12



14



15



林2号墳出土土甕・朝顔形埴輪



1

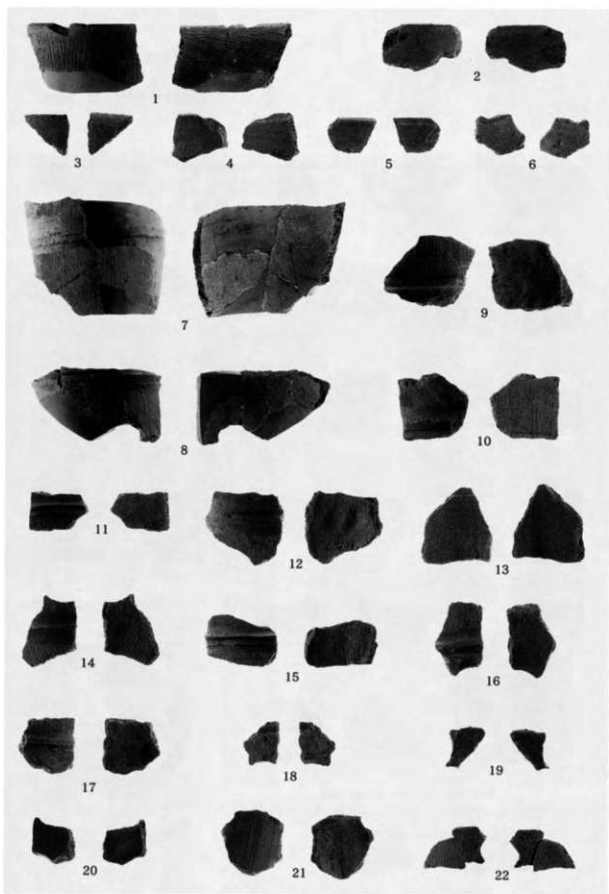


林2号墳出土形象埴輪

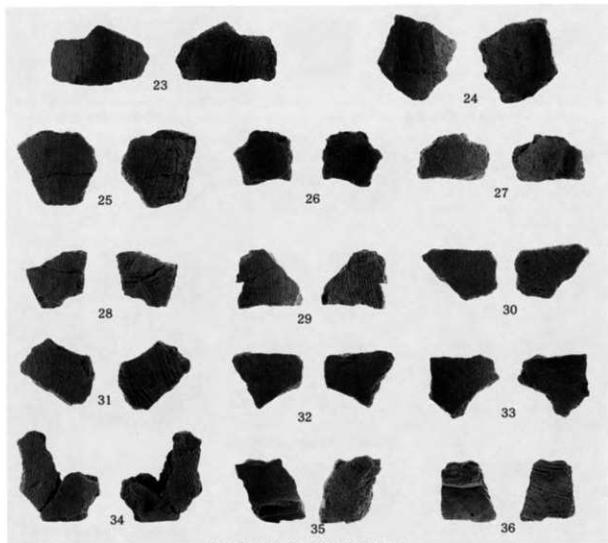


1

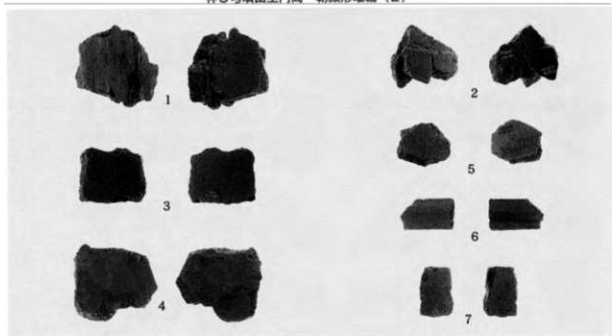
林3号墳出土土器



林3号墳出土土円筒・胡瓶形埴輪(1)



林3号墳出土円筒・朝顔形埴輪 (2)



林3号墳出土土形象埴輪



1



2



1

林4号墳出土土器

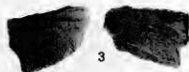
林4号墳出土形象埴輪



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

林4号墳出土円筒・朝顔形埴輪



1



2



3



4



6



7



5



8



9



10



11



12



13

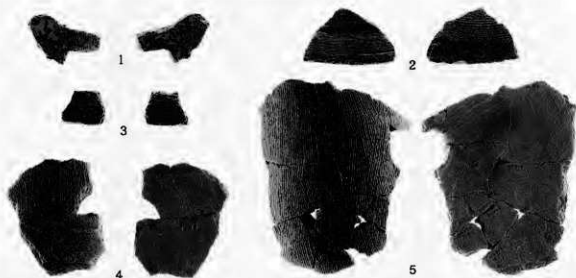


14

林5号墳出土円筒・朝顔形埴輪 (1)



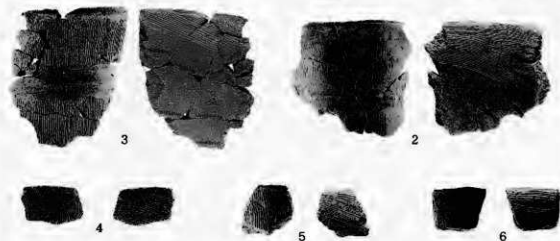
林5号墳出土円筒・朝顔形埴輪(2)



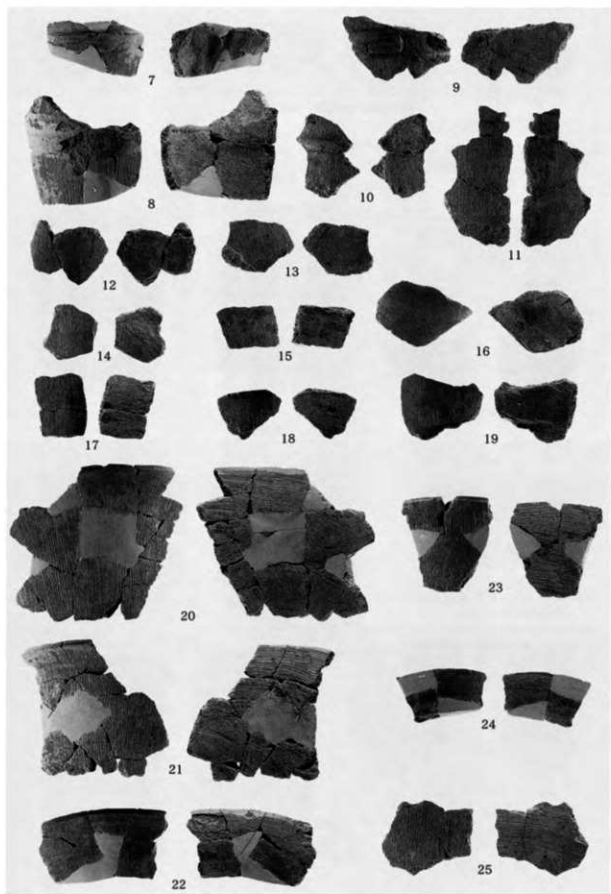
林5号墳出土形象埴輪



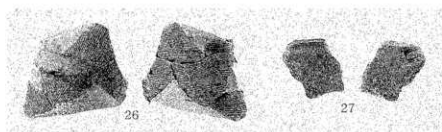
林6号墳出土土器



林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪(1)



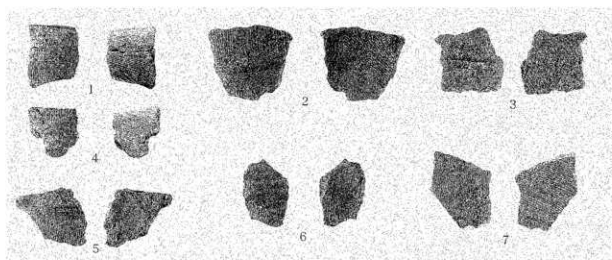
林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪(2)



林6号墳出土円筒・朝顔形埴輪 (3)



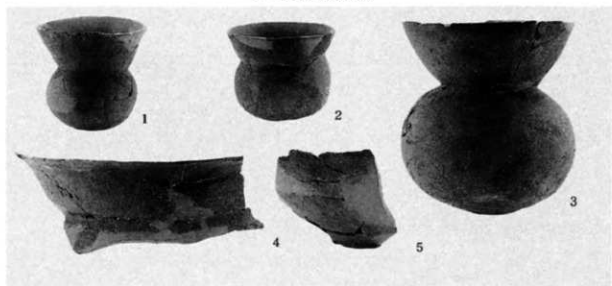
林6号墳出土土形象埴輪



林7号墳出土円筒埴輪



林7号墳出土土形象埴輪



林8号墳出土土器



1



2

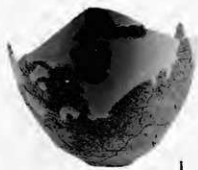


3



4

林1号土器棺



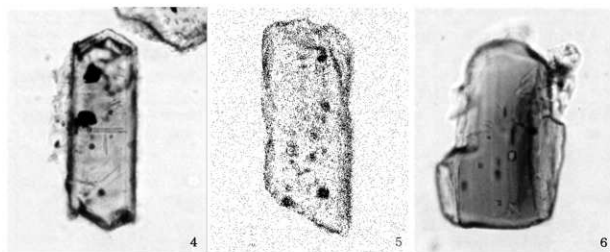
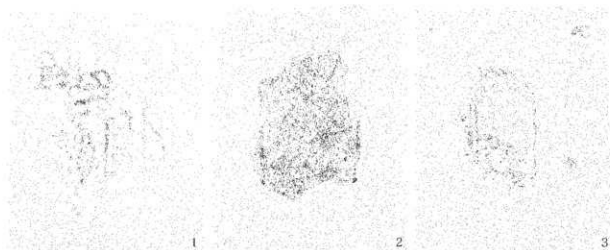
1

林2号土器棺

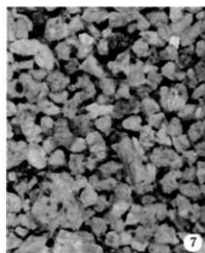


1

林3号土器棺



1~6 : 0.1mm



7 : 5mm

- 1、スポンジ状軽石型火山ガラス
 - 2、微英晶入り火山ガラス
 - 3、微英晶入り火山ガラス付長石
 - 4、微英晶入り火山ガラス付斜方輝石
 - 5、単斜輝石
 - 6、火山ガラス付き角閃石
 - 7、浅間Bテフラ軽石
- (1~5・7 : 35層下部、6 : 48層下部)

報告書抄録

ふりがな	あさひ・おじまこふんぐん はやしちく いち							
書名	旭・小島古墳群 林地区 I							
副書名	小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書IV							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話50495-25-1186							
発行年月日	西暦 2006 (平成18) 年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
旭・小島古墳群	埼玉県本庄市小島2・3丁目、小島、下野堂ほか	112119	171	36°14'48" (日本測地系)	139°10'19" (日本測地系)	19801107～ 20040325	11,009㎡	区画整理など
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳群	古墳群	古墳時代前期～終末期		古墳		埴輪、土師器、鉄釘、石製模造品		

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第3集

旭・小島古墳群

—林地区 I—

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書IV

平成18年3月24日 印刷

平成18年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷 朝日印刷工業株式会社